

第四百七十七條 前三條ノ規定ニ依リテ擔保ノ請求ヲ受ケタル者ハ遲滯ナク引受拒絶證書ト引換ニ相當ノ擔保ヲ供スルコトヲ要ス但擔保ニ代ヘテ相當ノ金額ヲ供託スルコトヲ得

第四百七十八條 前者カ擔保ヲ供シ又ハ供託ヲ爲シタルトキハ其後者全員ノ爲メ且其後者全員ニ對シテ之ヲ爲シタルモノト看做ス

所持人又ハ裏書人カ第四百七十五條又ハ第四百七十六條第二項ノ通知ヲ發シタルトキハ其通知ヲ受ケル者ノ後者全員ノ爲メニシタルモノト看做ス

第四百七十九條 左ノ場合ニ於テハ第四百七十七條ノ規定ニ依リテ供シタル擔保ハ其效力ヲ失ヒ又供託シタル金額ハ之ヲ取戻スコトヲ得

一 後日ニ至リ爲替手形ノ單純ナル引受アリタルトキ

二 手形金額及ヒ費用ノ支拂アリタルトキ

三 擔保ヲ供シ若クハ供託ヲ爲シタル者又ハ其前者カ償還ヲ爲シタルトキ

四 手形上ノ權利カ時効又ハ手續ノ欠缺ニ因リテ消滅シタルトキ

五 擔保ヲ供シ又ハ供託ヲ爲シタル者カ滿期日ヨリ一年內ニ償還ノ請求ヲ受ケサリシトキ

第四百八十條 引受人カ破産ノ宣告ヲ受ケタル場合ニ於テ相當ノ擔保ヲ供セサルトキハ所持人ハ豫備支拂人ノ引受ヲ求ムルコトヲ得但拒絶證書ヲ作ラシメ且遲滯ナク豫備支拂人ニ對シテ其通知ヲ發スルコトヲ要ス

豫備支拂人ナキトキ又ハ豫備支拂人ヲ單純ナ

ル引受ヲ爲ササリシトキハ所持人ハ其前者ニ對シテ相當ノ擔保ヲ請求スルコトヲ得此場合ニ於テハ第四百七十四條乃至第四百七十八條ノ規定ヲ準用ス

第四百八十一條 左ノ場合ニ於テハ前條第二項ノ規定ニ依リテ供シタル擔保ハ其效力ヲ失ヒ又供託シタル金額ハ之ヲ取戻スコトヲ得

一 豫備支拂人カ後日ニ至リ單純ナル引受ヲ爲シタルトキ

二 引受人カ後日ニ至リ相當ノ擔保ヲ供シタルトキ

三 第四百七十九條第二號乃至第五號ノ場合

第五節 支拂

第四百八十二條 一覽拂爲替手形ノ所持人ハ其

日附ヨリ一年內ニ爲替手形ヲ呈示シテ其支拂ヲ求ムルコトヲ要ス且振出人ハ之ヨリ短キ呈示期間ヲ定ムルコトヲ得

所持人カ拒絶證書ニ依リ前項ニ定メタル呈示ヲ爲シタルコトヲ證明セサルトキハ其前者ニ對スル手形上ノ權利ヲ失フ

第四百八十三條 支拂ハ爲替手形ト引換ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ要セス

支拂ヲ爲ス者ハ所持人ヲシテ爲替手形ニ其支拂ヲ受ケタル旨ヲ記載セシメ且之ニ署名セシムルコトヲ得

第四百八十四條 手形金額ノ全部ニ付キ引受アリタルトキト雖モ所持人ハ其一部ノ支拂ヲ拒ムコトヲ得ス

一部ノ支拂アリタルトキハ所持人ハ其旨ヲ爲

替手形ニ記載シ且其騰本ヲ作り署名ノ後之ヲ
交付スルコトヲ要ス

第四百八十五條 爲替手形ノ支拂ノ請求ヲキト
キハ引受人ハ支拂拒絶證書作成ノ期間經過ノ
後手形金額ヲ供託シテ債務ヲ免ルルコトヲ得

第六節 償還ノ請求

第四百八十六條 支拂人カ爲替手形ノ支拂ヲ爲
ササリシトキハ所持人ハ其前者ニ對シテ償還
ノ請求ヲ爲スコトヲ得

第四百八十七條 所持人カ前者ノ請求ヲ爲サン
ト欲スルトキハ支拂ヲ求ムル爲メ爲替手形ヲ
支拂人ニ呈示シ、若シ手形金額ノ支拂ナキト
キハ満期日又ハ其後二日內ニ支拂拒絶證書ヲ
作ラシメ且償還ヲ爲サシメント欲スル者ニ對
シ拒絶證書作成ノ翌日マテニ償還請求ノ通知

ヲ發スルコトヲ要ス

所持人カ前項ニ定メタル手續ヲ爲ササリシト
キハ其前者ニ對スル手形上ノ權利ヲ失フ

第四百八十八條 裏書人カ其後者ヨリ前條第一
項ノ通知ヲ受ケタルトキハ其前者ニ對シテ償
還ノ請求ヲ爲スコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ裏書人ハ償還ヲ爲サシメン
ト欲スル者ニ對シ自己カ通知ヲ受ケタル日ノ
翌日マテニ償還請求ノ通知ヲ發スルコトヲ要
ス

第四百八十九條 爲替手形ノ所持人ハ支拂拒絶
證書ヲ作ラシメサリシトキト雖モ其作成ヲ免
除シタル者ニ對シテハ手形上ノ權利ヲ失フコ
トナシ
所持人カ支拂拒絶證書ヲ作ラシメタルトキハ

其作成ヲ免除シタル者ト雖モ其費用ヲ償還ス
ル義務ヲ免ルルコトヲ得ス

第四百九十條 支拂地カ支拂人ノ住所地下異ナ
ル場合ニ於テ所持人カ償還ノ請求ヲ爲サント
欲スルトキハ支拂擔當者ニ、若シ爲替手形ニ
支拂擔當者ノ記載ナキトキハ支拂地ニ於テ支
拂人ニ爲替手形ヲ呈示シテ其支拂ヲ求ムルコ
トヲ要ス此場合ニ於テ支拂擔當者又ハ支拂人
カ支拂ヲ爲ササリシトキハ所持人ハ支拂地ニ
於テ第四百八十七條第一項ノ規定ニ從ヒ支拂
拒絶證書ヲ作ラシメ且償還請求ノ通知ヲ發ス
ルコトヲ要ス

爲替手形ニ支拂擔當者ノ記載アル場合ニ於テ
所持人カ前項ニ定メタル手續ヲ爲ササリシト
キハ引受人ニ對シテモ手形上ノ權利ヲ失フ

第四百九十一條 爲替手形ノ所持人ハ左ノ金額

ニ付キ償還ノ請求ヲ爲スコトヲ得

一 支拂アラサリシ手形金額及ヒ満期日以
後ノ法定利息

二 拒絶證書作成ノ手数料其他ノ費用

前項ノ金額ハ償還ノ請求ヲ受ケル者ノ住所
地カ支拂地下異ナル場合ニ於テハ支拂地ヨリ償
還ノ請求ヲ受ケル者ノ住所地下ニ於テ振出シタ
ル一覽拂ノ爲替手形ノ相場ニ依リテ之ヲ計算
ス若シ支拂地ニ於テ其相場ナキトキハ償還ノ
請求ヲ受ケル者ノ住所地下ニ最モ近キ地ニ宛テ
振出シタル一覽拂ノ爲替手形ノ相場ニ依ル

第四百九十二條 償還ノ請求ヲ受ケタル裏書人

ハ左ノ金額ニ付キ償還ノ請求ヲ爲スコトヲ得
一 其支拂ヒタル金額及ヒ支拂ノ日以後ノ

法定利息

二 其支出シタル費用

前條第二項ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第四百九十三條 爲替手形ノ所持人又ハ裏書人

ハ償還ノ請求ヲ爲ス爲メ其前者ヲ支拂人トシ

テ更ニ爲替手形ヲ振出スコトヲ得

第四百九十四條 所持人又ハ裏書人カ前條ノ規

定ニ依リテ振出ス爲替手形ハ償還ノ請求ヲ受

クル者ノ住所地ヲ以テ其支拂地下定メタル一

覽拂ノモノタルコトヲ要ス

所持人カ振出ス爲替手形ニハ本爲替手形ノ支

拂地ヲ以テ振出地下定メ裏書人カ振出ス爲替

手形ニハ其住所地ヲ以テ振出地下定ムルコト

ヲ要ス

第四百九十五條 償還ハ爲替手形、支拂拒絕證

書及ヒ償還計算書ト引換ニ非サレハ之ヲ爲ス

コトヲ要セス

償還ヲ爲ス者ハ之ヲ受クル者ヲシテ償還計算

書ニ償還ヲ受ケタル旨ヲ記載セシメ且之ニ署

名セシムルコトヲ得

第四百九十六條 第四百七十八條第二項ノ規定

ハ償還ノ請求ニ之ヲ準用ス

第七節 保證

第四百九十七條 爲替手形ヨリ生シタル債務ヲ

保證スル爲メ爲替手形其膾本又ハ補箋ニ署名

シタル者ハ其債務カ無効ナルトキト雖モ主ク

ル債務者ト同一ノ責任ヲ負フ

第四百九十八條 何人ノ爲メニ保證ヲ爲シタル

カ分明ナラサルトキハ其保證ハ引受人ノ爲メ

サリシトキハ振出人ノ爲メニ之ヲ爲シタルモ

ノト看做ス

第四百九十九條 保證人カ其債務ヲ履行シタル

トキハ所持人カ主タル債務者ニ對シテ有セシ

權利及ヒ主タル債務者カ其前者ニ對シテ有ス

ヘキ權利ヲ取得ス

第八節 參加

第一款 參加引受

第五百條 爲替手形ノ所持人カ引受拒絕證書ヲ

作ラシメタル場合ニ於テ豫備支拂人アルトキ

ハ其豫備支拂人ニ引受ヲ求めタル後ニ非サレ

ハ其前者ニ對シテ擔保ヲ請求スルコトヲ得ス

豫備支拂人カ引受ヲ爲サリシトキハ所持人

ハ其旨ヲ引受拒絕證書ニ記載セシムルコトヲ

要ス

第五百一條 爲替手形ノ所持人ハ豫備支拂人ニ

非サル者ノ參加引受ヲ拒ムコトヲ得

第五百二條 參加引受ヲ爲サントスル者數人ア

ルトキハ所持人ハ其選擇ニ從ヒ其一人ヲシテ

引受ヲ爲サシムルコトヲ得

第五百三條 參加引受ハ爲替手形ニ其旨ヲ記載

シ參加引受人署名スルニ依リテ之ヲ爲ス

參加引受人カ爲替手形ニ被參加人ヲ定メサリ

シトキハ其引受ハ振出人ノ爲メニ之ヲ爲シタ

ルモノト看做ス

第五百四條 所持人ハ引受拒絕證書ニ參加引受

アリタル旨ヲ記載セシメ且其證書作成ノ費用

ノ支拂ト引換ニ之ヲ參加引受人ニ交付スルコ

トヲ要ス

參加引受人ハ遲滞ナク前項ノ拒絕證書ヲ被參

加人ニ交付スルコトヲ要ス

第五百五條 參加引受人ハ支拂人カ手形金額ノ支拂ヲ爲ササル場合ニ於テ被參加人ノ後者ニ對シ支拂アラサリシ手形金額及ヒ費用ヲ支拂フ義務ヲ負フ但所持人カ滿期日又ハ其後二日內ニ支拂ヲ求ムル爲メ爲替手形ヲ參加引受人ニ呈示セサルトキハ參加引受人ハ其義務ヲ免ル

第五百六條 爲替手形ノ所持人其他被參加人ノ後者ハ參加引受ニ因テ擔保ヲ請求スル權利ヲ失フ

第五百七條 被參加人ハ其前者ニ對シテ擔保ヲ請求スルコトヲ得此場合ニ於テハ第四百七十五條乃至第四百七十九條ノ規定ヲ準用ス

第一款 參加支拂

第五百八條 爲替手形ノ所持人カ支拂拒絕證書ヲ作ラシメタル場合ニ於テ豫備支拂人又ハ參加引受人アルトキハ所持人ハ滿期日又ハ其後二日內ニ參加引受人ニ、若シ參加引受人ナキトキ又ハ參加引受人カ支拂ヲ爲ササリシトキハ豫備支拂人ニ爲替手形ヲ呈示シテ其支拂ヲ求メタル後ニ非サレハ其前者ニ對シテ償還ノ請求ヲ爲スコトヲ得ス

參加引受人又ハ豫備支拂人カ支拂ヲ爲ササリシトキハ所持人ハ其旨ヲ支拂拒絕證書ニ記載セシムルコトヲ要ス

第五百九條 爲替手形ノ所持人ハ豫備支拂人又ハ豫備支拂人ヲ指定シタル者又ハ被參加人及ヒ其後者ニ對スル手形上ノ權利ヲ失フ

ハ參加引受人ニ非サル者ノ參加支拂ト雖モ之ヲ拒ムコトヲ得ス若シ之ヲ拒ミタルトキハ被參加人及ヒ其後者ニ對スル手形上ノ權利ヲ失フ

第五百十條 參加支拂ヲ爲サントスル者數人アルトキハ所持人ハ最多數ノ者ヲシテ債務ヲ免レシムル効力ヲ有スル支拂ヲ受クルコトヲ要ス

第五百十一條 豫備支拂人又ハ參加引受人ニ非サル參加支拂人カ被參加人ヲ示ササリシトキハ其支拂ハ支拂人ノ爲メニ之ヲ爲シタルモノト看做ス

第五百十二條 所持人ハ支拂拒絕證書ニ參加支拂アリタル旨ヲ記載セシメ且手形金額及ヒ費用ノ支拂ト引換ニ其拒絕證書及ヒ爲替手形ヲ

參加支拂人ニ交付スルコトヲ要ス

第五百十三條 參加支拂人カ支拂ヲ爲シタルトキハ引受人、被參加人及ヒ其前者ニ對スル所持人ノ權利ヲ取得ス

第九節 拒絕證書

第五百十四條 拒絕證書ハ爲替手形ノ所持人ノ請求ニ因リ公證人又ハ執達吏之ヲ作ル

第五百十五條 拒絕證書ニハ左ノ事項ヲ記載シ公證人又ハ執達吏之ニ署名スルコトヲ要ス

- 一 爲替手形、其贖本及ヒ補箋ニ記載シタル事項
- 二 拒絕者及ヒ被拒絕者ノ氏名又ハ商號
- 三 拒絕者ニ對シテ爲シタル請求ノ趣旨及ヒ拒絕者カ其請求ニ應セサリシコト又ハ拒絕者ニ面會スルコト能ハサリシ理由

四 前號ノ請求ヲ爲シ又ハ之ヲ爲スコト能ハサリシ地及ヒ年月日

五 拒絶者ノ營業所、住所又ハ居所カ知レサル場合ニ於テ其地ノ官署又ハ公署ニ問合ヲ爲シタルコト

六 法定ノ場所外ニ於テ拒絶證書ヲ作ルトキハ拒絶者カ之ヲ承諾シタルコト

七 參加引受又ハ參加支拂アルトキハ參加ノ種類及ヒ參加人竝ニ被參加人ノ氏名又ハ商號

第五百十六條 數人ニ對シテ手形上ノ請求ヲ爲スヘキトキハ其請求ニ付キ一通ノ拒絶證書ヲ作ラシムルヲ以テ足ル

スルコトヲ要ス
拒絶證書カ滅失シタルトキハ利害關係人ハ其贖本ノ交付ヲ請求スルコトヲ得此贖本ハ原本ト同一ノ效力ヲ有ス
第十節 爲替手形ノ複本及ヒ贖本
第五百十八條 爲替手形ノ所持人ハ振出人ニ對シテ其爲替手形ノ複本ノ交付ヲ請求スルコトヲ得
但所持人カ受取人ニ非サルトキハ順次ニ其前者ヲ經由シテ之ヲ請求スルコトヲ要ス
振出人カ爲替手形ノ複本ヲ作リタルトキハ各裏書人ハ各通ニ其裏書ヲ爲スコトヲ要ス
第五百十九條 爲替手形ノ複本ニ其複本タルコトヲ示ササルトキハ其各通ハ獨立ノ爲替手形トシテ其效力ヲ有ス

第五百二十條 爲替手形ノ複本ヲ作リタル場合ニ於テ其一通ノ支拂アリタルトキハ他ノ各通ハ其效力ヲ失フ但引受アルモノハ此限ニ在ラズ

二人以上ニ各別ニ數通ノ爲替手形ノ裏書ヲ爲シタル者又ハ數通ノ爲替手形ニ引受ヲ爲シタル者ハ支拂ノ時ニ於テ返還アラサリシ各通ニ付キ手形上ノ責任ヲ免ルルコトヲ得ス

第五百二十一條 爲替手形ノ複本ノ所持人カ引受ヲ求ムル爲メ其一通ヲ送付シタルトキハ他ノ各通ニ其送付先ヲ記載スルコトヲ要ス
前項ノ記載アル爲替手形ノ所持人ハ引受ヲ求ムル爲メニ送付シタル一通ノ爲替手形ヲ受取リタル者ニ對シテ其返還ヲ請求スルコトヲ得若シ其者カ之ヲ返還セサルトキハ拒絶證書ニ

依リ其事實及ヒ他ノ一通又ハ數通ノ爲替手形ヲ以テ引受又ハ支拂ヲ受クルコト能ハサリシコトヲ證明スルニ非サレハ其前者ニ對シテ擔保又ハ償還ノ請求ヲ爲スコトヲ得ス

第五百二十二條 爲替手形ノ所持人ハ其贖本ヲ作ルコトヲ得
爲替手形ノ贖本ニ或事項ヲ記載シタルトキハ其事項ト原本ニ記載シタル事項トヲ區別スルコトヲ要ス

第五百二十三條 所持人カ爲替手形ノ引受ヲ求ムル爲メ其原本ヲ送付シタル場合ニ於テ其贖本ヲ作リタルトキハ之ニ其原本ノ送付先ヲ記載スルコトヲ要ス
前項ノ記載アル贖本ノ所持人ハ原本ヲ受取リタル者ニ對シテ其返還ヲ請求スルコトヲ得

第五百二十四條

引受ヲ求ムル爲メニ送付シタル爲替手形ヲ受取りタル者カ之ヲ返還セサル場合ニ於テ其賸本ノ所持人カ拒絕證書ニ依リテ其事實ヲ證明スルトキハ賸本ニ署名シタル者ニ對シテ擔保ノ請求ヲ爲シ又賸本ニ記載シタル滿期日カ到來シタル後ハ償還ノ請求ヲ爲スコトヲ得

第三章 約束手形

第五百二十五條

約束手形ニハ左ノ事項ヲ記載シ振出人之ニ署名スルコトヲ要ス

- 一 其約束手形タルコトヲ示スヘキ文字
- 二 一定ノ金額
- 三 受取人ノ氏名又ハ商號
- 四 單純ナル支拂ノ約束
- 五 振出ノ年月日

六 一定ノ滿期日

七 振出地

第五百二十六條

振出人カ約束手形ニ支拂地ヲ記載セザリシトキハ振出地ヲ以テ其支拂地トス

第五百二十七條

一覽後定期拂ノ約束手形ノ所持人ハ其日附ヨリ一年內ニ振出人ニ約束手形ヲ呈示スルコトヲ要ス但振出人ハ之ヨリ短キ呈示期間ヲ定ムルコトヲ得

第五百二十八條

所持人カ一覽後定期拂ノ約束手形ヲ呈示シタル場合ニ於テ振出人カ呈示ヲ受ケタル旨又ハ其日附ヲ約束手形ニ記載セザ

第四章 小切手

第五百二十九條

小切手ニハ左ノ事項ヲ記載シ振出人之ニ署名スルコトヲ要ス

- 一 其小切手タルコトヲ示スヘキ文字
 - 二 一定ノ金額
 - 三 支拂人ノ氏名又ハ商號
 - 四 受取人ノ氏名若クハ商號又ハ所持人ニ支拂フヘキコト
 - 五 單純ナル支拂ノ委託
 - 六 振出ノ年月日
 - 七 支拂地
- 第五百三十條 小切手ノ振出人ハ自己ヲ受取人ト定ムルコトヲ得
- 第五百三十一條 小切手ハ一覽拂ノモノトス
- 第五百三十二條 小切手ノ所持人ハ其日附ヨリ

リシトキハ所持人ハ呈示期間內ニ拒絕證書ヲ作ラシムルコトヲ要ス此場合ニ於テハ其拒絕證書作成ノ日ヲ以テ呈示ノ日ト看做ス

所持人カ拒絕證書ヲ作ラシメザリシトキハ振出人以外ノ前者ニ對スル手形上ノ權利ヲ失フ振出人カ呈示ノ日附ヲ記載セザリシ場合ニ於テ所持人カ拒絕證書ヲ作ラシメザリシトキハ呈示期間ノ末日ヲ以テ呈示ノ日ト看做ス

第五百二十九條

第四百四十六條、第四百四十九條乃至第四百五十一條、第四百五十三條乃至第四百五十七條、第四百五十九條乃至第四百六十四條、第四百七十一條、第四百八十条乃至第四百九十九條、第五百八條乃至第五百十七條及第五百二十二條ノ規定ハ約束手形ニ之ヲ準用ス

一週間内ニ小切手ヲ呈示シテ其支拂ヲ求ムル
 コトヲ要ス
 所持人カ前項ニ定メタル呈示ヲ爲ササリシト
 キハ其前者ニ對シテ償還ノ請求ヲ爲スコトヲ
 得ス

第五百三十四條 小切手ノ所持人カ其前者ニ對
 シテ償還ノ請求ヲ爲スニハ支拂拒絶證書ノ作
 成ニ代ヘ支拂人ヲシテ前條第一項ニ定メタル
 期間内ニ支拂拒絶ノ旨及ヒ其年月日ヲ小切手
 ニ記載セシメ且之ニ署名セシムルヲ以テ足ル
第五百三十五條 小切手ノ振出人又ハ所持人カ
 其表面ニ二條ノ平行線ヲ畫キ其線内ニ銀行又
 ハ之ト同一ノ意義ヲ有スル文字ヲ記載シタル
 トキハ支拂人ハ銀行ニ對シテノミ支拂ヲ爲ス
 コトヲ得

振出人又ハ所持人カ平行線内ニ特定セル銀行
 ノ商號ヲ記載シタルトキハ支拂人ハ其銀行ニ
 對シテノミ支拂ヲ爲スコトヲ得但其銀行カ其
 商號ヲ抹消シテ他ノ銀行ノ商號ヲ記載シ之ニ
 取立ノ委任ヲ爲スコトヲ妨ケス

第五百三十六條 左ノ場合ニ於テハ振出人ハ五
 圓以上千圓以下ノ過料ニ處セラル
 一 資金ナク又ハ信用ヲ得スシテ小切手ヲ
 振出シタルトキ
 二 小切手ニ虚偽ノ日附ヲ記載シタルトキ
第五百三十七條 第四百四十六條、第四百五十
 二條、第四百五十五條、第四百五十七條、第
 四百五十九條乃至第四百六十二條、第四百六
 十四條、第四百八十三條、第四百八十四條、
 第四百八十六條乃至第四百八十九條、第四百

九十一條、第四百九十二條、第四百九十五條
 、第四百九十六條、第五百十四條、第五百十
 五條及ヒ第五百十七條ノ規定ハ小切手ニ之ヲ
 準用ス

第五編 海商

第一章 船舶及ヒ船舶所有者

第五百三十八條 本法ニ於テ船舶トハ商行爲ヲ
 爲ス目的ヲ以テ航海ノ用ニ供スルモノヲ謂フ
 本編ノ規定ハ端舟其他櫓權ノミヲ以テ運轉シ
 又ハ主トシテ櫓權ヲ以テ運轉スル舟ニハ之ヲ
 適用セス

第五百三十九條 船舶ノ屬具目錄ニ記載シタル
 物ハ其從物ト推定ス
第五百四十條 船舶所有者ハ特別法ノ定ムル所
 ニ從ヒ登記ヲ爲シ且船舶國籍證書ヲ請受クル

コトヲ要ス
 前項ノ規定ハ總噸數三十噸未満又ハ積石數二
 百石未満ノ船舶ニハ之ヲ適用セス

第五百四十一條 船舶所有者權ノ讓渡ハ其登記ヲ
 爲シ且船舶國籍證書ニ之ヲ記載スルニ非サレ
 ハ之ヲ以テ第三者ニ對抗スルコトヲ得ス
第五百四十二條 航海中ニ在ル船舶、所有者權ヲ
 讓渡シタル場合ニ於テ特約ナキトキハ其航海
 ニ因リテ生スル損益ハ讓受人ニ歸スヘキモノ
 トス

第五百四十三條 差押及ヒ假差押ハ發航ノ準備
 ナ終ハリタル船舶ニ對シテハ之ヲ爲スコトヲ
 得ス
 但其船舶カ發航ヲ爲ス爲メニ生シタル債務ニ
 付テハ此限ニ在ラス

第五百四十四條

船舶所有者ハ船長カ其法定ノ權限内ニ於テ爲シタル行爲又ハ船長其他ノ船員カ其職務ヲ行フニ當タリ他人ニ加ヘタル損害ニ付テハ航海ノ終ニ於テ船舶ノ運送賃及ヒ船舶所有者カ其船舶ニ付キ有スル損害賠償又ハ報酬ノ請求權ヲ債權者ニ委付シテ其責ヲ免ルルコトヲ得
但船舶所有者ニ過失アリタルトキハ此限ニ在ラス

前項ノ規定ハ雇傭契約ニ因リテ生シタル船員ノ權利ニ付テハ之ヲ適用セス

第五百四十五條

船舶所有者カ債權者ノ同意ヲ得シテ更ニ航海ヲ爲サシメタルトキハ前條ニ定メタル權利ヲ行フコトヲ得ス

第五百四十六條

船舶共有者ノ間ニ在リテハ船

船ノ利用ニ關スル事項ハ各共有者ノ持分ノ價格ニ從ヒ其過半數ヲ以テ之ヲ決ス

第五百四十七條

船舶共有者ハ其持分ノ價格ニ應シ船舶ノ利用ニ關スル費用ヲ負擔スルコトヲ要ス

第五百四十八條

船舶共有者ハ新ニ航海ヲ爲シ又ハ船舶ノ大修繕ヲ爲スヘキコトヲ決議シタルトキハ其決議ニ對シテ異議アル者ハ他ノ共有者ニ對シ相當代價ヲ以テ自己ノ持分ヲ買取ルヘキコトヲ請求スルコトヲ得
前項ノ請求ヲ爲サント欲スル者ハ決議ノ日ヨリ三日内ニ他ノ共有者又ハ船舶管理人ニ對シテ其通知ヲ發スルコトヲ要ス但此期間ハ決議ニ加ハラサリシ者ニ付テハ其決議ノ通知ヲ受ケタル日ノ翌日ヨリ之ヲ起算ス

第五百四十九條

船舶共有者ハ其持分ノ價格ニ應シ船舶ノ利用ニ付テ生シタル債務ヲ辨濟スル責ニ任ス

第五百五十條

損益ノ分配ハ每航海ノ終ニ於テ船舶共有者ノ持分ノ價格ニ應シテ之ヲ爲ス

第五百五十一條

船舶共有者間ニ組合關係アルトキト雖モ各共有者ハ他ノ共有者ノ承諾ヲ得スシテ其持分ノ全部又ハ一部ヲ他人ニ讓渡スコトヲ得但船舶管理人ハ此限ニ在ラス

第五百五十二條

船舶共有者ハ船舶管理人ヲ選任スルコトヲ要ス

船舶共有者ニ非サル者ヲ船舶管理人ト爲スニハ共有者全員ノ同意アルコトヲ要ス

船舶管理人ノ選任及ヒ其代理權ノ消滅ハ之ヲ登記スルコトヲ要ス

第五百五十三條

船舶管理人ハ左ニ掲ケタル行爲ヲ除ク外船舶共有者ニ代ハリテ船舶ノ利用ニ關スル一切ノ裁判上又ハ裁判外ノ行爲ヲ爲ス權限ヲ有ス

一 船舶ノ讓渡、委付石クハ貸貸ヲ爲シ又ハ之ヲ抵當ト爲スコト

二 船舶ヲ保險ニ付スルコト

三 新ニ航海ヲ爲スコト

四 船舶ノ大修繕ヲ爲スコト

五 借財ヲ爲スコト

船舶管理人ノ代理權ニ加ヘタル制限ハ之ヲ以テ善意ノ第三者ニ對抗スルコトヲ得ス

第五百五十四條

船舶管理人ハ特ニ帳簿ヲ備ヘ之ニ船舶ノ利用ニ關スル一切ノ事項ヲ記載スルコトヲ要ス

船舶管理人ハ每航海ノ終ニ於テ遲滞ナク其航海ニ關スル計算ヲ爲シテ各船舶共有者ノ承諾ヲ求ムルコトヲ要ス

第五百五十五條 船舶共有者ノ持分ノ移轉又ハ其國籍喪失ニ因リテ船舶カ日本ノ國籍ヲ喪失スハキトキハ他ノ共有者ハ相當代價ヲ以テ其持分ヲ買取リ又ハ其競賣ヲ裁判所ニ請求スルコトヲ得

社員ノ持分ノ移轉ニ因リ會社ノ所有ニ屬スル船舶カ日本ノ國籍ヲ喪失スヘキトキハ合名會社ニ在テハ他ノ社員、合資會社及ヒ株式合資會社ニ在テハ他ノ無限責任社員ハ相當代價ヲ以テ其持分ヲ買取ルコトヲ得

第五百五十六條 船舶ノ貸借ハ之ヲ登記シタルトキハ爾後其船舶ニ付キ物權ヲ取得シタル

者ニ對シテモ其效力ヲ生ス

第五百五十七條 船舶ノ賃借人カ商行為ヲ爲ス目的ヲ以テ其船舶ヲ航海ノ用ニ供シタルトキハ其利用ニ關スル事項ニ付テハ第三者ニ對シテ船舶所有者ト同一ノ權利義務ヲ有ス
前項ノ場ニ於テ船舶ノ利用ニ付キ生シタル先取特權ハ船舶所有者ニ對シテモ其效力ヲ生ス但先取特權者カ其利用ノ契約ニ反スルコトヲ知レルトキハ此限ニ在ラス

第二章 船員

第一節 船長

第五百五十八條 船長ハ其職務ヲ行フニ付キ注意ヲ怠ラサリシコトヲ證明スルニ非サレハ船舶所有者、備船者、荷送人其他ノ利害關係人ニ對シテ損害賠償ノ責ヲ免ルルコトヲ得ス

船長ハ船舶所有者ノ指圖ニ從ヒタルトキト雖モ船舶所有者外ノ者ニ對シテハ前項ニ定メタル責任ヲ免ルルコトヲ得ス

第五百五十九條 海員カ其職務ヲ行フニ當タリ他人ニ損害ヲ加ヘタル場合ニ於テ船長ハ監督ヲ怠ラサリシコトヲ證明スルニ非サレハ損害賠償ノ責ヲ免ルルコトヲ得ス

第五百六十條 船長カ已ムコトヲ得サル事由ニ因リテ自ラ船舶ヲ指揮スルコト能ハサルトキハ法令ニ別段ノ定アル場合ヲ除ク外他人ヲ選任シテ自己ノ職務ヲ行ハシムルコトヲ得此場合ニ於テハ船長ハ其選任ニ付キ船舶所有者ニ對シテ其責ニ任ス

第五百六十一條 船長ハ發航前船舶ノ航海ニ支障ナキヤ否ヤ其他航海ニ必要ナル準備ノ整頓

セルヤ否ヤヲ検査スルコトヲ要ス

第五百六十二條 船長ハ左ニ掲ケタル書類ヲ船中ニ備ヘ置クコトヲ要ス

- 一 船舶國籍證書
- 二 海員名簿
- 三 器具目錄
- 四 航海日誌
- 五 旅客名簿
- 六 運送契約及ヒ積荷ニ關スル書類
- 七 稅關ヨリ交付シタル書類

前項第三號乃至第五號ニ掲ケタル書類ハ外國ニ航行セサル船舶ニ限り命令ヲ以テ之ヲ備フルコトヲ要セサルモノト定ムルコトヲ得

第五百六十三條 船長ハ已ムコトヲ得サル場合ヲ除ク外自己ニ代ハリテ船舶ヲ指揮スヘキ者

二其職務ヲ委任シタル後ニ非サレハ荷物ノ船積及ヒ旅客ノ乗込ノ時ヨリ荷物ノ陸揚及ヒ旅客ノ上陸ノ時マテ其指揮スル船舶ヲ去ルコトヲ得ス

第五百六十四條 船長ハ航海ノ準備カ終ハリタルトキハ遲滞ナク發航ヲ爲シ且必要アル場合ノ除ク外豫定ノ航路ヲ變更セスシテ到達港マテ航行スルコトヲ要ス

第五百六十五條 船長ハ航海中最モ利害關係人ノ利益ニ適スヘキ方法ニ依リテ積荷ノ處分ヲ爲スコトヲ要ス
利害關係人ハ船長ノ行爲ニ因リ其積荷ニ付テ生シタル債權ノ爲メ之ヲ債權者ニ委付シテ其責ヲ免ルルコトヲ得但利害關係人ニ過失アリタルトキハ此限ニ在ラス

第五百六十六條

船籍港外ニ於テハ船長ハ航海ノ爲メニ必要ナル一切ノ裁判上又ハ裁判外ノ行爲ヲ爲ス權限ヲ有ス

船籍港ニ於テハ船長ハ特ニ委任ヲ受ケタル場合ヲ除ク外海員ノ雇入及ヒ雇止ヲ爲ス權限ノミヲ有ス

第五百六十七條

船長ノ代理權ニ加ヘタル制限ハ之ヲ以テ善意ノ第三者ニ對抗スルコトヲ得

第五百六十八條

船長ハ船舶ノ修繕救援又ハ救助ノ費用其他航海ヲ繼續スルニ必要ナル費用ヲ支辨スル爲メニ非サレハ左ニ掲ケタル行爲ヲ爲スコトヲ得ス

- 一 船舶ヲ抵當ト爲スコト
- 二 借財ヲ爲スコト

三 積荷ノ全部又ハ一部ヲ賣却又ハ質入スルコト但第五百六十五條第一項ノ場合ハ此限ニ在ラス

船長カ積荷ヲ賣却又ハ質入シタル場合ニ於ケル損害賠償ノ額ハ其積荷ノ到達スヘカリシ時ニ於ケル陸揚港ノ價格ニ依リテ之ヲ定ム但其價格中ヨリ支拂フコトヲ要セサリシ費用ヲ控除スルコトヲ要ス

第五百六十九條

船長カ特ニ委任ヲ受ケスシテ航海ノ爲メニ費用ヲ出タシ又ハ債務ヲ負擔シタルトキハ船舶所有者ハ船長ニ對シテ第五百四十四條ニ定メタル權利ヲ行フコトヲ得

第五百七十條

船籍港外ニ於テ船舶カ修繕スルコト能ハサルニ至リタルトキハ船長ハ管海官廳ノ認可ヲ得テ之ヲ競賣スルコトヲ得

第五百七十一條

左ノ場合ニ於テハ船舶ハ修繕スルコト能ハサルニ至リタルモノト看做ス

- 一 船舶カ其現在地ニ於テ修繕ヲ受クルコト能ハス且修繕ヲ爲スヘキ地ニ到ルコト能ハサルトキ
- 二 修繕費カ船舶ノ價額ノ四分ノ三ニ超ユルトキ

前項第二號ノ價額ハ船舶カ航海中毀損シタル場合ニ於テハ其發航ノ時ニ於ケル價額トシ其他ノ場合ニ於テハ其毀損前ニ有セシ價額トス

第五百七十二條

船長ハ航海ヲ繼續スル爲メ必要ナルトキハ積荷ヲ航海ノ用ニ供スルコトヲ得此場合ニ於テハ第五百六十八條第二項ノ規定ヲ準用ス

第五百七十三條

船長ハ遲滞ナク航海ニ關スル

重要ナル事項ヲ船舶所有者ニ報告スルコトヲ要ス船長ハ毎航海ノ終ニ於テ遲滞ナク其航海ニ關スル計算ヲ爲シテ船舶所有者ノ承認ヲ求メ又船舶所有者ノ請求アルトキハ何時ニテモ計算ノ報告ヲ爲スコトヲ要ス

第五百七十四條 船舶所有者ハ何時ニテモ船長ヲ解任スルコトヲ得但正當ノ理由ナクシテ之ヲ解任シタルトキハ船長ハ船舶所有者ニ對シ解任ニ因リテ生シタル損害ノ賠償ヲ請求スルコトヲ得

船長カ船舶共有者ナル場合ニ於テ其意ニ反シテ解任セラレタルトキハ他ノ共有者ニ對シ相當代價ヲ以テ自己ノ持分ヲ買取ルヘキコトヲ請求スルコトヲ得

船長 前項ノ請求ヲ爲サント欲スルトキハ遲

滞ナク他ノ共有者又ハ船舶管理人ニ對シテ其通知ヲ發スルコトヲ要ス

第五百七十五條 船長ノ船舶所有者ニ對スル債權ハ一年ヲ經過シタルトキハ時効ニ因リテ消滅ス

第二節 海員

第五百七十六條 海員ハ其雇入ノ手續カ終ハリタルトキハ船長ノ指定シタル時ニ於テ船舶ニ乗込ムコトヲ要ス

海員ハ船長ノ許可ヲ得ルニ非サレハ其乗込ミタル船舶ヲ去ルコトヲ得ス

第五百七十七條 海員ノ服役中ノ食料ハ船舶所有者ノ負擔トス

第五百七十八條 海員カ服役中不行跡其他重大ナル過失ニ因ラスシテ疾病ニ罹リ又ハ傷疾ヲ

受ケタルトキハ船舶所有者ハ三ヶ月ヲ超エサル期間内ノ治療及ヒ看護ノ費用ヲ負擔ス

前項ノ場合ニ於テ海員ハ其服役シタル期間ニ對スル給料ヲ請求スルコトヲ得但其職務ヲ行フニ因リテ疾病ニ罹リ又ハ傷疾ヲ受ケタルトキハ其給料ノ全額ヲ請求スルコトヲ得

第五百七十九條 一航海ニ付キ給料ヲ定メタル場合ニ於テ航海ノ日數ヲ延長シ又ハ不可抗力ニ因ラスシテ其里程ヲ延長シタルトキハ海員ハ其割合ニ應シテ給料ノ増加ヲ請求スルコトヲ得但航海ノ日數又ハ里程ヲ短縮シタルトキト雖モ給料ノ全額ヲ請求スルコトヲ得

第五百八十條 海員カ就役ノ後死亡シタルトキハ船舶所有者ハ死亡ノ日マテノ給料ヲ支拂フコトヲ要ス

海員カ其職務ヲ行フニ因リテ死亡シタルトキハ其葬式ノ費用ハ船舶所有者ノ負擔トス

第五百八十一條 左ノ場合ニ於テハ船長ハ海員ヲ雇止ムルコトヲ得

一 發航前海員カ其職務ニ不適任ナルコトヲ認めタルトキ

二 海員カ著シク其職務ヲ怠リ又ハ其職務ニ關シ之ニ重大ナル過失アリタルトキ

三 海員カ禁錮以上ノ刑ニ處セラレタルトキ

四 海員カ疾病ニ罹リ又ハ傷疾ヲ受ケ其職務ニ堪ヘサルニ至リタルトキ

五 不可抗力ニ因リ發航ヲ爲シ又ハ航海ヲ繼續スルコト能ハサルニ至リタルトキ

前項第一號乃至第三號ノ場合ニ於テハ海員ハ

其服役シタル期間ニ對スル給料ヲ請求スルコトヲ得

第一項第四號及ヒ第五號ノ場合ニ於テハ海員ハ其雇止ノ日マテノ給料及ヒ雇入港マテノ送還ヲ請求スルコトヲ得但第四號ノ場合ニ於テ海員ニ過失アルトキハ前項ノ規定ヲ準用ス

第五百八十二條 海員カ前條第一項ニ掲ケタル事由ニ因ラスシテ雇止メラレタルトキハ其服役シタル期間ニ對スル給料ノ外一ヶ月分ノ給料ヲ請求スルコトヲ得若シ雇入港外ニ於テ雇止メラレタルトキハ雇入港マテ歸航スルニ必要ナル期間ニ對スル給料及ヒ雇入港マテノ送還ヲ請求スルコトヲ得

第五百八十三條 左ノ場合ニ於テハ海員ハ雇止ヲ請求スルコトヲ得

一 船舶カ日本ノ國籍ヲ喪失シタルトキ

二 自己ノ過失ニ因ラスシテ疾病ニ罹リ又ハ傷疾ヲ受ケ其職務ニ堪ヘサルニ至リタルトキ

三 船長ヨリ虐待ヲ受ケタルトキ

前項ノ場合ニ於テハ海員ハ其雇止ノ日マテノ給料及ヒ雇入港マテノ送還ヲ請求スルコトヲ得

第五百八十四條 航海中船舶ノ所有者カ變更シタルトキハ海員ハ新所有者ニ對シ雇傭契約ニ因リテ生シタル權利義務ヲ有ス

第五百八十五條 海員ノ雇入期間ハ一年ヲ超ユルコトヲ得ス若シ之ヨリ長キ期間ヲ以テ海員ヲ雇入レタルトキハ其期間ハ之ヲ一年ニ短縮ス

海員ノ雇入ハ之ヲ更新スルコトヲ得但其期間ハ更新ノ時ヨリ一年ヲ超ユルコトヲ得ス

第五百八十六條 雇入期間ノ定ナキトキハ海員ハ特約アル場合ヲ除ク外船舶カ安全ニ碇泊シ且積荷ノ陸揚及ヒ旅客ノ上陸カ終ハリタル後ニ非サレバ其雇止ヲ請求スルコトヲ得ス

第五百八十七條 海員ノ雇入契約ハ左ノ事由ニ因リテ終了ス

一 船舶カ沈没シタルコト

二 船舶カ修繕スルコト能ハサルニ至リタルトキ

三 船舶カ損獲セラレタルコト

前項ノ場合ニ於テハ海員ハ契約終了ノ日マテノ給料及ヒ雇入港マテノ送還ヲ請求スルコトヲ得

第五百八十八條 海員カ雇入港マテノ送還ヲ請求スル權利ヲ有スル場合ニ於テハ送還ニ代ヘテ其費用ヲ請求スルコトヲ得

第五百八十九條 第五百七十五條ノ規定ハ海員ノ債權ニ之ヲ準用ス

第三章 運送

第一節 物品運送

第一款 總則

第五百九十條 船舶ノ全部又ハ一部ヲ以テ運送契約ノ目的ト爲シタルトキハ各當事者ハ相手方ノ請求ニ因リ運送契約書ヲ交付スルコトヲ要ス

第五百九十一條 船舶所有者ハ傭船者又ハ荷送人ニ對シ發航ノ當時船舶カ安全ニ航海ヲ爲スニ堪フルコトヲ擔保ス

第五百九十二條 船舶所有者ハ特約ヲ爲シタルトキト雖モ自己ノ過失、船員其他ノ使用人ノ惡意若クハ重大ナル過失又ハ船舶カ航海ニ堪ヘサルニ因リテ生シタル損害ヲ賠償スル責ヲ免ルルコトヲ得ス

第五百九十三條 法令ニ違反シ又ハ契約ニ依ラズシテ船積シタル運送品ハ船長ニ於テ何時ニテモ之ヲ陸揚シ、若シ船舶又ハ積荷ニ危害チ及ホス虞アルトキハ之ヲ放棄スルコトヲ得但船長力之ヲ運送スルトキハ其船積ノ地及ヒ時ニ於ケル同種ノ運送品ノ最高ノ運送賃ヲ請求スルコトヲ得

前項ノ規定ハ船舶所有者其他ノ利害關係人カ損害賠償ノ請求ヲ爲スコトヲ妨ケス
第五百九十四條 船舶ノ全部ヲ以テ運送契約ノ

目的ト爲シタル場合ニ於テ運送品ヲ船積スルニ必要ナル準備ヲ整頓シタルトキハ船舶所有者ハ運滞ナク備船者ニ對シテ其通知ヲ發スルコトヲ要ス

備船者カ運送品ヲ船積スヘキ期間ノ定アル場合ニ於テハ其期間ハ前項ノ通知アリタル日ノ翌日ヨリ之ヲ起算ス其期間經過ノ後運送品カ船積シタルトキハ船舶所有者ハ特約ナキトキト雖モ相當ノ報酬ヲ請求スルコトヲ得前項ノ期間中ニハ不可抗力ニ因リテ船積ヲ爲スコト能ハサル日ヲ算入セス

第五百九十五條 船長カ第三者ヨリ運送品ヲ受取ルヘキ場合ニ於テ其者ヲ確知スルコト能ハサルトキ又ハ其者カ運送品ヲ船積セサルトキハ船長ハ直チニ備船者ニ對シテ其通知ヲ發ス

ルコトヲ要ス此場合ニ於テハ船積期間内ニ限リ備船者ニ於テ運送品ヲ船積スルコトヲ得
第五百九十六條 備船者ハ運送品ノ全部ヲ船積セサルトキト雖モ船長ニ對シテ發航ノ請求ヲ爲スコトヲ得

備船者カ前項ノ請求ヲ爲シタルトキハ運送賃ノ全額ノ外運送品ノ全部ヲ船積セサルニ因リテ生シタル費用ヲ支拂ヒ向ホ船舶所有者ノ請求アルトキハ相當ノ擔保ヲ供スルコトヲ要ス

第五百九十七條 船積期間經過ノ後ハ備船者カ運送品ノ全部ヲ船積セサルトキト雖モ船長ハ直チニ發航ヲ爲スコトヲ得

前條第二項ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス
第五百九十八條 發航前ニ於テハ備船者ハ運送賃ノ半額ヲ支拂ヒテ契約ノ解除ヲ爲スコトヲ

得

往復航海ヲ爲スヘキ場合ニ於テ備船者カ其歸航ノ發航前ニ契約ノ解除ヲ爲シタルトキハ運送賃ノ三分ノ二ヲ支拂フコトヲ要ス他港ヨリ船積港ニ航行スヘキ場合ニ於テ備船者カ其船積港ヲ發スル前ニ契約ノ解除ヲ爲シタルトキ亦同シ

運送品ノ全部又ハ一部ヲ船積シタル後前二項ノ規定ニ從ヒテ契約ノ解除ヲ爲シタルトキハ其船積及ヒ陸揚ノ費用ハ備船者之ヲ負擔ス備船者カ船積期間内ニ運送品ノ船積ヲ爲サザリシトキハ契約ノ解除ヲ爲シタルモノト看做ス

第五百九十九條 備船者カ前條ノ規定ニ從ヒテ契約ノ解除ヲ爲シタルトキト雖モ附隨ノ費用

及ヒ立替金ヲ支拂フ責ヲ免ルルコトヲ得ス
前條第二項ノ場合ニ於テハ備船者ハ前項ニ掲
ゲタルモノノ外運送品ノ價格ニ應シ共同海損
ノ救援又ハ救助ノ爲メ負擔スヘキ金額ヲ支拂
フコトヲ要ス

第六百六條 發航後ニ於テハ備船者ハ運送貨ノ全
額ヲ支拂フ外第六百六條第一項ニ定メタル債
務ヲ辨濟シ且陸揚ノ爲メニ生スヘキ損害ヲ賠
償シ又ハ相當ノ擔保ヲ供スルニ非サレハ契約
ヲ解除ヲ爲スコトヲ得ス

第六百一一條 船舶ノ一部ヲ以テ運送契約ノ目的
ト爲シタル場合ニ於テ備船者カ他ノ備船者及
ビ荷送人ト共同セスシテ發航前ニ契約ノ解除
ヲ爲シタルトキハ運送貨ノ全額ヲ支拂フコト
ヲ要ス但船舶所有者カ他ノ運送品ヨリ得タル

運送貨ハ之ヲ控除ス
發航前ト雖モ備船者カ既ニ運送品ノ全部又ハ
一部ヲ船積シタルトキハ他ノ備船者及ビ荷送
人ノ同意ヲ得ルニ非サレハ契約ノ解除ヲ爲ス
コトヲ得ス

前七條ノ規定ハ船舶ノ一部ヲ以テ運送契約ノ
目的ト爲シタル場合ニ之ヲ準用ス

第六百二條 個個ノ運送品ヲ以テ運送契約ノ目
的ト爲シタルトキハ荷送人ハ船長ノ指圖ニ從
ヒ運送品ヲ積積スルコトヲ要ス

荷送人カ運送品ノ船積ヲ忘リタルトキハ船長
ハ直チニ發航ヲ爲スコトヲ得此場合ニ於テハ
荷送人ハ運送貨ノ全額ヲ支拂フコトヲ要ス但
船舶所有者カ他ノ運送品ヨリ得タル運送貨ハ
之ヲ控除ス

第六百三條 第六百一一條ノ規定ハ荷送人カ契約
ノ解除ヲ爲ス場合ニ之ヲ準用ス

第六百四條 備船者又ハ荷送人ハ船積期間内ニ
運送ニ必要ナル書類ヲ船長ニ交付スルコトヲ
要ス

第六百五條 船舶ノ全部又ハ一部ヲ以テ運送契
約ノ目的ト爲シタル場合ニ於テ運送品ヲ陸揚
スルニ必要ナル準備ヲ整頓シタルトキハ船長
ハ運送品ヲ荷送人ニ對シテ其通知ヲ發スルコ
トヲ要ス

運送品ヲ陸揚スヘキ期間ノ定アル場合ニ於テ
ハ其期間ハ前項ノ通知アリタル日ヨリ翌日ヨリ
之ヲ起算ス其期間經過ノ後運送品ヲ陸揚シタ
ルトキハ船舶所有者ハ特約ナキトキト雖モ相
當ノ報酬ヲ請求スルコトヲ得

前項ノ期間中ニハ不可抗力ニ因リテ陸揚ヲ爲
スコト能ハサル日ヲ算入セス
個個ノ運送品ヲ以テ運送契約ノ目的ト爲シタ
ルトキハ荷送人ハ船長ノ指圖ニ從ヒ運送品ヲ
運送品ヲ陸揚スルコトヲ要ス

第六百六條 荷受人カ運送品ヲ受取りタルトキ
ハ運送契約又ハ船荷證券ノ趣旨ニ從ヒ運送貨
ノ附隨ノ費用、立替金及ビ運送品ノ價格ニ應
シ共同海損、救援又ハ救助ノ爲メ負擔スヘキ
金額ヲ支拂フ義務ヲ負フ

船長ハ前項ニ定メタル金額ノ支拂ト引換ニ非
サレハ運送品ヲ引渡スコトヲ要セス

第六百七條 荷受人カ運送品ヲ受取ルコトヲ忘
リタルトキハ船長ハ之ヲ供託スルコトヲ得此
場合ニ於テハ運送品ヲ荷受人ニ對シテ其通知

ヲ發スルコトヲ要ス
荷受人ヲ確知スルコト能ハサルトキ又ハ荷受人カ運送品ヲ受取ルコトヲ拒ミタルトキハ船長ハ運送品ヲ供託スルコトヲ要ス此場合ニ於テハ遲滞ナク備船者又ハ荷送人ニ對シテ其通知ヲ發スルコトヲ要ス

第六百八條 運送品ノ重量又ハ容積ヲ以テ運送貨ヲ定メタルトキハ其額ハ運送品引渡ノ當時ニ於ケル重量又ハ容積ニ依リテ之ヲ定ム

第六百九條 期間ヲ以テ運送貨ヲ定メタルトキハ其額ハ運送品ノ船積著手ノ日ヨリ其陸揚終了ノ日マテノ期間ニ依リテ之ヲ定ム但船積力不可抗力ニ因リ發航港若クハ航海ノ途中ニ於テ碇泊ヲ爲スヘキトキ又ハ航海ノ途中ニ於テ船積ヲ修繕スヘキトキハ其期間ハ之ヲ算入セ

ス第五百九十四條第二項又ハ第六百五條第二項ノ場合ニ於テ船積期間又ハ陸揚期間經過ノ後運送品ノ船積又ハ陸揚ヲ爲シタル日數亦同シ

第六百十條 船舶所有者ハ第六百六條第一項ニ定メタル金額ノ支拂ヲ受クル爲メ裁判所ノ許可ヲ得テ運送品ヲ競賣スルコトヲ得

船長カ荷受人ニ運送品ヲ引渡シタル後ト雖モ船舶所有者ハ其運送品ノ上ニ權利ヲ行使スルコトヲ得但引渡ノ日ヨリ二週間ヲ經過シタルトキ又ハ第三者カ占有ヲ取得シタルトキハ此限ニ在ラス

第六百十一條 船舶所有者カ前條ニ定メタル權利ヲ行ハサルトキハ備船者又ハ荷送人ニ對スル請求權ヲ失フ但備船者又ハ荷送人ハ其受ケタ

ル利益ノ限度ニ於テ償還ヲ爲スコトヲ要ス

第六百十二條 船舶ノ全部又ハ一部ヲ以テ運送契約ノ目的ト爲シタル場合ニ於テ備船者カ更ニ第三者ト運送契約ヲ爲シタルトキハ其契約ノ履行カ船長ノ職務ニ屬スル範圍内ニ於テハ船舶所有者ノミ其第三者ニ對シテ履行ノ責任ス但第五百四十四條ニ定メタル權利ヲ行フコトヲ妨ケス

第六百十三條 船舶ノ全部ヲ以テ運送契約ノ目的ト爲シタル場合ニ於テハ其契約ハ左ノ事由ニ因リテ終了ス

- 一 第五百八十七條第一項ニ掲ケタル事由
 - 二 運送品カ不可抗力ニ因リテ滅失シタルコト
- 第五百八十七條第一項ニ掲ケタル事由カ航海

中ニ生シタルトキハ備船者ハ運送ノ割合ニ應ジ運送品ノ價格ヲ超エサル限度ニ於テ運送貨ヲ支拂フコトヲ要ス

第六百十四條 航海又ハ運送カ法令ニ反スルニ至リタルトキ其他不可抗力ニ因リテ契約ヲ爲シタル目的ヲ達スルコト能ハサルニ至リタルトキハ各當事者ハ契約ノ解除ヲ爲スコトヲ得前項ニ掲ケタル事由カ發航後ニ生シタル場合ニ於テ契約ノ解除ヲ爲シタルトキハ備船者ハ運送ノ割合ニ應ジテ運送貨ヲ支拂フコトヲ要ス

第六百十五條 第六百十三條第一項第二號及ヒ前條第一項ニ掲ケタル事由カ運送品ノ一部ニ付テ生シタルトキハ備船者ハ船舶所有者ノ負擔ヲ重カラシメサル範圍内ニ於テ他ノ運送品

ヲ船積ナルコトヲ得

備船者カ前項ニ定メタル權利ヲ行ハント欲ス
ルトキハ滯滞ナク運送品ノ陸揚又ハ船積ヲ爲
スコトヲ要ス若シ其陸揚又ハ船積ヲ怠リタル
トキハ運送貨ノ全額ヲ支拂フコトヲ要ス

第六百十六條 第六百十三條及ヒ第六百十四條
ノ規定ハ船船ノ一部又ハ個個ノ運送品ヲ以テ
運送契約ノ目的ト爲シタル場合ニ之ヲ準用ス
第六百十三條第一項第二號及ヒ第六百十四條
第一項ニ掲ケタル事由カ運送品ノ一部ニ付テ
生シタルトキト雖モ備船者又ハ荷送人ハ契約
ノ解除ヲ爲スコトヲ得但運送ノ貨ヲ全額支拂
フコトヲ要ス

第六百十七條 船船所有者ハ左ノ場合ニ於テハ
運送貨ノ全額ヲ請求スルコトヲ得

一 船長カ第五百六十八條第一項ノ規定ニ
從ヒテ積荷ヲ賣却又ハ質入シタルトキ
二 船長カ第五百七十二條ノ規定ニ從ヒテ
積荷ヲ航海ノ用ニ供シタルトキ
三 船長カ第六百四十一條ノ規定ニ從ヒテ
積荷ヲ處分シタルトキ

第六百十八條 船船所有者ノ備船者、荷送人又
ハ荷受人ニ對スル債權ハ一年ヲ經過シタルト
キハ時効ニ因リテ消滅ス
第六百十九條 第三百二十八條、第三百三十六
條乃至第三百四十一條及ヒ第三百四十八條ノ
規定ハ船船所有者ニ之ヲ準用ス

第二款 船積證券
第六百二十條 船長ハ備船者又ハ荷 人ノ請求
ニ因リ運送品ノ船積後滯滞ナク一通又ハ敷通

ノ船積證券ヲ交付スルコトヲ要ス
第六百二十一條 船船所有者ハ船長以外ノ者ニ
船長ニ代ハリテ船積證券ヲ交付スルコトヲ委
任スルコトヲ得

第六百二十二條 船積證券ニハ左ノ事項ヲ記載
シ船長又ハ之ニ代ハル者署名スルコトヲ要ス

- 一 船船ノ名稱及ヒ國籍
- 二 船長カ船積證券ヲ作ラサルトキハ船長
ノ氏名
- 三 運送品ノ種類、重量若クハ容積及ヒ其
荷造ノ種類、個數並ニ記號
- 四 備船者又ハ荷送人ノ氏名又ハ商號
- 五 荷受人ノ氏名若クハ商號又ハ所持人ニ
運送品ヲ引渡スヘキコト
- 六 船積港

七 陸揚港但發航後備船者又ハ荷送人カ陸
揚港ヲ指定スヘキトキハ其之ヲ指定スヘ
キ港

八 運送貨
九 敷通ノ船積證券ヲ作リタルトキハ其員
數

第十 船積證券ノ作成地及ヒ其作成ノ年月日
第六百二十三條 備船者又ハ荷送人、船長又ハ
之ニ代ハル者ノ請求ニ因リ船積證券ノ原本ニ
署名シテ之ヲ交付スルコトヲ要ス

第六百二十四條 陸揚港ニ於テハ船長ハ敷通ノ
船積證券中ノ一通ノ所持人カ運送品ノ引渡ヲ
請求シタルトキト雖モ其引渡ヲ拒ムコトヲ得
ス
第六百二十五條 陸揚港外ニ於テハ船長ハ船積

證券ノ各通ノ返還ヲ受クルニ非サレハ運送品
ヲ引渡スコトヲ得ス

第六百二十六條 二人以上ノ船荷證券所持人カ
運送品ノ引渡ヲ請求シタルトキハ船長ハ運滯
ナリ運送品ヲ供託シ且請求ヲ爲シタル各所持
人ニ對シテ其通知ヲ發スルコトヲ要ス船長カ
第六百二十四條ノ規定ニ依リテ運送品ノ一部
ヲ引渡シタル後他ノ所持人カ運送品ノ引渡ヲ
請求シタル場合ニ於テ其殘部ニ付キ亦同シ

第六百二十七條 二人以上ノ船荷證券所持人ア
ル場合ニ於テ其一人カ他ノ所持人ニ先チテ船
長ヨリ運送品ノ引渡ヲ受ケタルトキハ他ノ所
持人ノ船荷證券ハ其效力ヲ失フ
第六百二十八條 二人以上ノ船荷證券所持人ア
ル場合ニ於テ船長カ未タ運送品ノ引渡ヲ爲サ

サルトキハ原所持人カ最モ先ニ發シ又ハ引渡
シタル證券ヲ所持スル者他ノ所持人ニ先チテ
其權利ヲ行フ

第六百二十九條 第三百三十四條、第三百三十
五條、第四百五十五條及ヒ第四百八十三條ノ
規定ハ船荷證券ニ之ヲ準用ス

第二節 旅客運送

第六百三十條 記名ノ乘船切符ハ之ヲ他人ニ讓
渡スコトヲ得ス

第六百三十一條 旅客ノ航海中ノ食料ハ船舶所
有者ノ負擔トス

第六百三十二條 旅客カ契約ニ依リ船中ニ携帶
スルコトヲ得ル手荷物ニ付テハ船舶所有者ハ
持約アルニ非サレハ別ニ運送賃ヲ請求スルコ
トヲ得ス

第六百三十三條 旅客カ乘船時期マテニ船舶ニ
乗込マサルトキハ船長ハ發航ヲ爲シ又ハ航海
ヲ繼續スルコトヲ得此場合ニ於テハ旅客ハ運
送賃ノ全額ヲ支拂フコトヲ要ス

第六百三十四條 發航前ニ於テハ旅客ハ運送
賃ノ半額ヲ支拂ヒテ契約ノ解除ヲ爲スコトヲ
得
發航後ニ於テハ旅客ハ運送賃ノ全額ヲ支拂フ
ニ非サレハ契約ノ解除ヲ爲スコトヲ得ス

第六百三十五條 旅客カ發航前ニ死亡、疾病其
他一身ニ關スル不可抗力ニ因リテ航海ヲ爲ス
コト能ハサルニ至リタルトキハ船舶所有者ハ
運送賃ノ四分ノ一ヲ請求スルコトヲ得
前項ニ掲ケタル事由カ發航後ニ生シタルトキ
ハ船舶所有者ハ其選擇ニ從ヒ運送賃ノ四分ノ

一ヲ請求シ又ハ運送ノ割合ニ應シテ運送賃ヲ
請求スルコトヲ得

第六百三十六條 航海ノ途中ニ於テ船舶ヲ修繕
スヘキトキハ船舶所有者ハ其修繕中旅客ニ相
當ノ住居及ヒ食料ヲ供スルコトヲ要ス但旅客
ノ權利ヲ害セサル範圍内ニ於テ他ノ船舶ヲ以
テ上陸港マテ旅客ヲ運送スルコトヲ提供シタ
ルトキハ此限ニ在ラス

第六百三十七條 旅客運送契約ハ第五百八十七
條第一項ニ掲ケタル事由ニ因リテ終了ス若シ
其事由カ航海中ニ生シタルトキハ旅客ハ運送
ノ割合ニ應シテ運送賃ヲ支拂フコトヲ要ス

第六百三十八條 旅客カ死亡シタルトキハ船長
ハ最モ其相續人ノ利益ニ適スヘキ方法ニ依リ
テ其船中ニ在ル手荷物ノ處分ヲ爲スコトヲ要

第六百三十九條 第三百五十條、第三百五十一條第一項、第三百五十二條、第三百九十一條、第三百九十二條、第六百十四條及第六百十八條ノ規定ハ海上ノ旅客運送ニ之ヲ準用ス

第五百九十三條及第六百十七條ノ規定ハ旅客ノ手荷物ニ之ヲ準用ス

第六百四十條 旅客運送ヲ爲ス爲メ船舶ノ全部又ハ一部ヲ以テ運送契約ノ目的ト爲シタル場合ニ於テハ船舶所有者ト備船者トノ關係ニ付テハ前節第一款ノ規定ヲ準用ス

第四章 海損

第六百四十一條 船長カ船舶及ヒ積荷ヲシテ共同ノ危險ヲ免レシムル爲メ船舶又ハ積荷ニ付キ爲シタル處分ニ因リテ生シタル損害及ヒ費用ハ之ヲ共同海損トス

用ハ之ヲ共同海損トス

前項ノ規定ハ危險カ過失ニ因リテ生シタル場合ニ於テ利害關係人ノ過失者ニ對スル求償ヲ妨ケス

第六百四十二條 共同海損ハ之ニ因リテ保存スルコトヲ得タル船舶又ハ積荷ノ價格ト運送賃ノ半額ト共同海損タル損害ノ額トノ割合ニ應ジテ各利害關係人ノ分擔ス

第六百四十三條 共同海損ノ分擔額ニ付テハ船舶ノ價格ハ到達ノ地及ヒ時ニ於ケル價格トシ積荷ノ價格ハ陸揚ノ地及ヒ時ニ於ケル價格トス但積荷ニ付テハ其價格中ヨリ減失ノ場合ニ於テ支拂フコトヲ要セサル運送賃其他ノ費用ヲ控除スルコトヲ要ス

第六百四十四條 前二條ノ規定ニ依リ共同海損

ナ分擔スヘキ者ハ船舶ノ到達又ハ積荷ノ引渡ノ時ニ於テ現存スル價格ノ限度ニ於テノ其責ニ任ス

第六百四十五條 船舶ニ備附ケタル武器、船員ノ給料、船員及ヒ旅客ノ食料並ニ衣類ハ共同海損ノ分擔ニ付キ其價額ヲ算入セス但此等ノ物ニ加ヘタル損害ハ他ノ利害關係人ノ分擔ス

第六百四十六條 船荷證券其他積荷ノ價格ヲ評定スルニ足ルヘキ書類ヲクシテ船積シタル荷物又ハ屬具目錄ニ記載セサル屬具ニ加ヘタル損害ハ利害關係人ニ於テ之ヲ分擔スルコトヲ要セス

甲板ニ積込ミタル荷物ニ加ヘタル損害亦同シ但沿岸ノ小航海ニ在リテハ此限ニ在ラズ

前二項ニ掲ケタル積荷ノ利害關係人ト雖モ共同海損ヲ分擔スル責ヲ免ルルコトヲ得ス

第六百四十七條 共同海損タル損害ノ額ハ到達ノ地及ヒ時ニ於ケル船舶ノ價格又ハ陸揚ノ地及ヒ時ニ於ケル積荷ノ價格ニ依リテ之ヲ定ム但積荷ニ付テハ其減失又ハ毀損ノ爲メ支拂フコトヲ要セザリシ一切ノ費用ヲ控除スルコトヲ要ス

第三百三十八條ノ規定ハ共同海損ノ場合ニ之ヲ準用ス

第六百四十八條 船荷證券其他積荷ノ價格ヲ評定スルニ足ルヘキ書類ニ積荷ノ實價ヨリ低キ價額ヲ記載シタルトキハ其積荷ニ加ヘタル損害ノ額ハ其記載シタル價額ニ依リテ之ヲ定ム積荷ノ實價ヨリ高キ價額ヲ記載シタルトキハ

其積荷ノ利害關係人ハ其記載シタル價額ニ應
シテ共同海損ヲ分擔ス
前二項ノ規定ハ積荷ノ價格ニ影響ヲ及ホスヘ
キ事項ニ付キ虚偽ノ記載ヲ爲シタル場合ニ之
ヲ準用ス

第六百四十九條 第六百四十二條ノ規定ニ依リ
テ利害關係人カ共同海損ヲ分擔シタル後船舶
、其屬具若クハ積荷ノ全部又ハ一部カ其所有
者ニ復シタルトキハ其所有者ハ償金申ヨリ救
助ノ費用及ヒ一部滅失又ハ毀損ニ因リテ生シ
タル損害ノ額ヲ控除シタルモノヲ返還スルコ
トヲ要ス

第六百五十條 船舶カ雙方ノ船員ノ過失ニ因リ
テ衝突シタル場合ニ於テ雙方ノ過失ノ輕重ヲ
判定スルコト能ハサルトキハ其衝突ニ因リテ

生シタル損害ハ各船舶ノ所有者平分シテ之ヲ
負擔ス

第六百五十一條 共同海損又ハ船舶ノ衝突ニ因
リテ生シタル債權ハ一年ヲ經過シタルトキハ
時効ニ因リテ消滅ス
前項ノ期間ハ共同海損ニ付テハ其計算終了ノ
時ヨリ之ヲ起算ス

第六百五十二條 本章ノ規定ハ船舶カ不可抗力
ニ因リ發航港又ハ航海ノ途中ニ於テ碇泊ヲ爲
ス爲メニ要スル費用ニ之ヲ準用ス

第五章 保險

第六百五十三條 海上保險契約ハ航海ニ關スル
事故ニ因リテ生スルコトアルヘキ損害ノ填補
ヲ以テ其目的トス
海上保險契約ニハ本章ニ別段ノ定アル場合ヲ

除ク外第三編第十章第一節第一款ノ規定ヲ適
用ス

第六百五十四條 保險者ハ本章又ハ保險契約ニ
別段ノ定アル場合ヲ除ク外保險期間中保險ノ
目的ニ付キ航海ニ關スル事故ニ因リテ生ジタ
ル一切ノ損害ヲ填補スル責ニ任ス

第六百五十五條 保險者ハ被保險者カ支拂フヘ
キ共同海損ノ分擔額ヲ填補スル責ニ任ス但保
險價額ノ一部ヲ保險ニ付シタル場合ニ於テハ
保險者ノ負擔ハ保險金額ノ保險價額ニ對スル
割合ニ依リテ之ヲ定ム

第六百五十六條 船舶ノ保險ニ付テハ保險者ノ
責任カ始マル時ニ於ケル其價額ヲ以テ保險價
額トス

第六百五十七條 積荷ノ保險ニ付テハ其積積ノ

地及ヒ時ニ於ケル其價額及ヒ船積並ニ保險ニ
關スル費用ヲ以テ保險價額トス

第六百五十八條 積荷ノ到達ニ因リテ得ヘキ利
益又ハ報酬ノ保險ニ付テハ契約ヲ以テ保險價
額ヲ定メサリシトキハ保險金額ヲ以テ保險價
額トシタルモノト推定ス

第六百五十九條 一航海ニ付キ船舶ヲ保險ニ付
シタル場合ニ於テハ保險者ノ責任ハ荷物又ハ
底荷ノ船積ニ著手シタル時ヲ以テ始マル
荷物又ハ底荷ノ船積ヲ爲シタル後船舶ヲ保險
ニ付シタルトキハ保險者ノ責任ハ契約成立ノ
時ヲ以テ始マル

前二項ノ場合ニ於テ保險者ノ責任ハ到達港ニ
於テ荷物又ハ底荷ノ陸揚カ終了シタル時ヲ於
テ終ハル但其陸揚カ不可抗力ニ因ラスシテ選

延シタルトキハ其終了スヘカリシ時ヲ以テ終
ハル

第六百六十條 積荷ヲ保險ニ付シ又ハ積荷ノ到
達ニ因リテ得ヘキ利益若クハ報酬ヲ保險ニ付
シタル場合ニ於テハ保險者ノ責任ハ其積荷カ
陸地ヲ離レタル時ヲ以テ始マリ陸揚港ニ於テ
其陸揚力終了シタル時ヲ以テ終ハル
前條第三項但書ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準
用ス

第六百六十一條 海上保險證券ニハ第四百三條
第二項ニ掲ケタル事項ノ外左ノ事項ヲ記載ス
ルコトヲ要ス

一 船舶ヲ保險ニ付シタル場合ニ於テハ其
船舶ノ名稱、國籍並ニ種類、船長ノ氏名
及ヒ發航港、到達港又ハ寄航港ノ定アル

トキハ其港名

二 積荷ヲ保險ニ付シ又ハ積荷ノ到達ニ因
リテ得ヘキ利益若クハ報酬ヲ保險ニ付シ
タル場合ニ於テハ船舶ノ名稱、國籍並ニ
種類、船積港及ヒ陸揚港

第六百六十二條 保險者ノ責任カ始マル前ニ於
テ航海ヲ變更シタルトキハ保險契約ハ其效力
ヲ失フ

保險者ノ責任カ始マリタル後航海ヲ變更シタ
ルトキハ保險者ハ其變更後ノ事故ニ付キ責任
ヲ負フコトナシ但其變更カ保險契約者又ハ被
保險者ノ責任ニ歸スヘカラサル事由ニ因リタル
トキハ此限ニ在ラス

到達港ヲ變更シ其實行ニ著手シタルトキハ保
險シタル航路ヲ離レサルトキト雖モ航海ヲ變

更シタルモノト看做ス

第六百六十三條 被保險者カ發航ヲ爲シ若クハ
航海ヲ繼續スルコトヲ怠リ又ハ航路ヲ變更シ
其他著シク危險ヲ變更若クハ増加シタルトキ
ハ保險者ハ其變更又ハ増加以後ノ事故ニ付キ
責任ヲ負フコトナシ但其變更又ハ増加カ事故
ノ發生ニ影響ヲ及ボササリシトキ又ハ保險者
ノ負擔ニ歸スヘキ不可抗力若クハ正當ノ理由
ニ因リテ生シタルトキハ此限ニ在ラス

第六百六十四條 保險契約中ニ船長ヲ指定シタ
ルトキト雖モ船長ノ變更ハ契約ノ效力ニ影響
ヲ及ボサス

第六百六十五條 積荷ヲ保險ニ付シ又ハ積荷ノ
到達ニ因リテ得ヘキ利益若クハ報酬ヲ保險ニ
付シタル場合ニ於テ船舶ヲ變更シタルトキハ

保險者ハ其變更以後ノ事故ニ付キ責任ヲ負フ
コトナシ但其變更カ保險契約者又ハ被保險者
ノ責任ニ歸スヘカラサル事由ニ因リタルトキハ
此限ニ在ラス

第六百六十六條 保險契約ヲ爲スニ當タリ荷物
ヲ積込ムヘキ船舶ヲ定メサリシ場合ニ於テ保
險契約者又ハ被保險者カ其荷物ヲ船積シタル
コトヲ知りタルトキハ遲滞ナク保險者ニ對シ
テ船舶ノ名稱及ヒ國籍ノ通知ヲ發スルコトヲ
要ス

保險契約者又ハ被保險者カ前項ノ通知ヲ怠リ
タルトキハ保險契約ハ其效力ヲ失フ

第六百六十七條 保險者ハ左ニ掲ケタル損害又
ハ費用ヲ填補スル責ニ任セス
一 保險ノ目的ノ性質若クハ瑕疵、其自然

ノ消耗又ハ保險契約者若クハ被保險者ノ
惡意若クハ重大ナル過失ニ因リテ生シタ
ル損害

二 船舶又ハ運送船ヲ保險ニ付シタル場合
ニ於テ發航ノ當時安全ニ航海ヲ爲スニ必
要ナル準備ヲ爲サス又ハ必要ナル書類ヲ
備ヘサルニ因リテ生シタル損害

三 積荷ヲ保險ニ付シタル積荷ノ到達ニ因
リテ得ヘキ利益若クハ報酬ヲ保險ニ付シ
タル場合ニ於テ備船者、荷送人又ハ荷受
人ノ惡意若クハ重大ナル過失ニ因リテ生
シタル損害

四 水先案内料、入港料、燈臺料、検査料
其他船舶又ハ積荷ニ付キ航海ノ爲メニ出
タシタル通常ノ費用

第六百六十八條 共同海損ニ非サル損害又ハ費
用カ其計算ニ關スル費用ヲ算入セスシテ保險
價額ノ百分ノ二ヲ超エサルトキハ保險者ハ之
ヲ填補スル責ニ任セス

右ノ損害又ハ費用カ保險價額ノ百分ノ二ヲ超
エタルトキハ保險者ハ其全額ヲ支拂フコトヲ
要ス
前二項ノ規定ハ當事者カ契約ヲ以テ保險者ノ
負擔セサル損害又ハ費用ノ割合ヲ定メタル場
合ニ之ヲ準用ス

前三項ニ定メタル割合ハ各航海ニ付キ之ヲ計
算ス

第六百六十九條 保險ノ目的タル積荷カ毀損シ
テ陸揚港ニ到達シタルトキハ保險者ハ其積荷
カ毀損シタル狀況ニ於ケル價額ノ毀損セサル

狀況ニ於テ有スヘカリシ價額ニ對スル割合ヲ
以テ保險價額ノ一部ヲ填補スル責ニ任ス

第六百七十條 航海ノ途中ニ於テ不可抗力ニ因
リ保險ノ目的タル積荷ヲ賣却シタルトキハ其
賣却ニ依リテ得タル代價ノ中ヨリ運送賃他其
ノ費用ヲ控除シタルモノト保險價額トノ差ヲ
以テ保險者ノ負擔トス但保險價額ノ一部ヲ保
險ニ付シタル場合ニ於テ第三百九十一條ノ適
用ヲ妨ケス

前項ノ場合ニ於テ買主カ代價ヲ支拂ハサルト
キハ保險者ハ其支拂ヲ爲スコトヲ要ス但其支
拂ヲ爲シタルトキハ被保險者ノ買主ニ對シテ
有セル權利ヲ取得ス

第六百七十一條 左ノ場合ニ於テハ被保險者ハ
保險ノ目的ヲ保險者ニ委付シテ保險金額ノ全

部ヲ請求スルコトヲ得

- 一 船舶カ沈没シタルトキ
- 二 船舶ノ行方カ知レサルトキ
- 三 船舶カ修繕スルコト能ハサルニ至リタ
ルトキ
- 四 船舶又ハ積荷カ捕獲セラレタルトキ
- 五 船舶又ハ積荷カ官ノ處分ニ依リテ押收
セラレ六ヶ月間解放セラレサルトキ

第六百七十二條 船舶ノ存否カ六ヶ月間分明ナ
ラサルトキハ其船舶ハ行方ノ知レサルモノト
ス
保險期間ノ定アル場合ニ於テ其期間カ前項ノ
期間内ニ經過シタルトキト雖モ被保險者ハ委
付ヲ爲スコトヲ得但船舶カ保險期間内ニ滅失
セザリシコトノ證明アリタルトキハ其委付ハ

無効トス

第六百七十三條 第六百七十一條第三號ノ場合ニ於テ船長カ遲滞ナク他ノ船舶ヲ以テ積荷ノ運送ヲ繼續シタルトキハ被保險者ハ其積荷ヲ委付スルコトヲ得ス

第六百七十四條 被保險者カ委付ヲ爲サント欲スルトキハ三個月内ニ保險者ニ對シテ其通知ヲ發スルコトヲ要ス

前項ノ期間ハ第六百七十一條第一號、第三號及ヒ第四號ノ場合ニ於テハ被保險者カ其事由ヲ知リタル時ヨリ之ヲ起算ス
再保險ノ場合ニ於テハ第二項ノ期間ハ其被保險者カ自己ノ被保險者ヨリ委付ノ通知ヲ受ケタル時ヨリ之ヲ起算ス

第六百七十五條 委付ハ單純ナルコトヲ要ス

委付ハ保險ノ目的ノ全部ニ付テ之ヲ爲スコトヲ要ス但委付ノ原因カ其一部ニ付テ生シタルトキハ其部分ニ付テノミ之ヲ爲スコトヲ得
保險價額ノ一部ヲ保險ニ付シタル場合ニ於テハ委付ハ保險金額ノ保險價額ニ對スル割合ニ應シテ之ヲ爲スコトヲ得

第六百七十六條 保險者カ委付ヲ承認シタルトキハ後日其委付ニ對シテ異議ヲ述フルコトヲ得ス

第六百七十七條 保險者ハ委付ニ因リ被保險者カ保險ノ目的ニ付キ有セル一切ノ權利ヲ取得ス

被保險者カ委付ヲ爲シタルトキハ保險ノ目的ニ關スル證書ヲ保險者ニ交付スルコトヲ要ス
第六百七十八條 被保險者ハ委付ヲ爲スニ當テ

リ保險者ニ對シ保險ノ目的ニ關スル他ノ保險契約並ニ其負擔ニ屬スル債務ノ有無及ヒ其種類ヲ通知スルコトヲ要ス

保險者ハ前項ノ通知ヲ受ケルマテハ保險金額ノ支拂ヲ爲スコトヲ要セス
保險金額ノ支拂ニ付キ期間ノ定アルトキハ其期間ハ保險者カ第一項ノ通知ヲ受ケタル時ヨリ之ヲ起算ス

第六百七十九條 保險者カ委付ヲ承認セサルトキハ被保險者ハ委付ノ原因ヲ證明シタル後ニ非サレハ保險金額ノ支拂ヲ請求スルコトヲ得ス

第六章 船舶債權者

第六百八十條 左ニ掲ケタル債權ヲ有スル者ハ船舶、其屬具及ヒ未タ受取ラサル運送貨ノ上

ニ先取特權ヲ有ス

一 船舶並ニ其屬具ノ競賣ニ關スル費用及

ヒ競賣手續開始後ノ保存費

二 最後ノ港ニ於ケル船舶及ヒ其屬具ノ保存費

三 航海ニ關シ船舶ニ課シタル諸稅

四 水先案内料及ヒ挽船料

五 救援並ニ救助ノ費用及ヒ船舶ノ負擔ニ屬スル共同海損

六 航海繼續ノ必要ニ因リテ生シタル債權

七 雇傭契約ニ因リテ生シタル船長其他ノ船員ノ債權

八 船舶カ其賣買又ハ製造ノ後未タ航海ヲ爲ササル場合ニ於テ其賣買又ハ製造並ニ

鐵裝ニ因リテ生シタル債權及ヒ最後ノ航

海ノ爲メニスル船舶ノ機装、食料並ニ燃料ニ關スル債權

九 第二號、第四號乃至第六號及ヒ前號ニ掲ケタルモノヲ除リ外第五百四十四條ノ規定ニ依リ委付ヲ許シタル債權

第六百八十一條 船舶債權者ノ先取特權ハ運送賃ニ付テハ其先取特權ノ生シタル航海ニ於ケル運送賃ノ上ニノミ存在ス

第六百八十二條 船舶債權者ノ先取特權カ互ニ競合スル場合ニ於テハ其優先權ノ順位ハ第六百八十條ニ掲ケタル順序ニ從フ但同條第四號乃至第六號ノ債權間ニ在リテハ後ニ生シタルモノノ前ニ生シタルモノニ先ツ

同一順位ノ先取特權者數人アルトキハ各其債權額ノ割合ニ應シテ辨濟ヲ受ク但第六百八十

條第四號乃至第六號ノ債權カ同時ニ生セザリシ場合ニ於テハ後ニ生シタルモノノ前ニ生シタルモノニ先ツ

先取特權カ數回ノ航海ニ付テ生シタル場合ニ於テハ前二項ノ規定ニ拘ハラヌ後ノ航海ニ付テ生シタルモノノ前ノ航海ニ付テ生シタルモノニ先ツ

第六百八十三條 船舶債權者ノ先取特權ト他ノ先取特權ト競合スル場合ニ於テハ船舶債權者ノ先取特權ハ他ノ先取特權ニ先ツ

第六百八十四條 船舶所有者カ其船舶ヲ讓渡シタル場合ニ於テハ讓受人ハ其讓渡ヲ登記シタル後先取特權者ニ對シ一定ノ期間内ニ其債權ノ申出ヲ爲スヘキ旨ヲ公告スルコトヲ要ス但其期間ハ一个月ヲ下ルコトヲ得ス

第六百八十九條 本章ノ規定ハ製造中ノ船舶ニ之ヲ準用ス

先取特權者カ前項ノ期間内ニ其債權ノ申出ヲ爲サザリシトキハ其先取特權ハ消滅ス

第六百八十五條 船舶債權者ノ先取特權ハ其發生後一年ヲ經過シタルトキハ消滅ス

第六百八十六條 登記シタル船舶ハ之ヲ以テ抵當權ノ目的ト爲スコトヲ得

船舶ノ抵當權ハ其屬具ニ及フ
船舶ノ抵當權ニハ不動産ノ抵當權ニ關スル定規ヲ準用ス

第六百八十七條 船舶ノ先取特權ハ抵當權ニ先チテ之ヲ行フコトヲ得

第六百八十八條 登記シタル船舶ハ之ヲ以テ質權ノ目的ト爲スコトヲ得

商法施行法

(明治三十一年三月法律第四十九號)

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル商法施行法ヲ裁可シ
茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 商法施行前ニ生シタル事項ニ付テハ本
法ニ別段ノ定アル場合ヲ除ク外舊法ノ規定ヲ
適用ス

第二條 商事ニ關スル特別ノ法令ハ商法施行ノ
後ト雖モ仍ホ其效力ヲ有ス

第三條 特別ノ法令中舊商法ノ規定ニ依ルヘキ
モノト定メタル場合ニ付テハ舊商法ハ商法施
行ノ後ト雖モ仍ホ其效力ヲ存ス

第四條 商法施行前ヨリ商業ヲ營ム未成年者、
妻及ヒ後見人ハ商法ノ規定ニ從ヒテ登記ヲ爲

スコトヲ要ス

第五條 商法施行前ニ會社ノ無限責任社員ト爲
ルコトヲ許サレタル未成年者又ハ妻ハ商法施
行ノ日ヨリ其會社ノ業務ニ關シ之ヲ能力者ト
看做ス

第六條 商法第七條第二項ノ規定ハ商法施行ノ
日ヨリ其施行前ニ定メタル制限ニモ亦之ヲ適
用ス

第七條 商法第八條ニ定メタル小商人ノ範圍ハ
勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第八條 商法施行前ニ舊法ノ規定ニ依リテ爲シ
タル登記ハ商法ノ規定ニ從ヒテ爲シタルモノ
ト同一ノ效力ヲ有ス

第九條 商法施行ノ前ニ登記シタル事項ニ變更
ヲ生シ又ハ其事項カ消滅シタル場合ニ於テ商

法施行前ニ登記ヲ爲サリシトキハ當事者ハ
其施行ノ後遲滯ナク登記ヲ爲スコトヲ要ス

第十條 商法施行前ニ設立ノ登記ヲ爲シタル會
社ノ社名ハ商法ノ規定ニ從ヒテ登記シタル商
號ト同一ノ效力ヲ有ス

第十一條 商法施行前ニ設立シタル合名會社ニ
シテ其社名中ニ合名會社ナル文字ヲ用弁サル
モノハ其施行ノ日ヨリ三個月内ニ商法第十七
條ノ規定ニ從ヒテ其社名ヲ改メ且其登記ヲ爲
スコトヲ要ス

會社ノ業務ヲ執行スル社員カ前項ノ規定ニ違
反シタルトキハ五圓以上五十圓以下ノ過料ニ
處セラル

第十二條 商法第十八條ノ規定ハ商法施行前ヨ
リ使用スル商號ニハ之ヲ適用セス

第十三條 商法第十九條ノ規定ハ舊商法施行前
ヨリ使用スル商號ニハ之ヲ適用セス

第十四條 商法施行後ニ商號ノ登記ヲ爲シタル者ト雖モ
舊商法施行前ヨリ同一又ハ類似ノ商號ヲ使用
スル者ニ對シテハ商法第二十條ニ定メタル權
利ヲ行フコトヲ得ス

第十五條 商法第十九條、第二十條第二項、第二
十二條第一項及ヒ第二百八十九條第三項ニ掲
ケタル市町村ハ市制又ハ町村制ヲ施行セサル
地方ニ在リテハ從來ノ町村其他之ニ類スル區
域トシ東京市、京都市及ヒ大阪市ニ在リテハ
其各區トス

第十六條 商法施行前ニ東京市又ハ大阪市ニ於
テ商號ノ登記ヲ爲シタル者ハ商法施行ノ日ヨ
リ六個月内ニ其市ニ存スル他ノ登記所ニ於テ

其登記ヲ爲スコトヲ要ス
 前項ニ定メタル登記ヲ爲サリシ者ハ其登記
 ヲ爲サリシ登記所ノ管轄區域内ニ於テハ商
 法第二十條ニ定メタル權利ヲ行フコトヲ得ス
 第十六條 商法第二十二條第二項ノ適用ニ付テ
 ハ北海道ハ之ヲ一府縣ト看做ス
 第十七條 商法第二十八條ノ規定ハ商法施行前
 ニ依リタル商業帳簿ニモ亦之ヲ適用ス
 第十八條 代務人ニハ商法施行ノ日ヨリ支配人
 ニ關スル規定ヲ適用ス
 第十九條 商法施行前ヨリ支配人又ハ支配役ト
 稱スル者カ商法第三十條ニ定メタル權限ヲ有
 セサルトキハ主人ハ商法施行ノ日ヨリ三個月
 内ニ其名稱ヲ改ムルコトヲ要ス
 主人カ前項ノ期間内ニ支配人又ハ支配役ノ名

稱ヲ改メサリシトキハ其者ハ商法第三十條ニ
 定メタル權限ヲ有スルモノト看做ス
 第二十條 商法第三十條第三項ノ規定ハ舊商法
 第五十條ノ規定ニ反シテ爲シタル行爲ニ之ヲ
 準用ス但一年ノ期間ハ商法施行ノ日ヨリ之ヲ
 起算ス
 主人カ商法施行前ニ前項ノ行爲ヲ知リタルト
 キハ二週間ノ期間モ亦其施行ノ日ヨリ之ヲ起
 算ス
 第二十一條 商法中代理商ニ關スル規定ハ商法
 施行ノ日ヨリ其施行前ニ定メタル代理商ニモ
 亦之ヲ適用ス
 第二十二條 商法中會社ニ關スル規定ハ本法ニ
 別段ノ定アル場合ヲ除ク外商法施行ノ日ヨリ
 其施行前ニ設立シタル會社ニモ亦之ヲ適用ス

第二十三條 商法第四十七條ニ定メタル期間ハ
 商法施行前ニ本店ノ所在地ニ於テ設立ノ登記
 ヲ爲シタル會社ニ付テハ其施行ノ日ヨリ之ヲ
 起算ス
 第二十四條 商法施行前ニ設立シタル合名會社
 ニシテ未ダ設立ノ登記ヲ爲ササルモノハ商法
 施行ノ日ヨリ一個月内ニ商法ノ規定ニ從ヒテ
 定款ヲ作り且商法第五十一條第一項ニ定メタ
 ル登記ヲ爲スコトヲ要ス
 第二十五條 商法施行前ニ本店ノ所在地ニ於テ
 設立ノ登記ヲ爲シタル合名會社ハ商法施行ノ
 日ヨリ一個月内ニ本店ノ所在地ニ於テハ支店
 、支店ノ所在地ニテハ本店並ニ他ノ支店及ヒ
 社員ノ出資ノ種類並ニ財産ヲ目的トスル出資
 ノ價格ヲ登記スルコトヲ要ス

第二十六條 商法第五十一條第二項、第三項及
 ヒ第五十二條ノ規定ハ合名會社カ設立ノ登記
 ヲ爲シタル後商法施行前ニ支店ヲ設ケ又ハ其
 本店若クハ支店ヲ移轉シタル場合ニ之ヲ準用
 ス但登記期間ハ商法施行ノ日ヨリ之ヲ起算ス
 第二十七條 會社ノ業務ヲ執行スル社員カ前二
 條ノ規定ニ依リ爲スヘキ登記ヲ怠リタルトキ
 ハ五圓以上五十圓以下ノ過料ニ處セラル
 第二十八條 商法第六十條第二項及ヒ第三項ノ
 規定ハ舊商法第四條ノ規定ニ反シテ爲シタ
 ル行爲ニ之ヲ準用ス
 第二十九條 商法第七十一條ノ規定ハ商法施行
 前ニ設立シタル合名會社ニハ之ヲ適用セス
 第三十條 合名會社ノ目的タル事業ノ成功カ

商法施行前ニ不能ト爲リタルトキハ裁判所カ解散ヲ命シタル場合ヲ除ク外其會社ハ商法ノ施行ト同時ニ解散シタルモノト看做ス

第三十一條 合名會社カ商法施行前ニ解散シタル場合ニ於テ未タ清算人ヲ選任セザルトキハ其施行ノ日ヨリ二週間内ニ商法第七十六條ノ規定ニ從ヒテ登記ヲ爲スコトヲ要ス

第三十二條 合名會社カ商法施行前ニ解散シタル場合ニ於テ既ニ清算人ヲ選任シタルトキハ其施行ノ日ヨリ二週間内ニ商法第七十六條及ヒ第九十條ノ規定ニ從ヒテ登記ヲ爲スコトヲ要ス

第三十三條 商法第七十八條第二項ノ規定ニ依リ爲スヘキ公告ハ裁判所カ爲スヘキ登記事項ノ公告ト同一ノ方法ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ要ス

ス

第三十四條 合名會社カ商法施行前ニ解散シタル場合ニ於テ未タ清算人ヲ選任セザルトキハ總社員ノ同意ヲ以テ會社財産ノ處分方法ヲ定ムルコトヲ得此場合ニ於テハ商法施行ノ日ヨリ二週間内ニ財産目錄及ヒ貸借對照表ヲ作ルコトヲ要ス

商法第七十八條第二項、第七十九條及ヒ第八十條ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第三十五條 合名會社カ商法施行前ニ解散ノ登記ヲ爲シタル場合ニ於テハ清算ハ舊商法ノ規定ニ依リテ之ヲ爲ス

第三十六條 合名會社ニ於テ商法施行前ニ清算人ノ解任又ハ變更アリタルトキハ其施行ノ日ヨリ二週間内ニ商法第九十七條ノ規定ニ從ヒ

ヲ登記ヲ爲スコトヲ要ス

第三十七條 商法第三百三條ノ規定ハ商法施行前ニ解散シタル合名會社ニモ亦之ヲ適用ス

第三十八條 商法施行前ニ設立シタル合資會社ニハ舊商法ノ規定ヲ適用ス

第二十三條、第二十五條乃至第三十二條及ヒ前三條ノ規定ハ前項ノ會社ニ之ヲ準用ス

第三十九條 商法施行前ニ設立シタル合資會社ハ其取引ニ關スル一切ノ書類ニ商法施行前ニ設立シタル會社タルコトヲ示スコトヲ要ス

業務擔當社員カ前項ノ規定ニ違反シタルトキハ五圓以上五十圓以下ノ過料ニ處セラル

第四十條 商法施行前ニ設立シタル合資會社ハ舊商法第五百十一條第二項ノ規定ニ從ヒ其組織ヲ變更シテ之ヲ商法ニ定メタル合資會社

、株式會社又ハ株式合資會社ト爲スコトヲ得

前項ノ場合ニ於テハ總會ハ直チニ新會社ノ組織ニ必要ナル事項ヲ決議スルコトヲ要ス

第四十一條 商法第七十八條、第七十九條第一項、第二項及ヒ第二百五十四條ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第四十二條 商法施行前ニ設立シタル合資會社ハ商法ノ規定ニ從ヒテ合併ヲ爲スコトヲ得但

合併後存續シ又ハ合併ニ因リテ設立スル會社ハ商法ニ定メタル種類ノ一タルコトヲ要ス

合併ノ決議ハ舊商法第五百十二條第二項ノ規定ニ依ルニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第四十三條 商法施行前ニ發起ノ認可ヲ得タル株式會社ニ於テハ其發起人ハ七人以上ナルコトヲ要セス

第四十四條

商法施行前ニ發起ノ認可ヲ得タル株式會社ト雖モ其發起人カ未タ株主ノ募集ニ著手セザルトキハ之ニ商法ノ規定ヲ適用ス

第四十五條

株式會社ノ發起人カ商法施行前ニ株主ノ募集ニ著手シタルトキハ舊商法ノ規定ニ從ヒテ會社ノ設立ヲ爲スコトヲ得但商法ノ規定ニ從ヒテ定款ヲ作ルコトヲ要ス

第四十六條

商法施行前ニ創業總會ニ於テ定款ヲ確定シタル場合ニ於テハ商法ノ規定ニ從ヒテ其定款ヲ變更スルコトヲ要ス

第四十七條

商法第三百三十條ノ規定ハ前二條ノ場合ニモ亦之ヲ適用ス

第四十八條

商法第六十三條第一項及ヒ第二項ノ規定ハ舊商法ノ規定ニ依リテ招集シタル創業總會ノ決議ニ之ヲ準用ス但前條第二項ノ

期間ハ商法施行前ニ決議ヲ爲シタル場合ニ於テハ其施行ノ日ヨリ之ヲ起算ス

第四十九條

第四十五條ノ場合ニ於テ商法施行前ニ株式總數ノ引受アリタルトキハ其施行ノ日ヨリ、商法施行後ニ株式總數ノ引受アリタルトキハ其日ヨリ六个月内ニ發起人カ創業總會ヲ招集セザルトキハ株式申込人ハ其申込ヲ取消スコトヲ得

第五十條

第四十五條及ヒ第四十六條ノ場合ニ於テハ株式會社ハ各株ニ付キ株金ノ四分ノ一ノ拂込アリタル後二週間内ニ商法第四百四十一條第一項ニ定メタル登記ヲ爲スコトヲ要ス

第五十一條

商法施行前ニ本店ノ所在地ニ於テ設立ノ登記ヲ爲シタル株式會社ニシテ其定款ニ商法第二百十條第一號乃至第七號ニ掲ケタ

ル事項ヲ定メサルモノハ商法施行ノ日ヨリ三個月内ニ其定款ヲ變更スルコトヲ要ス

第五十二條

商法施行前ニ本店ノ所在地ニ於テ設立ノ登記ヲ爲シタル株式會社ハ商法施行ノ日ヨリ三個月内ニ本店ノ所在地ニ於テハ支店、支店ノ所在地ニ於テハ本店並ニ他ノ支店及ヒ會社カ公告ヲ爲ス方法並ニ監査役ノ氏名、住所ヲ登記スルコトヲ要ス

第五十三條

商法施行前ニ設立シタル株式會社カ登記シタル事項中ニ變更ヲ生シタル場合ニ於テ商法施行前ニ登記ヲ爲サザリシトキハ其施行ノ日ヨリ二週間内ニ本店及ヒ支店ノ所在地ニ於テ其登記ヲ爲スコトヲ要ス
舊商法ノ規定ニ依リ登記スヘキ事項カ商法施行前ニ生シタル場合ニ於テハ舊商法ニ登記期

間ノ定ナキトキニ限リ前項ノ規定ヲ準用ス

第五十四條

取締役カ前三條ノ規定ニ違反シタルトキハ五圓以上五十圓以下ノ過料ニ處セラ

第五十五條

商法施行前ニ設立シタル株式會社ニ於テ株式ノ金額カ商法第四百十五條第二項ノ規定ニ反スルモ舊商法及ヒ舊商法施行條例ノ規定ニ反セサル場合ニ於テハ定款ノ定ムル所ニ依ルコトヲ得商法施行後ニ新株ヲ發行スルトキ亦同シ

第五十六條

商法施行後ニ株式ノ金額ヲ變更スル場合ニハ之ヲ適用セズ

第五十七條

商法中株券ニ關スル規定ハ商法施行前ニ發行シタル假株券ニモ亦之ヲ適用ス
商法施行前ニ發行シタル株券及ヒ

假株券ハ商法第四百十八條又ハ第二百十八條ノ規定ニ違フモ之ヲ改ムルコトヲ要セス但商法施行後ニ株金ノ拂込ヲ爲シタル場合ニ於テハ前ニ拂込ミタル金額及ヒ新ニ拂込ミタル金額ヲ假株券ニ記載スルコトヲ要ス

第五十八條 舊商法第二百十二條乃至第二百十五條ノ規定ハ商法施行前ニ株金拂込ノ催告アリタル場合ニ限リ之ヲ適用ス

第五十九條 商法第五百十三條第二項乃至第四項ノ規定ハ商法施行前ニ株式ヲ讓渡シタル者ニシテ舊商法第八十二條ノ規定ニ依リ擔保義務ヲキキ者ニハ之ヲ適用セス

第六十條 法令ノ規定ニ依リ日本人ノミナリテ組織スルコトヲ條件トシテ特別ノ權利ヲ有ス

ル株式會社ハ無記名式ノ株券ヲ發行スルコトヲ得ス若シ之ニ違反シタルトキハ其株券ハ無効トシ最後ノ記名株主ヲ以テ株主トス

取締役カ前項ノ規定ニ反シテ無記名式ノ株券ヲ發行シタルトキハ百圓以上千圓以下ノ過料ニ處セラル

第六十一條 舊商法施行前ニ設立シタル株式會社ニ於テハ株主ノ議決權ノ制限カ商法第六十二條ノ規定ニ反スルモ定款ノ定ムル所ニ依ルコトヲ得但商法施行後ニ其制限ヲ變更スル場合ハ此限ニ在ラス

第六十二條 商法第六十三條ノ規定ハ株主總會カ商法施行前ニ決議ヲ爲シタル場合ニモ亦之ヲ適用ス但同條第二項ノ期間ハ商法施行ノ日ヨリ之ヲ起算ス

第六十三條 商法第六十七條但書ノ規定ハ商法施行前ニ選任シタル取締役及ヒ監査役ニハ之ヲ適用セス

第六十四條 商法施行前ニ選任シタル取締役又ハ監査役ト雖モ其禁治産ニ因リテ退任ス

第六十五條 商法施行前ニ選任シタル取締役ハ其施行ノ後遲滞ナク定款ニ定メタル員數ノ株券ヲ監査役ニ供託スルコトヲ要ス

第六十六條 商法施行前ニ設立シタル株式會社ニ於テ其施行後ニ株金ノ拂込アリタルトキハ取締役ハ其拂込ノ年月日ヲ株主名簿ニ記載スルコトヲ要ス

第六十七條 商法施行前ニ設立シタル株式會社ノ取締役ハ其施行ノ後遲滞ナク社債ノ總額及ヒ其償還ノ方法ヲ社債原簿ニ記載スルコトヲ

要ス

第六十八條 株式會社カ商法施行前ニ其資本ノ半額ヲ失ヒタル場合ニ於テハ取締役ハ商法施行ノ後遲滞ナク株主總會ヲ召集シテ之ヲ報告スルコトヲ要ス

商法施行前ニ會社財産ヲ以テ會社ノ債務ヲ完済スルコト能ハサルニ至リタル場合ニ於テハ取締役ハ商法施行ノ後遲滞ナク破産宣告ノ請求ヲ爲スコトヲ要ス

第六十九條 取締役カ前三條ノ規定ニ違反シタルトキハ五圓以上百圓以下ノ過料ニ處セラル

第七十條 商法第七十五條ノ規定ハ商法施行前ニ選任シタル取締役ニハ之ヲ適用セス

第七十一條 舊商法第六十九條ノ規定ハ商法施行前ニ選任シタル取締役ニノミ之ヲ適用ス

第七十二條 商法施行前ニ舊商法第二百二十八

條又ハ第二百二十九條ノ規定ニ依リテ提起シ

タル訴訟ハ商法ノ規定ヲ適用セス

第七十三條 商法施行前ニ選任シタル監査役ハ

其任期カ一年ヨリ長キトキト雖モ其任期間在

任ス

第七十四條 商法第九十條ニ掲ケタル書類ハ

商法施行前ニ總會招集ノ通知ヲ發シタル場合

ニ限リ會日マテニ之ヲ提出スルヲ以テ足ル

第七十五條 商法第九十六條ノ規定ハ商法施

行前ニ本店ノ所在地ニ於テ設立ノ登記ヲ爲シ

タル株式會社カ其登記後一年以上開業ヲ爲ス

コト能ハサルモノト認ムル場合ニモ亦之ヲ適

用ス

裁判所カ定款ノ規定ヲ認可シタルトキハ取締

役ハ二週間内ニ本店及ヒ支店ノ所在地ニ於テ

其登記ヲ爲スコトヲ要ス

取締役カ前項ニ定メタル登記ヲ爲スコトヲ忘

リタルトキハ五圓以上五十圓以下ノ過料ニ處

セラル

第七十六條 明治二十三年法律第六十號ハ商法

施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

第七十七條 株式會社カ商法施行前ニ債券發行

ノ認許ヲ得タル場合ニ於テハ舊法ノ規定ニ依

リテ其募集ヲ完了スルコトヲ得

第七十八條 商法第二百四條第一項ノ規定ハ株

式會社カ商法施行前ニ債券發行ノ認許ヲ得タ

ル場合ニハ之ヲ適用セス

第七十九條 株式會社カ商法施行前ニ債券發行

ノ認許ヲ得タル場合ニ於テ一時ニ全額ノ拂込

ヲ爲サシメサルトキハ第一回ノ拂込アリタル

後二週間内ニ本店及ヒ支店ノ所在地ニ於テ拂

込ミタル金額及ヒ商法第七十三條第三號乃

至第六號ニ掲ケタル事項ヲ登記スルコトヲ要

ス

第八十條 商法施行前ニ社債ノ全額又ハ一部

ノ拂込アリタルトキハ其施行ノ日ヨリ二週間

内ニ本店及ヒ支店ノ所在地ニ於テ拂込ミタル

金額及ヒ商法第七十三條第三號乃至第六號

ニ掲ケタル事項ヲ登記スルコトヲ要ス

第八十一條 商法施行前ニ發行シタル債券ハ商

法第二百五條ノ規定ニ違フモ之ヲ改ムルコト

ヲ要セス

第五十七條但書ノ規定ハ債券ニ之ヲ準用ス

第八十二條 商法第二百九條第二項ノ規定ハ商

法施行前ニ假決議ヲ爲シテ未タ其通知ヲ發セ

サル場合ニモ亦之ヲ適用ス

第八十三條 商法第二百九條第四項ノ規定ハ株

式會社カ商法施行前ニ定款變更ノ決議又ハ假

決議ヲ爲シタル場合ニハ之ヲ適用セス

第八十四條 株式會社カ舊商法施行前ニ資本ノ

増加若クハ減少ノ決議又ハ假決議ヲ爲シタル

場合ニ於テハ舊商法ノ規定ニ依リテ其増加又

ハ減少ヲ爲スコトヲ得

商法第二百二十八條乃至第三百三十條ノ規定ハ前

項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第八十五條 商法施行前ニ爲シタル決議又ハ假

決議ニ依リテ資本ヲ増加シタル場合ニ於テ商

法施行前ニ新株ニ付キ拂込ミタル株金額ノ登

記ヲ爲ササリシトキハ其施行ノ日ヨリ、商法

施行後ニ拂込ノリタルトキハ其日ヨリ二週内ニ本店及ヒ支店ノ所在地ニ於テ其登記ヲ爲スコトヲ要ス

第八十六條 株式會社カ商法施行前ニ解散シタル場合ニ於テ未タ解散ノ決議ヲ爲ササルトキハ取締役ハ商法施行ノ後遲滞ナク株主ニ對シテ解散ノ通知ヲ發スルコトヲ要ス

第八十七條 取締役カ前二條ノ規定ニ違反シタルトキハ五十圓以上五十圓以下ノ過料ニ處セラレ

第八十八條 株式會社ノ清算人ハ株主總會又ハ裁判所カ商法施行前ニ與ヘタル訓示ヲ遵守スルコトヲ要ス

第八十九條 商法施行前ニ舊商法第二百四十二條ノ規定ニ依リテ選任シタル代人ハ商法施行

ノ後ト雖モ其權限ヲ保有ス

第九十條 第三十三條ノ規定ハ商法施行前ニ解散シタル株式會社ノ清算人カ爲スヘキ公告ニ之ヲ準用ス

第九十一條 第二十六條、第三十條乃至第三十二條、第三十五條及ヒ第三十六條ノ規定ハ株式會社ニ之ヲ準用ス

第九十二條 商法施行前ニ日本ニ支店ヲ設ケタル外國會社ニ付テハ勅令ヲ以テ特別ノ規程ヲ設ケルコトヲ得商法施行前ニ外國人カ日本ニ於テ設立シタル會社及ヒ組合ニ付キ亦同シ

第九十三條 商法施行前ニ舊商法中會社ニ關スル罰則ヲ適用スヘキ行爲アリタルトキハ商法施行ノ後ト雖モ其罰則ヲ適用ス

第九十四條 私設鐵道株式會社ニハ明治二十年

勅令第十二號私設鐵道條例ノ改正ニ至ルマデ舊商法及ヒ其附屬法令中株式會社ニ關スル規定ヲ適用ス

第九十五條 保險事業ハ政府ノ免許ヲ得ルニ非サレハ之ヲ營ムコトヲ得ス

政府ノ免許ヲ得スシテ保險事業ヲ營ム者アルトキハ裁判所ハ檢事ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其營業ヲ禁止スルコトヲ得

前項ノ禁止ニ拘ハラス保險事業ヲ營ム者又ハ之ヲ營ム會社ノ業務ヲ執行スル社員若クハ取締役ハ十圓以上十圓以下ノ過料ニ處セラレ

第九十六條 保險事業ハ株式會社ニ非サレハ之ヲ營ムコトヲ得ス

第九十七條 保險會社ハ他ノ營業ヲ兼ヌルコトヲ得ス

同一ノ會社ニシテ生命保險ト損害保險トヲ併セテ營業スルコトヲ得ス

第九十八條 保險會社ノ發起人カ營業ノ免許ヲ請フニハ定款及ヒ左ニ掲ケタル事項ヲ記載シタル書面ヲ差出タスコトヲ要ス

一 保險ノ種類及ヒ營業ノ範圍

二 普通保險約款

三 保險料及ヒ責任準備金算出ノ基礎及ヒ方法

四 責任準備金利用ノ方法

第九十九條 保險會社カ前條ニ掲ケタル書類ヲ變更スルニハ政府ノ認可ヲ得ルコトヲ要ス

第一百條 政府カ第九十八條ニ掲ケタル書類ノ變更ヲ必要ト認ムルトキハ其變更ヲ命スルコトヲ得

第一百條 政府ハ何時ニテモ保險會社ヲシテ其

營業ノ報告ヲ爲サシメ又ハ會社ノ業務及ヒ會社財產ノ狀況ヲ検査スルコトヲ得

第一百一條 政府カ保險會社ノ業務又ハ會社財產

ノ狀況ニ依リ其營業ノ繼續ヲ困難ナリト認ムルトキ又ハ保險會社カ政府ノ命令ニ違反シタルトキ又ハ政府ハ其營業ノ停止又ハ取締役ノ改選ヲ命スルコトヲ得

前項ニ掲ケタル事由アリト認ムルトキハ裁判所ハ檢事ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ會社ノ解散ヲ命スルコトヲ得

第一百三條 保險會社ハ總會終結ノ後遲滯ナク商

法第九十條ニ掲ケタル書類及ヒ總會ノ決議錄ヲ政府ニ差出タスコトヲ要ス

第一百四條 保險契約者、被保險者及ヒ保險金額

ヲ受取ルヘキ保險會社ノ定時總會終結ノ後營業報告書、財産目錄若クハ貸借對照表ヲ閱覽

ヲ求メ又ハ其謄本若クハ抄本ノ交付ヲ請求スルコトヲ得但保險會社ハ定款又ハ保險契約ノ定ムル所ニ依リ其謄本又ハ抄本ノ交付ニ付キ手数料ヲ拂ハシムルコトヲ妨ケス

第一百五條 保險會社ハ他ノ事業ヲ目的トスル會社ト合併ヲ爲スコトヲ得ス

生命保險ヲ營業トスル會社ト損害保險ヲ營業トスル會社トハ合併ヲ爲スコトヲ得ス

第一百六條 保險會社カ合併ヲ爲スニハ特ニ財産

目錄及ヒ貸借對照表ヲ作り合併契約書ト共ニ之ヲ政府ニ差出タシ其認可ヲ得ルコトヲ要ス

第一百七條 保險會社カ任意ノ解散ヲ爲スニハ政府ノ認可ヲ得ルコトヲ要ス

第一百八條 生命保險ヲ營業トスル會社ニ有リテ

ハ保險金額ヲ受取ルヘキ者ハ會社財產ニ對シ他ノ債權者ニ先チテ其權利ヲ行フコトヲ得

第一百九條 生命保險ヲ營業トスル會社カ解散シ

タル場合ニ於テハ保險金額ヲ受取ルヘキ者ハ被保險者ノ爲メニ積立テタル金額ノ割合ニ應シテ其權利ヲ行フコトヲ得但會社ノ解散前ニ保險金額ヲ受取ルヘカリシ場合ハ此限ニ在ラズ

前項ノ規定ハ損害保險ヲ營業トスル會社ニ之ヲ準用ス

第一百十條 第九十七條及ヒ前十一條ノ規定ハ商

法施行前ニ設立シタル合資會社又ハ株式會社ニシテ保險ヲ營業トスルモノニ之ヲ準用ス

商法施行前ニ設立シタル會社ニシテ第九十七

條ニ禁止シタル兼業ヲ爲スモノハ商法施行ノ

日ヨリ六个月内ニ其兼業ヲ廢止スルコトヲ要ス若シ之ニ違反シタルトキハ裁判所ハ檢事ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其保險營業ヲ禁止スルコトヲ得

第一百十一條 第九十七條、第九十九條乃至第百

二條、第百五條乃至第百九條及ヒ前條第二項ノ規定ハ商法施行前ニ設立シタル合名會社ニシテ保險ヲ營業トスルモノニ之ヲ準用ス

第一百十二條 商法施行前ニ設立シタル合名會社

ニシテ保險ヲ營業トスルモノハ財産目錄及ヒ貸借對照表ヲ作り毎ニ遲滯ナク營業報告書、損益計算書及ヒ利益ノ配當ニ關スル案ト共ニ之ヲ政府ニ差出タスコトヲ要ス

第一百十三條 商法施行前ニ設立シタル合名會社

ニシテ保險ヲ營業トスルモノノ財産目錄及ヒ
貸借對照表ヲ作ル毎ニ保險契約者、被保險者
及ヒ保險金額ヲ受取ルヘキ者ハ第四百四條ニ定
メタル權利ヲ行フコトヲ得

第四百十四條 第九十七條、第九十九條乃至第百
二條及ヒ第百十條第二項ノ規定ハ商法施行前

ヨリ保險事業ヲ營ム者ニ之ヲ準用ス
第百十五條 外國會社カ日本ニ支店又ハ代理店
ヲ設ケテ保險事業ヲ營ム場合ニ付テハ勅令テ

以テ特別ノ規程ヲ設クルコトヲ得
第百十六條 保險會社ニ關スル細則ハ農商務大
臣之ヲ定ム

第百十七條 明治十年第六十六號布告利息制限
法第五條ノ規定ハ商事ニハ之ヲ適用セス

第百十八條 商法施行前ニ設定シタル質權ノ實

行ニ付テハ別段ノ意思表示アリタル場合ヲ除
ク外競賣法ノ規定ヲ適用ス但取引所ノ相場ア
ル有價證券其他ノ商品ニ在リテハ執達吏ハ取
引所ニ於テ之ヲ賣却スルコトヲ得
前項ノ規定ハ留置權者カ其留置物ヲ賣却スル
場合ニ之ヲ準用ス

第百十九條 商法施行前ニ發行シタル指圖證券
及ヒ無記名證券ニ 本法ニ別段ノ定アル場合

ヲ除ク外舊商法ノ規定ヲ適用ス但民法施行前
第三十條、第三十一條及ヒ第三十三條ノ準用
ヲ妨ケス

第百二十條 商法第二百八十一條ノ規定ハ商法
施行前ニ發行シタル指圖證券及ヒ無記名證券
ニモ亦之ヲ適用ス

第百二十一條 商法第二百九十九條ノ規定ハ商

法施行前ニ約シタル匿名組合ニ亦之ヲ適用ス
第百二十二條 湖川、港灣及ヒ沿岸小航海ノ範
圍ハ遞信大臣之ヲ定ム

第百二十三條 手形ノ所持人ノ其前者ニ對スル
償還請求權ハ支拂拒絕證書ノ作成カ商法施行
前ニ在リタル場合ニ於テハ其施行ノ日ヨリ、
支拂拒絕證書ノ作成カ商法施行後ニ在リタル
場合ニ於テハ其作成ノ日ヨリ六ヶ月ヲ經過シ
タルトキハ時効ニ因リテ消滅ス

裏書人ノ其前者ニ對スル償還請求權ハ商法施
行前ニ償還ヲ爲シタル場合ニ於テハ其施行ノ
日ヨリ、商法施行後ニ償還ヲ爲シタル場合ニ
於テハ其日ヨリ六ヶ月ヲ經過シタルトキハ時
効ニ因リテ消滅ス
商法施行前ニ進行ヲ始メタル時効ノ殘期カ商

法施行ノ日ヨリ起算シテ六ヶ月ヨリ短キトキ
ハ時効ハ其殘期ヲ經過スルニ因リテ完成ス

第百二十四條 明治十九年法律第二號公證人規
則第二十八條ノ規定ハ公證人カ拒絕證書ヲ作
ル場合ニハ之ヲ適用セス

第百二十五條 外國ニ於テ爲シタル手形行爲ノ
要件ハ行爲地ノ法律ニ依ル

前項ノ規定ニ拘ハラズ外國ニ於テ爲シタル手
形行爲カ日本ノ法律ニ定メタル要件ヲ具備ス
ルトキハ外國ノ法律ニ依レハ要件ヲ具備セサ
ルトキト雖モ爾後日本ニ於テ爲シタル手形行
爲ハ有效トス日本人カ外國ニ於テ日本人ニ對
シテ爲シタル手形行爲カ日本ノ法律ニ定メタ
ル要件ヲ具備スルトキ亦同シ

第百二十六條 外國ニ於テ手形上ノ權利ヲ行使

又ハ保全スル爲メニ爲ス行爲ノ方式ハ行爲地ノ法律ニ依ル

第二百二十七條 商法第五百五十二條第三項ノ規定ハ商法施行前ニ選任シタル船舶管理人ニモ亦之ヲ適用ス

商法第五百五十三條ノ規定ハ商法施行ノ日ヨリ其施行前ニ選任シタル船舶管理人ニモ亦之ヲ適用ス

第二百二十八條 商法第五百五十六條ノ規定ハ商法施行前ニ爲シタル船舶ノ貸借ニモ亦之ヲ適用ス

第二百二十九條 商法第五百五十八條乃至第五百六十八條及ヒ第五百七十條乃至第五百七十四條ノ規定ハ商法施行ノ日ヨリ其施行前ニ選任シタル船長ニモ亦之ヲ適用ス

第二百三十條 商法第五百六十二條第一項第二號乃至第五號ニ掲ケタル書類ノ書式ハ遞信大臣之ヲ定ム

第二百三十一條 委付ノ原因カ商法施行後ニ生シタルトキハ其施行前ニ爲シタル保險契約ニ付テモ被保險者ハ商法ノ規定ニ從ヒテ委付ヲ爲スコトヲ得

第二百三十二條 船舶ノ存否カ商法施行ノ日ヨリ六個月間分明ナラサルトキハ未タ舊商法第九百六十六條第一項ノ期間ヲ經過セサルトキト雖モ其船舶ハ行方ノ知レサルモノト看做ス

第二百三十三條 商法施行ノ際舊商法第九百六十九條第一項ニ定メタル三日ノ期間カ未タ満了ニ至ラサルトキハ商法施行ノ日ヨリ三個月内ニ商法第六百七十四條ニ定メタル通知ヲ發シ

テ委付ヲ爲スコトヲ得
第二百三十四條 船舶ノ先取特權ニ關スル商法ノ規定ハ其施行前ニ發生シタル債權ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第二百三十五條 第三十三條ノ規定ハ商法第六百八十四條第一項ノ規定ニ依リ爲スヘキ公告ニ之ヲ適用ス

第二百三十六條 船舶ノ抵當權ニ關スル商法ノ規定ハ商法施行前ニ設定シタル抵當權ニモ亦之ヲ適用ス

第二百三十七條 民法施行法第二條、第三條、第三十條、第三十一條、第三十三條、第三十四條、第五十三條及ヒ第五十六條ノ規定ハ商事ニ之ヲ適用ス
第二百三十八條 明治二十三年法律第三十二號商

法第九百七十八條ヲ左ノ如ク改ム

商人カ支拂ヲ停止シタルトキハ裁判所ハ本人又ハ債權者ノ申立ニ因リ決定ヲ以テ破産ヲ宣告ス

裁判所ハ口頭辯論ヲ經スシテ裁判ヲ爲スコトヲ得此裁判ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第二百三十九條 破産宣告ノ申立ヲ爲ス債權者ハ裁判所ノ定ムル所ニ從ヒ破産手續ニ必要ナル費用ヲ豫納スルコトヲ要ス

債權者カ前項ノ費用ヲ豫納セサルトキハ裁判所ハ破産宣告ノ申立ヲ棄却スルコトヲ得

第二百四十條 本人カ破産宣告ノ申立ヲ爲シタルトキハ破産手續ニ必要ナル費用ハ假ニ國庫ヨリ之ヲ支辨スルコトヲ要ス債權者カ破産宣

皆ノ申立ヲ爲シタル場合ニ於テ裁判所カ前條
第二項ノ規定ニ依リテ其申立ヲ棄却セサルト
キ亦同シ

第四百四十一條 裁判所ハ破産事件ニ付キ地方裁
判所又ハ區裁判所ニ法律上ノ補助ヲ求ムルコ
トヲ得

第四百四十二條 明治二十三年法律第三十二號商
法第五十一條第五號ヲ左ノ如ク改ム

第五 財産目録、貸借對照表ノ作成若クハ支
拂停止届出ノ義務ヲ怠リタルトキ又ハ裁
判所ノ許可ヲ得スシテ其住地ヲ離レタル
トキ

トキ

第四百四十三條 明治二十三年法律第三十二號商
法第五十四條ヲ左ノ如ク改ム
破産宣告ヲ受ケタル債務者ハ復權ヲ得ルニ非

サレハ會社ノ無限責任社員、舊商法ノ規定ニ
從ヒテ設立シタル合資會社ノ業務擔當社員、
株式會社ノ取締役若クハ監査役、清算人、破
産管財人又ハ商業會議所ノ會員ト爲ルコトヲ
得ス

第四百四十四條 明治二十三年法律第三十二號商
法第五十五條第三項ハ之ヲ削除ス

第四百四十五條 明治二十三年法律第三十二號商
法第五十九條ヲ左ノ如ク改ム

商人カ商行爲ニ因リテ生シタル債務ニ付キ自
己ノ過失ナクシテ支拂ヲ中止セサルコトヲ得
サルニ至リタル場合ニ於テ其債權者ノ過半數
以上ノ承諾ヲ得タルトキハ營業所ノ所在地又
ハ住所地ヲ管轄スル裁判所ハ一年ヲ超エサル
範圍内ニ於テ支拂猶豫ヲ與フルコトヲ得

附則

第四百四十六條 本法ハ商法施行ノ日ヨリ之ヲ施
行ス

第四百四十七條 明治二十三年法律第五十九號商
法施行條例ハ第二十條、第二十四條、第二十
五條、第三十五條乃至第四十五條及ヒ第二十
八條乃至第五十條ヲ除ク外本法施行ノ日ヨリ
之ヲ廢止ス但第二十一條乃至第二十三條及ヒ
第五十一條ノ規定ハ舊商法ノ規定ニ依ルヘキ
場合ニ於テハ仍ホ其效力ヲ存ス

商法施行法終

民事訴訟法目次

民事訴訟法目次

民事訴訟法

第一編 總則

第一章 裁判所	一
第一節 裁判所ノ事物ノ管轄	一
第二節 裁判所ノ土地ノ管轄	一
第三節 管轄裁判所ノ指定	三
第四節 裁判所ノ管轄ニ付テノ合意	六
第五節 裁判所職員ノ除斥及ヒ忌避	七
第六節 檢事ノ立會	七
第二章 當事者	〇
第一節 訴訟能力	〇
第二節 共同訴訟人	〇
第三節 第三者ノ訴訟參加	二
第四節 訴訟代理人及ヒ輔佐人	三
	六

第三章 訴訟手續

第五節 訴訟費用	一九
第六節 保證	二三
第七節 訴訟上ノ救助	二四
第三章 訴訟手續	二六
第一節 口頭辯論及ヒ準備書面	二六
第二節 送達	三三
第三節 期日及ヒ期間	三八
第四節 懈怠ノ結果及ヒ原狀回復	四一
第五節 訴訟手續ノ中斷及ヒ中止	四二
第一編 第一審ノ訴訟手續	四五
第一章 地方裁判所ノ訴訟手續	四五
第一節 判決前ノ訴訟手續	四五
第二節 判決	五三
第三節 闕席判決	五三
第四節 計算事件、財產分別及ヒ此	五七

民事訴訟法目次

二

二類スル訴訟ノ準備手續	六一
第五節 證據調ノ總則	六三
第六節 人證	六六
第七節 鑑定	七四
第八節 書證	七七
第九節 檢證	八二
第十節 當事者本人ノ訊問	八三
第十一節 證據保全	八三
第一章 區裁判所ノ訴訟手續	八五
第一節 通常ノ訴訟手續	七五
第二節 督促手續	八七
第三編 上訴	九〇
第一章 控訴	九〇
第二章 上告	九七
第三章 抗告	一〇二

第四編 再審	一〇五
第五節 證書訴訟及ヒ爲替訴訟	一〇九
第六編 強制執行	一一二
第一章 總則	一一二
第二章 金錢ノ債權ニ付テノ強制執行	一一三
第一節 動産ニ對スル強制執行	一三〇
第一款 通則	一三〇
第二款 有體動産ニ對スル強制執行	一三一
第三款 債權及ヒ他ノ財産權ニ對スル強制執行	一三七
第四款 配當手續	一四四
第二節 不動産ニ對スル強制執行	一四七

民事訴訟法目次

三

第一款 通則	一四七
第二款 強制競賣	一四七
第三款 強制管理	一六三
第三節 船舶ニ對スル強制執行	一六六
第二章 金錢ノ支拂ヲ目的トセサル債權	一六九
ニ付テノ強制執行	一六九
第四章 假差押及ヒ假處分	一七一
第七編 公示催告手續	一七六
第八編 仲裁手續	一八一
民事訴訟法施行條例	一八六
民事訴訟用印紙法	一八七
民事訴訟費用法	一九〇
家資分散法	一九二

目次終

民事訴訟法

民事訴訟法

(明治二十三年三月法律第二十九號)

朕民事訴訟法ヲ裁可シ之ヲ公布セシム此法律ハ
明治二十四年四月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命
ス

第一編 總則

第一章 裁判所

第一節 裁判所ノ事物ノ管轄

第一條 裁判所ノ事物ノ管轄ハ裁判所構成法ノ

規定ニ從フ

第二條 訴訟物ノ價額ニ依リ管轄ノ定マルトキ

ハ以下數條ノ規定ニ從フ

第三條 訴訟物ノ價額ハ起訴ノ時日ニ於ケル價
額ニ依リ之ヲ規定ス

果實、損害賠償及ヒ訴訟費用ハ法律上相牽連
スル主タル請求ニ附帶シ一ノ訴ヲ以テ請求ス
ルトキハ之ヲ算入セス

第四條 一ノ訴ヲ以テ數箇ノ請求ヲ爲ストキハ
前條第二項ニ掲グルモノヲ除ク外其額ヲ合算
ス

本訴ト反訴トノ訴訟物ノ價額ハ之ヲ合算セス
第五條 訴訟物ノ價額ハ左ノ方法ニ依リ之ヲ定
ム

第一 債權ノ擔保又ハ債權ノ擔保ヲ爲ス從
タル物權ヲ訴訟物ナルトキハ其債權ノ額

ニ依ル但物權ノ目的物ノ價額算キトキハ

其額ニ依ル

第二 地役力訴訟物ナルトキハ要役地ノ地

役ニ依リ得ル所ノ價額ニ依ル但地役ノ爲

承役地ノ價額ノ減シタル額カ要役地ノ地役ニ依リ得ル所ノ價額ヨリ多キトキハ其額ニ依ル

第三 貸借又ハ永貸借ノ契約ノ有無又ハ其時期カ訴訟物ナルトキハ爭アル時期ニ當ル借賃ノ額ニ依ル但一箇年借賃ノ二十倍ノ額カ右ノ額ヨリ寡キトキハ其二十倍ノ額ニ依ル

第四 定時ノ供給又ハ收益ニ付テノ權利カ訴訟物ナルトキハ一箇年收入ノ二十倍ノ額ニ依ル但收入權ノ期限定マリタルモノニ付テハ其將來ノ收入ノ總額カ二十倍ノ額ヨリ寡キトキハ其額ニ依ル

第六條 訴訟物ノ價額ハ必要ナル場合ニ於テハ第三條乃至第五條ノ規定ニ從ヒ裁判所ノ意見

チ以テ之ヲ定ム

裁判所ハ申立ニ因リ證據調ヲ命シ又ハ職權ヲ以テ檢證若クハ鑑定ヲ命スルコトヲ得

第七條 地方裁判所ノ判決ニ對シテハ其事件カ區裁判所ノ事物ノ管轄ニ屬ス可キ理由ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第八條 事物ノ管轄ニ付キ區裁判所又ハ地方裁判所カ管轄違ナリト宣言シ其判決確定シタルトキハ此裁判ハ後ニ其事件ノ繫屬ス可キ裁判所ヲ羈束ス

第九條 地方裁判所カ事物ノ管轄違ナリトシテ訴ヲ却下スルトキハ原告ノ申立ニ因リ同時ニ判決ヲ以テ原告ノ指定シタル自己ノ管轄内ノ區裁判所ニ其訴訟ヲ移送ス可シ
區裁判所カ事物ノ管轄違ナリトシテ訴ヲ却下

スルトキハ同時ニ判決ヲ以テ其訴訟ヲ所屬ノ地方裁判所ニ移送ス可シ

移送ノ申立ハ判決ニ接者スル口頭辯論ノ終結前ニ之ヲ爲ス可シ

移送言渡ノ判決確定シタルトキハ其訴訟ハ移送ヲ受ケタル裁判所ニ繫屬スルモノト看做ス

第二節 裁判所ノ土地ノ管轄(裁判籍)

第十條 人ノ普通裁判籍ハ其住所ニ依リテ定ル

普通裁判籍アル地ノ裁判所ハ其人ニ對スル總テノ訴ニ付キ管轄ヲ有ス但訴ニ付專屬裁判籍ヲ定メサル場合ニ限ル

第十一條 軍人、軍屬ハ裁判籍ニ付テハ兵營地若クハ軍艦定繫所ヲ以テ住所トス但此規定ハ豫備、後備ノ軍籍ニ在ル者及ヒ兵役義務履行

ノ爲メノミニ服役スル軍人、軍屬ニ之ヲ適用セス

第十二條 外國ニ在ル本邦ノ公使館及ヒ公使館ノ官吏並ニ其家族、從者ノ裁判上ノ住所ハ本邦ニ於テ本人ノ最後ニ有セシ住所ナリトス此住所ナキモノニ付テハ司法大臣ノ命令ヲ以テ豫メ定ムル東京内ノ區ヲ以テ其住所ナリトス

第十三條 內國ニ住所ヲ有セサル者ノ普通裁判籍ハ本人ノ現在地ニ依リテ定マル若シ其現在地ノ知レサルカ又ハ外國ニ在ルトキハ其最後ニ有セシ內國ノ住所ニ依リテ定マル
然レトモ外國ニ住所ヲ有スル者ニ對シテハ內國ニ於テ生シタル權利關係ニ限り前項ノ裁判籍ニ於テ訴ヲ起スコトヲ得

第十四條 國ノ普通裁判籍ハ訴訟ニ付キ國ヲ代

表スル官廳ノ所在地ニ依リテ定マル但訴訟ニ付キ國ヲ代表スルニ付テノ規定ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

公又ハ私ノ法人及ヒ其資格ニ於テ訴ヘラルルコトヲ得ル會社其他ノ社團又ハ財團等ノ普通裁判籍ハ其所在地ニ依リテ定マル此所在地ハ別段ノ定ナキトキハ事務所所在ノ地トス若シ事務所ナキトキ又ハ數所ニ於テ事務ヲ取扱フトキハ其首長又ハ事務擔當者ノ住所ヲ以テ事務所ト看做ス

第十五條 生徒、雇人、營業使用人、職工、習業者其他性質上一定ノ地ニ永ク寓在ス可キ者ニ對スル財産權上ノ請求ニ付テノ訴ハ其現在地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得
兵役義務履行ノ爲メノミニ服役スル軍人、軍

屬ニ對シテハ其兵營地若クハ軍艦定繫所ノ裁判所ニ前項ノ訴ヲ起スコトヲ得

第十六條 製造、商業其他ノ營業ニ付キ直接ニ取引ヲ爲ス店舗ヲ有スル者ニ對シテハ其店舗所在地ノ裁判所ニ營業上ニ關スル訴ヲ起スコトヲ得

前項ノ裁判籍ハ住家及ヒ農業用建物アル地所ヲ利用スル所有者、用益者又ハ貸借人ニ對スル訴ニ付テモ亦之ヲ適用ス但此訴カ地所ノ利用ニ付テノ權利關係ヲ有スルトキニ限ル

第十七條 內國ニ住所ヲ有セサル債務者ニ對スル財産權上ノ請求ニ付テノ訴ハ其財産又ハ訴ヲ爲シテ請求スル物ノ所在地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得債權ニ付テハ債務者(第三債務者)ノ住所ヲ以テ其財産ノ所在地トス又債權

ニ付キ物カ擔保ノ責ヲ負フトキハ其物ノ所在地ヲ以テ財産ノ所在地トス

第十八條 契約ノ成立若クハ不成立ノ確定又ハ其履行若クハ銷除、廢罷、解除又ハ其履行若クハ不十分ノ履行ニ關スル賠償ノ訴ハ其訴訟ニ係ル義務ヲ履行ス可キ地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

第十九條 會社其他ノ社團ヨリ社員ニ對シ又ハ社員ヨリ社員ニ對シ其社員タル資格ニ基ク請求ノ訴ハ其會社其他ノ社團ノ普通裁判籍アル地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

第二十條 不正ノ損害ノ訴ハ責任者ニ對シ其行為ノ有リタル地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得
第二十一條 辯護士又ハ執達吏ノ手数料及ヒ立替金ニ付キ其委任者ニ對スル訴ハ訴訟物ノ價

額ノ多寡ニ拘ハラズ本訴訟ノ第一審裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

第二十二條 不動産ニ付テハ其所在地ノ裁判所ハ總テ不動産上ノ訴殊ニ本權並ニ占有ノ訴及ヒ分割並ニ經界ノ訴ヲ專ラニ管轄ス

地役ニ付テノ訴ハ承役地所在地ノ裁判所專ラニ之ヲ管轄ス

第二十三條 不動産上ノ裁判籍ニ於テハ債權ノ擔保ヲ爲ス從タル物權ニ基ク不動産上ノ訴ニ附帶シテ同一被告ニ對スル債權ノ訴ヲ起スコトヲ得

不動産上ノ裁判籍ニ於テハ不動産ノ所有者若クハ占有者ニ對スル人權ノ訴又ハ不動産ニ加ヘタル損害ノ訴ヲ起スコトヲ得

第二十四條 相續權、遺贈其他死亡ニ因リテ效

果チ生スル處分ニ基ク請求ノ訴ハ遺產者死亡ノ時普通裁判籍ヲ有セシ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

相續裁判籍ニ於テハ遺產債權者ヨリ遺產者又ハ相續人ニ對スル請求ノ訴ヲ起スコトヲ得但遺產ノ全部又ハ一分カ其裁判所ノ管轄區内ニ存在スルトキニ限ル

第二十五條 第二十二條ノ規定ヲ除ク外原告ハ數箇ノ管轄裁判所ノ中ニ就キ選擇ヲ爲スコトヲ得

第三節 管轄裁判所ノ指定

第二十六條 管轄裁判所ノ指定ハ裁判所構成法ニ定メタル場合ノ外尙ホ不動産上ノ裁判籍ニ訴ヲ起スコキ場合ニ於テ不動産カ數箇ノ裁判所ノ管轄區内ニ散在スルトキモ亦之ヲ爲ス

第二十七條 管轄裁判所ノ指定ニ付キ申請ヲ爲ス場合及ヒ其決定ヲ爲ス裁判所ハ裁判所構成法第十條ノ規定ニ從フ

第二十八條 管轄裁判所ノ指定ニ付テノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ其申請ニ付キ管轄權ヲ有スル裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得

右裁判所ハ口頭辯論ヲ經スシテ其申請ヲ決定ス

管轄裁判所ヲ定メタル決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第四節 裁判所ノ管轄ニ付

テノ合意

第二十九條 第一審裁判所ハ當然管轄權ヲ有セサルモ當事者ノ合意ニ因リ管轄權ヲ有ス但書面ヲ以テ合意ヲ爲シ且其合意カ一定ノ權利關

係及ヒ其權利關係ヨリ生スル訴訟ニ係ルトキニ限ル

第三十條 被告カ管轄違ノ申立ヲ爲サスシテ本案ノ口頭辯論ヲ爲ストキハ亦前條ト同一ノ效力ヲ生ス

第三十一條 左ノ場合ニ於テハ第二十九條及ヒ第三十條ノ規定ヲ適用セス

第一 財產權上ノ請求ニ非サル訴訟ニ係ルトキ

第二 專屬管轄ニ屬スル訴ナルトキ

第五節 裁判所職員ノ除斥及ヒ忌避

第三十二條 判事ハ左ノ場合ニ於テ法律ニ依リ其職務ノ執行ヨリ除斥セラル可シ

第一 判事又ハ其婦カ原告若クハ被告タル

トキ又ハ訴訟ニ係ル請求ニ付キ當事者ノ一方若クハ雙方ト共同權利者、共同義務者若クハ償還義務者タル關係ヲ有スルトキ

第二 判事又ハ其婦カ當事者ノ一方若クハ雙方又ハ其配偶者ト親族ナルトキ但姻族ニ付テハ婚姻ノ解除シタルトキト雖モ亦同シ

第三 判事カ同一ノ事件ニ付キ證人若クハ鑑定人ト爲リテ訊問ヲ受クルトキ又ハ訴訟代理人タル任ヲ受クルトキ若クハ受ケタルトキ又ハ法律上代理人ト爲ル權利ヲ有スルトキ若クハ之ヲ有シタルトキ

第四 判事カ不服ノ申立アル裁判ヲ前審又ハ仲裁ニ於テ爲スニ當リ判事又ハ仲裁人

トシテ干與シタルトキ但此場合ニ於テ判
事ハ受命判事又ハ受託判事トシテハ職務
ノ執行ヨリ除外セラルルコト無シ

第三十三條 判事カ法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ
除外セラルルトキ及ヒ偏頗ノ恐アルトキハ總
テノ場合ニ於テ各當事者ヨリ之ヲ忌避スルコ
トヲ得

偏頗ノ忌避ハ判事ノ不公平ナル裁判ヲ爲スコ
トヲ疑フニ足ル可キ事情アルトキ之ヲ爲スコ
トヲ得

第三十四條 判事カ法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ
除外セラルル場合ニ於ケル判事ノ忌避ハ其訴
訟ノ如何ナル程度ニ在ルヲ問ハス之ヲ爲スコ
トヲ得

偏頗ノ恐アル場合ニ於テハ原告若クハ被告其

覺知シタル忌避ノ原因ヲ主張セスシテ判事ノ
面前ニ於テ申立ヲ爲シ又ハ相手方ノ申立ニ對
シ陳述ヲ爲シタル後ハ其判事ヲ忌避スルコト
ヲ得ス

第三十五條 忌避ノ申請ハ判事所屬ノ裁判所ニ
書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

忌避ノ原因ハ之ヲ疏明スルコトヲ要ス忌避セ
ラレタル判事ノ職務上ノ陳述ハ其疏明ノ用ニ
充ツルコトヲ得

原告若クハ被告カ判事ノ面前ニ於テ申立ヲ爲
シ又ハ相手方ノ申立ニ對シ陳述ヲ爲シタル後
其判事ニ對シ偏頗ノ忌避ヲ爲ストキハ忌避ノ
原因其後ニ生シ又ハ之ヲ其後ニ覺知シタルコ
トヲ疏明ス可シ

第三十六條 忌避セラレタル判事合議裁判所ニ

屬スルトキハ其裁判所忌避ノ申請ヲ裁判ス但
忌避セラレタル判事ハ其裁判ニ參與スルコト
ヲ得ス

若シ其裁判所右判事ノ退去ニ因リ決定ヲ爲ス
コト能ハサルトキハ直近上級ノ裁判所其申請
ヲ裁判ス

區裁判所判事忌避セラレタルトキハ上級ノ地
方裁判所其申請ヲ裁判ス若シ區裁判所判事カ
忌避ノ申請ヲ正當ナリト爲ストキハ裁判ヲ要
セス

第三十七條 忌避ノ申請ニ付テノ裁判ハ口頭辯
論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得忌避セラレタ
ル判事ハ先ツ申請ノ理由ニ付キ職務上意見ヲ
述フ可シ

第三十八條 忌避ノ申請ヲ正當ナリト宣言スル

決定ニ對シテハ上訴ヲ爲スコトヲ得ス其申請
ヲ不當ナリト宣言スル決定ニ對シテハ即時抗
告ヲ爲スコトヲ得

第三十九條 忌避セラレタル判事ハ忌避申請ノ
完結スルマテ總テノ行為ヲ避ク可シ然レトモ
偏頗ノ爲ニ忌避セラレタル判事ハ猶豫ス可カ
ラサル行為ヲ爲スコトヲ得

第四十條 忌避申請ノ管轄裁判所ハ其申請ア
ラサルモ忌避ノ原因タル事情ニ付キ判事ヨリ
申出アルトキ又ハ他ノ事由ヨリシテ判事カ法
律ニ依リ除外セラルル疑アルトキモ亦裁判ヲ

爲ス此裁判ハ豫メ當事者ヲ審訊セスシテ之
爲ス又其裁判ハ之ヲ當事者ニ送達スルコトヲ
要セス

第四十一條 本節ノ規定ハ裁判所書記ニモ之ヲ

準用ス但其裁判ハ書記所屬ノ裁判所之ヲ爲ス

第六節 檢事ノ立會

第四十二條 檢事ハ左ノ訴訟ニ付キ意見ヲ述フ

ル爲メ其口頭辯論ニ立會フ可シ

第一 公ノ法人ニ關スル訴訟

第二 婚姻ニ關スル訴訟

第三 夫婦間ノ財産ニ關スル訴訟

第四 親子若クハ養親子ノ分限其他總テ人

ノ分限ニ關スル訴訟

第五 無能力者ニ關スル訴訟

第六 養料ニ關スル訴訟

第七 失踪者及ヒ相續人虧缺ノ遺産ニ關ス

ル訴訟

第八 證書ノ偽造者クハ繼造ノ訴訟

第九 再審

檢事ノ陳述ハ當事者ノ辯論終リタルトキ之ヲ

爲ス

當事者ハ檢事ノ意見ニ對シ事實ノ更正ノミ

付キ陳述ヲ爲スコトヲ得

第二章 當事者

第一節 訴訟能力

第四十三條 原告若クハ被告カ自ラ訴訟ヲ爲シ

又ハ訴訟代理人ヲシテ之ヲ爲サシムル能力ト

法律上代理人ニ依レル訴訟無能力者ノ代表ト

法律上代理人カ訴訟ヲ爲シ又ハ一ノ訴訟行爲

ヲ爲スニ付テノ特別授權ノ必要トハ民法ノ規

定ニ從フ

第四十四條 外國人ハ自國ノ法律ニ從ヒ訴訟能

力ヲ有セサルモ本邦ノ法律ニ從ヒ訴訟能力ヲ

有スルモノナルトキハ之ヲ有スルモノト看做

ス

第四十五條 裁判所ハ訴訟ノ如何ナル程度ニ在

ルヲ問ハス職權ヲ以テ訴訟能力、法律上代理

人タル資格及ヒ訴訟ヲ爲スニ必要ナル授權ニ

欠缺ナキヤ否ヤヲ調査ス可シ

裁判所ハ遲滯ノ爲メ原告若クハ被告ニ危害ア

リ且其欠缺ノ補正ヲ爲シ得ルモノト認ムルト

キハ原告若クハ被告又ハ其法律上代理人ニ其

欠缺ノ補正ヲ爲ス條件ヲ以テ一時訴訟ヲ爲ス

ヲ許スコトヲ得此場合ニ於テ裁判所ハ欠缺補

正ノ爲メ相當ノ期間ヲ定メ其期間ノ滿了前ニ

判決ヲ爲スコトヲ得但其欠缺ノ補正ハ判決

ニ接著スル口頭辯論ノ終結マテ之ヲ追完スル

コトヲ得

第四十六條 訴訟無能力者又ハ相續人ノ未定ノ

遺産又ハ不分明ナル相續人ニ對シ訴訟起ス可

キ場合ニ於テ法律上代理人アラサルトキハ其

事件ノ繫屬ス可キ裁判所ノ裁判長ハ申立ニ因

リ遲滯ノ爲ニ危害ノ恐アル場合ニ限り特別代

理人ヲ任ス可シ

右申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ

得此裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲シ其裁

判ハ申請人ニ之ヲ送達シ又申請ヲ認許シタル

トキハ其任セラレタル特別代理人ニモ亦之ヲ

送達ス可シ

申請ヲ却下スル裁判ニ對シテハ抗告ヲ爲スコ

トヲ得

裁判長ヨリ任セラレタル特別代理人ハ法律上

代理人又ハ相續人ノ出頭スルマテ訴訟行爲ニ

付キ法律上代理人ノ權利及ヒ義務ヲ有ス

第四十七條 第十五條ニ掲ケタル場合ニ於テ訴訟無能力者カ其現在地又ハ兵營地若クハ軍艦

定繫所ノ裁判所ニ訴ヲ受ク可キ場合ニ於テ其法律上代理人他ノ地ニ住スルトキハ遲滞ノ爲メ危害ナシト雖モ前條ノ規定ニ從ヒ特別代理人ヲ任スルコトヲ得

此他裁判ニ對シ抗告ヲ許ス規定ヲ除ク外總テ前條ノ規定ヲ適用ス

第二節 共同訴訟人

第四十八條 左ノ場合ニ於テハ共同訴訟人トシテ數人カ共ニ訴ヲ爲シ又ハ訴ヲ受クルコトヲ得

第一 數人カ訴訟物ニ付キ權利共通若クハ義務共通ノ地位ニ立ツトキ

第二 同一ナル事實上及ヒ法律上ノ原因ニ

基ク請求又ハ義務カ訴訟ノ目的物タルト

第三 性質ニ於テ同種類ナル事實上及ヒ法律上ノ原因ニ基ク同種類ナル請求又ハ義務カ訴訟ノ目的物タルトキ

第四十九條 共同訴訟人ハ其資格ニ於テハ各別ニ相手方ニ對立シ其一人ノ訴訟行爲及ヒ懈怠又ハ相手方ヨリ其一人ニ對スル訴訟行爲及ヒ懈怠ハ他ノ共同訴訟人ニ利害ヲ及ボサス

第五十條 然レトモ總テノ共同訴訟人ニ對シテ訴訟ニ係ル權利關係カ合一ニノミ確定ス可キトキニ限リ左ノ規定ヲ適用ス

共同訴訟人中ノ或ル人ノ攻撃及ヒ防禦ノ方法(證據方法ヲ包含ス)ハ他ノ共同訴訟人ノ利益ニ於テ效ヲ生ス

共同訴訟人中ノ或ル人カ争ヒ又ハ認諾セサルトキト雖モ總テノ共同訴訟人カ悉ク争ヒ又ハ認諾セサルモノト看做ス

共同訴訟人中ノ或ル人ノミカ期日又ハ期間ヲ懈怠シタルトキハ其懈怠シタル者ハ懈怠セサル者ニ代理ヲ任シタルモノト看做ス

然レトモ懈怠シタル共同訴訟人ニハ其懈怠セザリシ場合ニ於テ爲スコトヲ總テノ送達及ヒ呼出ヲ爲スコトヲ要ス其懈怠シタル共同訴訟人ハ何時タリトモ其後ノ訴訟手續ニ再ヒ加ハルコトヲ得

第三節 第三者ノ訴訟參加

第五十一條 他人ノ間ニ權利拘束ト爲リタル訴訟ノ目的物ノ全部又ハ一分ヲ自己ノ爲ニ請求スル第三者ハ本訴訟ノ權利拘束ノ終ニ至ルマ

テ其訴訟カ第一審ニ於テ繫屬シタル裁判所ニ當事者雙方ニ對スル訴(主參加)ヲ爲シテ其請求ヲ主張スルコトヲ得

第三者カ原告及ヒ被告ノ共謀ニ因リ自己ノ債權ニ損害ヲ生スルコトヲ主張スルトキモ亦同シ

第五十二條 本訴訟ハ第一審ニ繫屬スルト上級

審ニ繫屬スルトトキ間ハ原告、被告若クハ主參加人ノ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ主參加ニ付テノ權利拘束ノ終ニ至ルマテ之ヲ中止スルコトヲ得中止ノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ本訴訟ノ繫屬スル裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得決定ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得中止ヲ命スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第五十三條

他人ノ間ニ權利拘束ト爲リタル訴訟ニ於テ其一方ノ勝訴ニ依リ權利上利害ノ關係ヲ有スル者ハ訴訟ノ如何ナル程度ニ在ルヲ問ハス權利拘束ノ繼續スル間ハ其一方ヲ補助(從參加)スル爲メ之ニ附隨スルコトヲ得

第五十四條

從參加人ハ其附隨スル時ニ於ケル訴訟ノ程度ヲ妨ケサル限リハ其主タル原告若クハ被告ノ爲ニ攻撃及ヒ防禦ノ方法ヲ施用シ且總テノ訴訟行爲ヲ有效ニ行ヒ殊ニ主タル原告若クハ被告ノ爲ニ存スル期間内ニ故障、支拂命令ニ對スル異議又ハ上訴ヲ爲ス權利ヲ有ス

從參加人ノ陳述及ヒ行爲ト相抵觸スル場合ニ於テ被告ノ陳述及ヒ行爲ト被告ノ陳述及ヒ行爲ヲ以テ主タル原告若クハ被告ノ陳述及ヒ行爲ヲ以

テ標準ト爲ス但民法ニ於テ此ニ異ナル規定アルトキハ此限ニ在ラス

第五十五條

從參加人ハ訴訟ヨリ脫退シタルトキト雖モ其補助シタル原告若クハ被告トノ關係ニ於テハ其訴訟ノ確定裁判ヲ不當ナリト主張スルコトヲ得ス

從參加人ハ其附隨ノ時ノ訴訟ノ程度ニ因リ又ハ主タル原告若クハ被告ノ行爲ニ因リ攻撃及ヒ防禦ノ方法ヲ施用スルコトヲ妨ケラルルトキ又ハ主タル原告若クハ被告カ從參加人ノ當時知ラサリシ攻撃及ヒ防禦ノ方法ヲ故意又ハ重過失ニ因リ施用セザリシトキニ限リ其補助シタル原告若クハ被告カ訴訟ヲ不十分ニ爲シタリト主張スルコトヲ得

第五十六條

從參加人ハ本訴訟ノ繫屬スル裁判所

ニ申請ヲ以テ之ヲ爲スコシ

申請ニハ當事者及ヒ訴訟ヲ表示シ又一定ノ利害關係及ヒ附隨セントスル陳述ヲ開示スコシ申請ハ當事者ニ之ヲ送達スコシ從參加ハ故障、異議又ハ上訴ト併合シテ之ヲ爲スコトヲ得

第五十七條

原告若クハ被告カ從參加ニ付キ異議ヲ述フルトキハ當事者及ヒ從參加人ヲ審訊シタル後決定ヲ以テ參加ノ許否ヲ裁判ス其裁判ハ口頭辯論ヲ經シテ之ヲ爲スコトヲ得利害關係ノ存否ニ付キ爭アルトキハ從參加人其關係ヲ説明スルノミヲ以テ參加ヲ許スニ足ル

右ノ決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得參加ヲ許ササル裁判確定セサル間ハ從參加人

本訴訟ニ立會ハシメ殊ニ總テノ期日ニ之ヲ呼出シ又本訴訟ニ關係アル裁判ヲ爲シタルトキハ從參加人ニ其裁判ヲ送達スコシ

第五十八條

從參加人ハ當事者雙方ノ承認ヲ得テ其附隨シタル原告若クハ被告ニ代リ訴訟ヲ擔任スルコトヲ得此場合ニ於テハ其原告若クハ被告ノ申立ニ因リ判決ヲ以テ訴訟ヨリ其原告若クハ被告ヲ脫退セシム可シ

第五十九條

原告若クハ被告若シ敗訴スルトキハ第三者ニ對シ擔保又ハ賠償ノ請求ヲ爲シ得ヘシト信シ又ハ第三者ヨリ請求ヲ受ク可キコトヲ恐ルル場合ニ於テハ訴訟ノ權利拘束間第三者ニ訴訟ヲ告知スルコトヲ得訴訟ノ告知ヲ受ケタル者ハ更ニ訴訟ヲ告知スルコトヲ得

第六十條

訴訟告知ハ訴訟ノ繫屬スル裁判所ニ其訴訟告知ノ理由及ヒ訴訟ノ程度ヲ記載シタル書面ヲ提出シテ之ヲ爲スコトヲ得

此書面ハ第三者ニ送達スルコトヲ要ス又訴訟ヲ告知スル原告若クハ被告ノ相手方ニハ其隣本ヲ送付ス可シ

第六十一條 訴訟ハ訴訟告知ニ拘ハラズ之ヲ續行ス

第三者參加ス可キコトヲ陳述スルトキハ從參加ノ規定ヲ適用ス

第六十二條 第三者ノ名ヲ以テ物ヲ占有スルトキ主張スル者其物ノ占有者トシテ被告ト爲リタルトキハ本案ノ辯論前第三者ヲ辯名シ之ニ陳述ヲ爲サシムル爲メ其呼出ヲ求ムルトキハ第三者ノ陳述ヲ爲シ又ハ之ヲ爲スコキ期日

マテ本案ノ辯論ヲ拒ムコトヲ得

第三者カ被告ノ主張ヲ争フトキ又ハ陳述ヲ爲ササルトキハ被告ハ原告ノ申立ニ應スルコトヲ得

第三者カ被告ノ主張ヲ正當ト認ムルトキハ被告ノ承諾ヲ得テ之ニ代リ訴訟ヲ引受クルコトヲ得

第三者カ訴訟ヲ引受ケタルトキハ裁判所ハ被告ノ申立ニ因リ其被告ヲ訴訟ヨリ脱退セシム可シ其物ニ付テノ裁判ハ被告ニ對シテモ效力ヲ有シ且之ヲ執行スルコトヲ得

第四節 訴訟代理人及ヒ輔佐人

第六十三條 原告若クハ被告自ラ訴訟ヲ爲ササルトキハ辯護士ヲ以テ訴訟代理人トシ之ヲ爲ス

辯護士ノ在ラサル場合ニ於テハ訴訟能力者タル親族若クハ雇人ヲ以テ訴訟代理人ト爲シ若シ此等ノ者ノ在ラサルトキハ他ノ訴訟能力者ヲ以テ訴訟代理人ト爲スコトヲ得

區裁判所ニ於テハ辯護士ノ在ルトキト雖モ訴訟能力者タル親族若クハ雇人ヲ以テ訴訟代理人ト爲スコトヲ得

第六十四條 訴訟委任ハ裁判ノ記録ニ備フ可キ書面委任ヲ以テ之ヲ證ス可シ

私署證書ハ相手方ノ求ニ因リ之ヲ認證ス可シ其認證ハ公證人之ヲ爲シ又相當官吏之ヲ爲スコトヲ得

口頭辯論ノ期日又ハ受命判事若クハ受託判事ノ面前ニ於テ口頭委任ヲ爲シ其陳述調書ニ記載セシムルトキハ書面委任ト同一ナリトス

第六十五條

訴訟委任ハ反訴、主參加、故障、假差押若クハ假處分又ハ強制執行ニ因リ生スル訴訟行爲ヲ併セ訴訟ニ關スル總テノ訴訟行爲ヲ爲シ及ヒ相手方ヨリ辨濟スル費用ノ領取ヲ爲ス權ヲ授與ス

訴訟代理人ハ特別ノ委任ヲ受クルニ非サレハ控訴若クハ上告ヲ爲シ、再審ヲ求メ、代人ヲ任シ、和解ヲ爲シ、訴訟ヲ放棄シ又ハ相手方ヨリ主張シタル請求ヲ認諾スル權ヲ有セス

第六十六條 訴訟委任ハ法律上ノ範圍(第六十五條第一項)ヲ制限スルモ其制限ハ相手方ニ對シ效力ナシ

然レトモ辯護士ニ依レル代理ヲ除ク外ハ各箇ノ訴訟行爲ニ付キ委任ヲ爲スコトヲ得

第六十七條 訴訟代理人數人アルトキハ共同若

之ヲ差出シ裁判所ハ相手方ニ之ヲ送達ス可シ
 代理人ハ謝絶ヲ爲スモ委任者他ノ方法ヲ以テ
 自己ノ權利ノ防衛ヲ爲ササル間ハ其委任者ノ
 爲ニ行爲ヲ爲スコトヲ得

第七十條 委任ノ欠缺ハ原告若クハ被告ノ爲
 メ其代理人ナキモノト看做ス
 裁判所ハ職權ヲ以テ委任ノ欠缺ヲ調査シ委任
 ナク又ハ適式ノ委任ナク代理人トシテ出頭ス
 ル者ニ事情ニ從ヒ費用及ヒ損害ノ保證ヲ立テ
 シメ又ハ之ヲ立テシメスシテ假ニ訴訟ヲ爲ス
 ナ許スコトヲ得
 判決ハ欠缺ヲ補正シ又ハ之ヲ補正スル爲メ裁
 判所ノ適宜ニ定ムル期間ノ滿了後ニ限り之ヲ
 爲スコトヲ得但欠缺ノ補正ハ判決ニ接著スル
 口頭辯論ノ終結マテ之ヲ追完スルコトヲ得

其效力ヲ失フ

第六十九條 委任者ノ死亡、訴訟能力若クハ法
 律上代理ノ變更、委任ノ廢罷及ヒ代理ノ謝絶
 ニ因ル委任ノ消滅ハ其消滅ヲ通知スルマテ相
 手方ニ對シ其效力ナシ
 此通知書ハ原告若クハ被告ヨリ受訴裁判所ニ

第七十一條 原告若クハ被告ハ辯護士ヲ輔佐人
 ト爲シ又ハ何時ニテモ裁判所ノ取消シ得ヘキ
 許可ヲ得テ他ノ訴訟能力者ヲ輔佐人ト爲シテ
 共ニ出頭スルコトヲ得其輔佐人ハ口頭辯論ニ
 於テ權利ヲ伸張シ若ハ防禦スル爲メ原告若ク
 ハ被告ヲ補助スルモノトス
 輔佐人ノ演述ハ原告若クハ被告即時ニ之ヲ取
 消シ若ハ更正セサルトキニ限り原告若クハ被
 告自ラ演述シタルモノト看做ス

第五節 訴訟費用

第七十二條 敗訴ノ原告若クハ被告ハ訴訟ノ費
 用ヲ負擔シ殊ニ訴訟ニ因リ生シタル費用ヲ相
 手方ニ辨濟ス可シ但其費用ハ裁判所ノ意見ニ
 於テ相當ナル權利伸張又ハ權利防禦ニ必要ナ
 リト認ムルモノニ限ル

訴訟中ニ訴ヲ取下ケ、請求ヲ拋棄シ又ハ相手
 方ノ請求ヲ認諾スル原告若クハ被告ハ敗訴ノ
 原告若クハ被告ニ同シ

第七十三條 當事者ノ各方一分ハ勝訴ト爲リ一
 分ハ敗訴ト爲ルトキハ其費用ヲ相消シ又ハ割
 合チ以テ之ヲ分擔ス可シ第一ノ場合ニ於テハ
 各當事者ハ其支出シタル費用ヲ自ラ負擔シ他
 ノ一方ニ對シ辨濟ヲ請求スルコトヲ得ス
 然レトモ裁判所ハ相手方ノ要求格外ニ過分ナ
 ルニ非ス且別段ノ費用ヲ生セサリシトキ又ハ
 判事ノ意見、鑑定人ノ鑑定若クハ相互ノ計算
 ニ因リ要求額ヲ定ムルニ非サレハ容易ニ過分
 ノ要求ヲ避ケルコトヲ得サリシトキハ當事者
 ノ一方ニ訴訟費用ノ全部ヲ負擔セシムルコト
 ヲ得

第七十四條 被告直チニ請求ヲ認諾シ且其作為ニ因リ訴ヲ起メニ至ラシメタルニ非サルトキハ訴訟費用ハ原告ノ勝訴ト爲リタルニ拘ハラズ其負擔ニ歸ス

第七十五條 期日若クハ期間ヲ懈怠シ又ハ自己ノ過失ニ因リ期日ノ變更、辯論ノ延期、辯論續行ノ爲ニスル期日ノ指定、期間ノ延長其他訴訟ノ遲滯ヲ生セシメタル原告若クハ被告ハ本案ノ勝訴者ト爲リタルニ拘ハラズ此カ爲ニ生シタル費用ヲ負擔ス可シ

第七十六條 裁判所ハ無益ナル攻撃又ハ防禦ノ方法(證據方法ヲ包含ス)ヲ主張シタル原告若クハ被告ヲシテ本案ノ勝訴者ト爲リタルニ拘ハラズ其方法ノ費用ヲ負擔セシムルコトヲ得

第七十七條 無益ナル上訴又ハ取下ケタル上訴ノ費用ハ之ヲ提出シタル原告若クハ被告ノ負擔ニ歸ス

第七十八條 上訴ニ因リ裁判ノ全部又ハ一分ヲ廢棄若クハ破毀スルトキハ訴訟ノ總費用(上訴ノ費用ヲ包含ス)ノ裁判ハ本案ノ終局裁判ト併合シテ更ニ之ヲ爲ス可シ

第七十九條 當事者カ訴訟物ニ付キ和解ヲ爲ストキハ其訴訟ノ費用及ヒ和解ノ費用ハ共ニ相消シタルモノト看做ス但當事者別段ノ合意ヲ爲シタルトキハ此限ニ在ラズ

第八十條 法律ノ規定ニ從ヒ費用ニ付キ共同訴訟人ノ連帶義務ノ生セサルトキニ限リ其共同訴訟人ハ相手方ニ對シ平等ニ費用ヲ負擔ス然レトモ共同訴訟人ノ訴訟ニ於ケル利害ノ關係著シク相異ナルトキハ裁判所ハ其利害關係ノ割合ニ從ヒ費用ヲ負擔セシムルコトヲ得

第八十一條 從參加ニ對シ原告若クハ被告カ異議ヲ述フルトキハ其異議ノ決定ニ於テ從參加人ト其原告若クハ被告トノ中間訴訟ノ費用ニ付キ第七十二條乃至第七十八條ノ規定ニ從ヒテ裁判ヲ爲ス可シ

第八十二條 費用ノ點ニ限リタル裁判ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得然レトモ本案ノ裁判ニ對シ許ス可キ上訴ヲ提出シ且追行スルトキニ限リ費用ノ點ニ付キ不服ヲ申立ツルコトヲ得

第八十三條 裁判所書記、法律上代理人、辯護士其他ノ代理人及ヒ執達吏ノ過失又ハ懈怠ニ因リ費用ノ生シタルトキハ受訴裁判所ハ申立

第八十條 法律ノ規定ニ從ヒ費用ニ付キ共同訴訟人ノ連帶義務ノ生セサルトキニ限リ其共同訴訟人ハ相手方ニ對シ平等ニ費用ヲ負擔ス然レトモ共同訴訟人ノ訴訟ニ於ケル利害ノ關係著シク相異ナルトキハ裁判所ハ其利害關係ノ割合ニ從ヒ費用ヲ負擔セシムルコトヲ得

第八十一條 從參加ニ對シ原告若クハ被告カ異議ヲ述フルトキハ其異議ノ決定ニ於テ從參加人ト其原告若クハ被告トノ中間訴訟ノ費用ニ付キ第七十二條乃至第七十八條ノ規定ニ從ヒテ裁判ヲ爲ス可シ

第八十二條 費用ノ點ニ限リタル裁判ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得然レトモ本案ノ裁判ニ對シ許ス可キ上訴ヲ提出シ且追行スルトキニ限リ費用ノ點ニ付キ不服ヲ申立ツルコトヲ得

第八十三條 裁判所書記、法律上代理人、辯護士其他ノ代理人及ヒ執達吏ノ過失又ハ懈怠ニ因リ費用ノ生シタルトキハ受訴裁判所ハ申立

ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其費用ノ辨濟ヲ負擔セ
シムル決定ヲ爲スコトヲ得但其決定前關係人
ニ口頭又ハ書面ニテ陳辯ヲ爲ス機會ヲ與フ可
シ
此裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ
得其決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得
第八十四條 辨濟ス可キ費用額ノ確定ハ申請ニ
因リ訴訟ノ第一審ニ繫屬シタル裁判所ノ決定
ヲ以テ之ヲ爲ス
申請ハ第七十二條第二項又ハ上訴取下ノ場合
ヲ除ク外執行シ得ヘキ裁判ニ依ルトキニ限り
之ヲ爲スコトヲ得
申請ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得
申請ニハ費用計算書、相手方ニ付與ス可キ計
算書ノ謄本及ヒ各箇費用額ノ説明ニ必要ナル

證書ヲ添附ス可シ
第八十五條 費用額確定ノ裁判ハ口頭辯論ヲ經
スシテ之ヲ爲スコトヲ得
裁判所ハ裁判所書記ニ費用計算書ノ計算上ノ
檢査ヲ命スルコトヲ得
裁判所ハ費用額確定ノ決定ヲ爲ス前相手方ニ
計算書ヲ付與シテ裁判所ノ定ムル期限内ニ陳
述ヲ爲ス可キ旨ヲ之ニ催告スルコトヲ得此決
定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得
第八十六條 當事者ハ訴訟費用ノ全部又ハ一分
ヲ割合ニ從ヒ負擔ス可キトキハ裁判所ハ費用
額確定ノ決定ヲ爲ス前相手方ニ裁判所ノ定ム
ル期間内ニ其費用ノ計算書ヲ差出ス可キ旨ヲ
催告ス可シ此期間ヲ徒過シタル後ハ費用額確
定ノ決定ハ相手方ノ費用ヲ顧ミス之ヲ爲スコ

シ但相手方ハ後ニ自己ノ費用ヲ以テ其費用額
確定ノ申請ヲ爲ス妨ト爲ルコト無シ

第六節 保 證

第八十七條 訴訟上ノ保證ハ當事者カ別段ノ合
意ヲ爲ス場合又ハ此法律ニ於テ保證ヲ定ムル
コトヲ裁判所ノ自由ナル意見ニ任スル場合ヲ
除ク外裁判所ノ意見ニ於テ擔保ニ十分ナリト
スル現金又ハ有價證券ヲ供託シテ之ヲ爲ス
第八十八條 原告又ハ原告ノ從參加人タル外國
人ハ被告ニ對シ其求ニ因リ訴訟費用ニ付キ保
證ヲ立ツ可シ
左ノ場合ニ於テハ保證ヲ立ツル義務ヲ生セス
第一 國際條約又ハ原告ノ屬スル國ノ法律
ニ依リ本邦人カ同一ノ場合ニ於テ保證ヲ
立ツル義務ヲキトキ

第二 反訴ノ場合

第三 證書訴訟及ヒ爲替訴訟ノ場合
第四 公示催告ニ基キ起シタル訴ノ場合

第八十九條 裁判所ハ前條第一項ノ場合ニ於テ
ハ保證ヲ立ツ可キ數額ヲ確定ス可シ
此數額ヲ確定スルニハ被告ノ訟ヲ受ケタルカ
爲メ各審級ニ於テ支出ス可キ訴訟費用ノ額ヲ
標準ト爲ス可シ

訴訟中ニ保證ノ不足ヲ生シ且追増保證ヲ立ツ
可キコトヲ被告カ求ムルトキハ前項ト同一ノ
手續ニ依ル可シ但爭ナキ請求ノ部分擔保ニ十
分ナルトキハ此限ニ在ラス
第九十條 裁判所ハ保證ヲ立ツ可キ期間ヲ定
ム可シ
此期間ノ經過後裁判アルマテニ保證ヲ立テサ

ル場合ニ於テハ被告ノ申立ニ因リ判決ヲ以テ
訴ヲ取下ケタリト宣言シ又原告カ上訴ヲ爲シ
タルトキハ其上訴ヲ取下ケタリト宣言ス可シ

第七節 訴訟上ノ救助

第九十一條 何人ヲ問ハス自己及ヒ其家族ノ必
要ナル生活ヲ害スルニ非サレハ訴訟費用ヲ出
タスコト能ハサル者ハ訴訟上ノ救助ヲ求ムル
コトヲ得但し其目的トスル權利ノ伸張又ハ防禦
ノ輕忽ヲナス又ハ見込ナキニ非スト見ユルト
キニ限ル

第九十二條 外國人ハ國際條約又ハ其屬スル國
ノ法律ニ依リ本邦人カ同一ノ場合ニ於テ訴訟
上ノ救助ヲ求ムルコトヲ得ルトキニ限り之ヲ求
ムルコトヲ得

第九十三條 訴訟上救助ノ申請ハ訴訟ノ關係ヲ

表明シ且證據方法ヲ開示シテ其救助ヲ求ムル
審級ノ裁判所ニ之ヲ提出ス可シ其申請ハ口頭
ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

原告若クハ被告ハ申請ノ提出ト共ニ管轄市町
村長ヨリ發シタル證書ヲ出タスコトヲ要ス其
證書ニハ原告若クハ被告ノ身分、職業、財産
並ニ家族ノ實況及ヒ其納ム可キ直税ノ額ヲ開
示シテ訴訟費用支拂ノ無資力ヲ證ス可シ

第九十四條 訴訟上ノ救助ハ各審ニ於テ各別ニ
之ヲ付與ス第一審ニ於テハ強制執行ニ付テモ
之ヲ付與スルモノトス

前審ニ於テ訴訟上ノ救助ヲ受ケタルトキハ上
級審ニ於テハ無資力ヲ證スルコトヲ要セス相
手方上訴ヲ提出シタルトキハ上級審ニ於テハ
訴訟上ノ救助ヲ求ムル原告若クハ被告ノ權利

ノ伸張又ハ防禦ノ輕忽ヲナス又ハ見込ナキニ
非スト見ユルヤチ調査スルコトヲ要セス

第九十五條 訴訟上ノ救助ハ之ヲ受ケタル條件
ノ存セサリシトキ又ハ消滅シタルトキハ何時
タリトモ之ヲ取消スコトヲ得

第九十六條 訴訟上ノ救助ハ之ヲ受ケタル原告
若クハ被告ノ死亡ト共ニ消滅ス

第九十七條 訴訟上ノ救助ハ之ヲ受ケタル原告
若クハ被告ノ爲ニ左ノ效力ヲ生ス

- 第一 裁判費用(國庫ノ立替金ヲ包含ス)ヲ
濟清スルコトノ假免除
- 第二 訴訟費用ノ保證ヲ立ツルコトノ免除
- 第三 送達及ヒ執行行爲ヲ爲サシムル爲メ
一時無報酬ニテ執達吏ノ附添ヲ求ムル權
利

受訴裁判所ハ必要ナル場合ニ於テハ訴訟上ノ
救助ヲ受ケタル原告若クハ被告ノ申立ニ因リ
又ハ職權ヲ以テ一時無報酬ニテ辯護士ノ附添
ヲ命スルコトヲ得

第九十八條 訴訟上ノ救助ハ相手方ニ生シタル
費用ヲ辨濟スル義務ニ影響ヲ及ボサス

第九十九條 救助ヲ受ケタル原告若クハ被告ノ
爲メ假ニ濟清ヲ免除シタル裁判費用ハ訴訟費
用ニ付キ確定裁判ヲ受ケタル相手方又ハ原告
若クハ上訴ノ取下、拋棄、認諾若クハ和解ニ因
リ訴訟費用ヲ負擔ス可キ相手方ヨリ之ヲ取立
ツルコトヲ得

救助ヲ受ケタル原告若クハ被告ニ附添ヒタル
執達吏又ハ辯護士ハ同一ノ條件アルトキハ亦
自己ノ權利ニ依リ費用確定ノ方法ヲ以テ其手

敷料及立替金ヲ取立ツルコトヲ得

第百條 救助ヲ受ケタル原告若クハ被告ハ自己及ヒ其家族ノ必要ナル生活ヲ害セスシテ費用ノ濟清ヲ爲シ得ルニ至ルトキハ假免除ヲ得タル數額(第九十七條第一號)ヲ直チニ追拂ヒスル義務アリ

第百一條 裁判所ハ檢事ノ意見ヲ聽キタル後訴訟上救助ノ付與並ニ辯護士附添ノ命令ニ付テノ申請、訴訟上救助ノ取消及ヒ數額追拂ノ義務ニ付キ決定ヲ爲ス此裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

第百二條 訴訟上ノ救助ヲ付與シ又ハ其取消ヲ拒ミ若クハ費用追拂ヲ命スルコトヲ拒ム決定ニ對シテハ檢事ニ限リ抗告ヲ爲スコトヲ得

辯護士ノ附添ヲ命スル決定ニ對シテハ上訴ヲ爲スコトヲ得ス

訴訟上ノ救助ヲ拒ミ若クハ取消又ハ辯護士添附ヲ拒ミ又ハ費用追拂ヲ命スル決定ニ對シテハ原告若クハ被告ハ抗告ヲ爲スコトヲ得

第三章、訴訟手續

第一節、口頭辯論及ヒ準備書面

第百三條 判決裁判所ニ於ケル訴訟ニ付テノ當事者ノ辯論ハ口頭ナリトス但此法律ニ於テ口頭辯論ヲ經スシテ裁判ヲ爲スコトヲ定メタルトキハ此限ニ在ラス

第百四條 口頭辯論ハ書面ヲ以テ之ヲ準備ス

第百五條 準備書面ニハ左ノ諸件ヲ掲ク可シ

第一 當事者及ヒ其法律上代理人ノ氏名、身分、職業、住所、裁判所、訴訟物及ヒ

附屬書類ノ表示

第二 原告若クハ被告カ法廷ニ於テ爲サント欲スル申立

第三 申立ノ原因タル事實上ノ關係

第四 相手方ノ事實上ノ主張ニ對スル陳述

第五 原告若クハ被告カ事實上主張ノ證明

又ハ攻撃ノ爲メ用井ントスル證據方法及ヒ相手方ノ申出テタル證據方法ニ對スル

演述

第六 原告若クハ被告又ハ其訴訟代理人ノ

署名及ヒ捺印

第七 年月日

第百六條 準備書面ニ於テ提出ス可キ事實ハ簡

明ニ之ヲ記載ス可シ

此他事實上ノ關係ノ説明並ニ法律上ノ討論ハ

書面ニ之ヲ掲ケルコトヲ得ス

第百七條 準備書面ニハ訴訟ヲ爲ス可キ資格ニ

付テノ證書ノ原本、正本又ハ謄本其他總テ原告若クハ被告ノ手中ニ存スル證書ニシテ書面中ニ申立ノ原因トシテ引用シタルモノノ謄本ヲ添附ス可シ

證書ノ一部分ノミチ要用トスルトキハ其冒頭、事件ニ屬スル部分、終尾、日附、署名及ヒ印章ヲ謄寫シタル抄本ヲ添附スルヲ以テ足ル證書カ既ニ相手方ニ知レタルトキ又ハ大部ナルトキハ其證書ヲ表示シ且相手方ニ之ヲ閱覽セシメント欲スル旨ヲ附記スルヲ以テ足ル

第百八條 當事者ハ準備書面及ヒ其附屬書類並

ニ相手方ニ付與スル爲メ必要ナル謄本ヲ裁判所書記課ニ差出ス可シ

第百九條 裁判長ハ口頭辯論ヲ開キ且之ヲ指揮

ス 裁判長ハ發言ヲ許シ又其命ニ從ハサル者ニ發言ヲ禁スルコトヲ得

裁判長ハ事件ニ付キ十分ナル説明ヲ爲サシメ且問斷ナク辯論ノ終了スルニトニ注意ス又必要ナル場合ニ於テハ直チニ辯論續行ノ期日ヲ定ム

裁判所ニ於テ事件ニ付キ十分ナル説明ヲ爲セリト認ムルトキハ裁判長ハ口頭辯論ヲ閉チ及ヒ裁判所ノ判決並ニ決定ヲ言渡ス

第百十條 口頭辯論ハ當事者ノ申立ヲ爲スニ依リテ始マル 當事者ノ演述ハ事實上及ヒ法律上ノ點ニ於ケル訴訟關係ヲ包括ス可シ

口頭演述ニ換ヘテ書類ヲ採用スルコトヲ許サス文字上ノ旨趣ヲ要用トスルトキハ其要用ナル部分ニ限り之ヲ朗讀スルコトヲ得

第百十一條 各當事者ハ相手方ノ主張シタル事實ニ對シ陳述ヲ爲ス可シ

明カニ爭ハサル事實ハ原告若クハ被告ノ他ノ陳述ヨリ之ヲ爭ハントスル意思カ顯レサルトキハ自白シタルモノト看做ス

不知ノ陳述ハ原告若クハ被告ノ自己ノ行爲ニ非ス又自己ノ實驗シタルモノニモ非サル事實ニ限り之ヲ許ス此場合ニ於テ不知ヲ以テ答ヘタル事實ハ爭ヒタルモノト看做ス

第百十二條 裁判長ハ職權上調査ス可キ點ニ關シ相手方ヨリ起ササル疑ノ存スルトキハ其疑ニ付キ注意ヲ爲スコトヲ得

述ヘタルトキハ裁判所ハ其異議ニ付キ直チニ裁判ヲ爲ス

第百十四條 裁判所ハ事件ノ關係ヲ明瞭ナラシムル爲メ原告若クハ被告ノ自身出頭ヲ命スルコトヲ得

第百十五條 裁判所ハ原告若クハ被告ノ援用シタル證書ニシテ其手中ニ存スルモノヲ提出ス可キヲ命スルコトヲ得

裁判所ハ外國語ヲ以テ作リタル證書ニ付テハ其譯書ヲ添附ス可キヲ命スルコトヲ得

第百十六條 裁判所ハ當事者ノ所持スル裁判記録ニシテ事件ノ辯論及ヒ裁判ニ關スルモノヲ提出ス可キヲ命スルコトヲ得

第百十七條 裁判所ハ檢證及ヒ鑑定ヲ命スルコトヲ得

裁判長ハ問ヲ發シテ不明瞭ナル申立ヲ釋明シ主張シタル事實ノ不十分ナル證明ヲ補充シ證據方法ヲ申出テ其他事件ノ關係ヲ定ムルニ必要ナル陳述ヲ爲サシム可シ

陪席判事ハ裁判長ニ告ケテ問ヲ發スルコトヲ得

當事者ハ相手方ニ對シ自ラ問ヲ發スルコトヲ得然レトモ其問ヲ發ス可キ旨ヲ裁判長ニ求ムルコトヲ得

若シ其問ニ對シテ答ヘス又ハ判然答ヘサルトキハ相手方ノ利益ト爲ル可キ答ヲ爲シタルモノト看做スコトヲ得

第百十三條 事件ノ指揮ニ關スル裁判長ノ命又ハ裁判長若クハ陪席判事ノ發シタル問ニ對シ辯論ニ與カル者ヨリ不適法ナリトシテ異議ヲ

此手續ハ申立ニ因リ命スル檢證及ヒ鑑定ニ付テノ規定ニ從フ

第百十八條 裁判所ハ一箇ノ訴ニ於テ爲シタル數箇ノ請求又ハ本訴及ヒ反訴ニ付テノ辯論ヲ分離シテ爲スコキヲ命スルコトヲ得

第百十九條 同一ノ請求ニ關シ數箇ノ獨立ナル攻撃及ヒ防禦ノ方法ヲ提出シタルトキハ裁判所ハ先ツ辯論ヲ其一二ニ制限スコキヲ命スルコトヲ得

第百二十條 裁判所ハ同一ノ人又ハ別異ノ人ノ數箇ノ訴訟ニシテ其裁判所ニ繫屬スルモノノ辯論及ヒ裁判ヲ併合スコキヲ命スルコトヲ得但其訴訟ノ目的物タル請求ヲ元來一箇ノ訴ニ於テ主張シ得ヘキトキニ限ル

第百二十一條 裁判所ハ訴訟ノ全部又ハ一分ノ

裁判カ他ノ繫屬スル訴訟ニ於テ定マル可キ權利關係ノ成立又ハ不成立ニ繫ルトキハ他ノ訴訟ノ完結ニ至ルマテ辯論ヲ中止ス可シ

第百二十二條 裁判所ハ民事訴訟中罰ス可キ行為ノ嫌疑生スルトキハ刑事訴訟手續ノ完結ニ至ルマテ辯論ヲ中止ス可シ但其罰ス可キ行為カ訴訟ノ裁判ニ影響ヲ及ホストキニ限ル

第百二十三條 裁判所ハ分離若クハ併合ニ關シ發シタル命令ヲ取消スコトヲ得

第百二十四條 裁判所ハ閉チタル辯論ノ再開ヲ命スルコトヲ得

第百二十五條 裁判所ハ辯論ニ與カル者日本語ニ通セサルトキハ通事ヲ立會ハシム但裁判所構成法第百十八條ノ場合ハ此限ニ在ラス

第百二十六條 裁判所ハ辯論ニ與カル者聲又ハ

啞ナルトキ之ニ文字ヲ以テ理會セシムルコトヲ得サル場合ニ限り通事ヲ立會ハシムルコトヲ得

第百二十七條 裁判所ハ相當ノ演述ヲ爲ス能力ノ缺ケタル原告若クハ被告又ハ訴訟代理人若クハ輔佐人ニ其後ノ演述ヲ禁シ且新期日ヲ定メ辯護士ヲシテ演述セシム可キコトヲ命ス可シ

裁判所ハ裁判所ニ於テ辯論ヲ業トスル訴訟代理人若クハ輔佐人ヲ退斥セシムルコトヲ得此場合ニ於テハ新期日ヲ定メ且退斥ノ決定ヲ原告若クハ被告ニ送達ス可シ
本條ノ規定ニ從ヒ爲シタル命令ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス
辯護士ニハ本條ノ規定ヲ適用セス

第百二十八條 辯論ニ與カル者秩序維持ノ爲メ辯論ノ場所ヨリ退斥セラレタルトキハ申立ニ因リ本人ノ任意ニ退去シタルト同一ノ方法ヲ以テ之ヲ取扱フコトヲ得但裁判所構成法第百

十條ニ依リ中止シタル場合ハ此限ニ在ラス
前條ノ場合ニ於テ禁止又ハ退斥ノ命ヲ受ケタル者再ヒ出頭スルトキハ前項ノ方法ヲ以テ之ヲ取扱フコトヲ得

第百二十九條 口頭辯論ニ付テハ調書ヲ作ル可シ

- 調書ニハ左ノ諸件ヲ掲グ可シ
- 第一 辯論ノ場所、年月日
- 第二 判事、裁判所書記及ヒ立會ヒタル檢事若クハ通事ノ氏名
- 第三 訴訟物及ヒ當事者ノ氏名

第四 出頭シタル當事者、法律上代理人、

訴訟代理人及ヒ輔佐人ノ氏名若シ原告若

クハ被告闕席シタルトキハ其闕席シタル

コト

第五 公ニ辯論ヲ爲シ又ハ公開ヲ禁シタル

コト

第二百三十條 辯論ノ進行ニ付テハ其要領ノミ

ヲ調書ニ記載ス可シ

調書ニ記載シテ明確ニス可キ諸件ハ左ノ如シ

第一 自白、認諾、拋棄及ヒ和解

第二 明確ニス可キ規定アル申立及ヒ陳述

第三 證人及ヒ鑑定人ノ供述但其供述ハ以

前聽カサルモノナルトキ又ハ以前ノ供述

ニ異ナルトキニ限ル

第四 檢證ノ結果

第五 書面ニ作り調書ニ添附セサル裁判(

判決、決定及ヒ命令)

第六 裁判ノ言渡

附録トシテ調書ニ添附シ且調書ニ附録トシテ

表示シタル書類ニ於ケル記載ハ調書ニ於ケル

記載ニ同シ

第二百三十一條 前條第一號乃至第四號ニ掲ケタ

ル調書ノ部分ハ法廷ニ於テ之ヲ關係人ニ讀聞

ガセ又ハ閱覽ノ爲メ之ヲ關係人ニ示ス

調書ニハ前項ノ手續ヲ履ミタルコト及ヒ承諾

ヲ爲シタルコト又ハ承諾ヲ拒ミタル理由ヲ附

記ス可シ

第二百三十二條 調書ニハ裁判所長及ヒ裁判所書

記署名捺印ス可シ

裁判長差支アルトキハ官等最モ高キ陪席判事

之ニ代リ署名捺印ス區裁判所判事差支アルト

キハ其裁判所書記ノ署名捺印ヲ以テ足ル

第二百三十三條 受命判事若クハ受託判事又ハ區

裁判所判事ヲ法廷外ニ於テ爲ス審問ニモ亦裁

判所書記ヲ立會ハシム

前四條ノ規定ハ右ノ審問調書ニ之ヲ準用ス

第二百三十四條 口頭辯論ノ爲メ規定シタル方式

ノ遵守ハ調書ヲ以テノミ之ヲ證スルコトヲ得

第二百三十五條 此法律ニ從ヒ口頭ヲ以テ訴、抗

告、申立、申請及ヒ陳述ヲ爲シ又ハ證書ヲ拒

ム場合ニ於テハ裁判所書記ハ其調書ヲ作ル可

シ

第二節 送達

第二百三十六條 送達ハ裁判所書記職權ヲ以テ之

ヲ爲サシム

裁判所書記ハ執達吏ニ送達ノ施行ヲ委任シ又

ハ送達ヲ施行ス可キ地ヲ管轄スル區裁判所ノ

書記ニ送達ノ施行ヲ執達吏ニ委任ス可キコト

ヲ囑託ス

裁判所書記ハ郵便ニ依リテモ亦送達ヲ爲サシ

ムルコトヲ得

前二項ノ場合ニ於テハ執達吏又第三項ノ場合

ニ於テハ郵便配達人ヲ以下ニ規定スル送達吏

ト爲ス

第二百三十七條 送達ハ其送達ス可キ書類ノ正本

又ハ認證シタル謄本ヲ交付ス可キ規定アルト

キハ其正本又ハ其謄本ノ交付ヲ以テ之ヲ爲シ

其他ノ場合ニ於テハ謄本ノ交附ヲ以テ之ヲ爲

ス

原告若クハ被告數人ノ代理人ニ爲シ又ハ同一

ナル原告若クハ被告ノ代理人數人中ノ一人ニ爲ス可キ送達ハ附本又ハ正本ノ一通ヲ交付スルヲ以テ足ル

第三百二十八條 訴訟能力ヲ有セサル原告若クハ被告ニ對スル送達ハ其法律上代理人ニ之ヲ爲ス
公又ハ私ノ法人及ヒ其資格ニ於テ訴ヘ又ハ訴ヘラルルコトヲ得ル會社又ハ社團ニ對スル送達ハ其首長又ハ事務擔當者ニ之ヲ爲スヲ以テ足ル

數人ノ首長若クハ事務擔當者アル場合ニ於テハ送達ハ其一人ニ之ヲ爲スヲ以テ足ル
第三百二十九條 豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル下士以下ノ軍人、軍屬ニ對スル送達ハ又所屬ノ長官又ハ隊長ニ之ヲ爲ス

第四百十條 囚人ニ對スル送達ハ監獄署ノ首長ニ之ヲ爲ス

第四百十一條 送達ハ財産權上ノ訴訟ニ付テハ總代理人ニ之ヲ爲シ又商業上ヨリ生シタル訴訟ニ付テハ代務人ニ之ヲ爲スヲ以テ原告若クハ被告ノ本人ニ爲シタルト同一ノ效力ヲ有ス
第四百十二條 訴訟代理人アルトキハ送達ハ其代理人委任ノ旨趣ニ依リ原告若クハ被告ノ代理ヲ爲ス權ヲ有スルトキニ限リ其代理人ニ之ヲ爲ス

然レトモ原告若クハ被告ノ本人ニ爲シタル送達ハ其訴訟代理人アルトキト雖モ效力ヲ有ス
第四百十三條 受訴裁判所ノ所在地ニ住居ヲモ事務所ヲモ有セサル原告若クハ被告ハ其所在地ニ假住所ヲ選定シテ之ヲ届出ツ可シ

假住所選定ノ届出ハ遅クトモ最近ノ口頭辯論ニ於テ之ヲ爲シ又其前ニ書面ヲ差出ストキハ其書面ヲ以テ之ヲ爲スヘシ

前項ノ届出ヲ爲ササルトキハ裁判所書記又ハ其委任ヲ受ケタル吏員交付ス可キ書類ヲ原告若クハ被告ノ名宛ニテ郵便ニ付シテ送達ヲ爲ス
ス
コトヲ得此送達ハ其書類ノ原告若クハ被告ニ到達スルト否トハ問ハス又何時ニ到達スルトハ問ハス郵便ニ付シタル時ヲ以テ之ヲ爲シタルモノト看做ス

第四百十四條 送達ハ何レノ地ヲ問ハス送達ヲ受ケ可キ人ニ出會ヒタル地ニ於テ之ヲ爲スコトヲ得然レトモ其人カ其地ニ住居又ハ事務所ヲ有スルトキ其住居又ハ事務所ノ外ニ於テ爲シタル送達ハ其受取ヲ拒マサリシトキニ限り

效力ヲ有ス

第三百十八條第二項ノ場合ニ於テ特別ノ事務所アルトキハ其事務所ノ外ニ於テ法律上代理人又ハ首長若クハ事務擔當者ニ爲シタル送達ハ其受取ヲ拒マサリシトキニ限り效力ヲ有ス
第四百十五條 送達ヲ受ケ可キ人ニ住居ニ於テ出會ハサルトキハ其住居ニ於テスル送達ハ成長シタル同居ノ親族又ハ雇人ニ之ヲ爲スコトヲ得

此規定ニ從ヒ送達ヲ施行スルコトヲ得サルトキハ其送達ハ交付ス可キ書類ヲ其地ノ市町村長ニ預置キ送達ノ告知書ヲ作り之ヲ住居ノ戸ニ貼付シ且近隣ニ住居スル者二人ニ其旨ヲ口頭ヲ以テ通知シテ之ヲ爲スコトヲ得
第四百十六條 住居ノ外ニ事務所ヲ有スル人ニ

對スル送達ハ事務所ニ於テ之ニ出會ハサルトキハ其事務所ニ在ル營業使用人ニ之ヲ爲スコトヲ得此規定ハ辯護士ニモ亦之ヲ適用ス但此場合ニ於ケル送達ハ筆生ニモ亦之ヲ爲スコトヲ得

第四百十七條 第三百三十八條第二項ノ場合ニ於テ法律上代理人又ハ首長若クハ事務擔當者ニ事務所ニ於テ出會ハス又ハ此等ノ者受取ニ付キ差支アルトキハ送達ハ事務所ニ在ル他ノ役員又ハ雇人ニ之ヲ爲スコトヲ得

第四百十八條 前二條ノ規定ニ從ヒ送達ヲ施行スルコトヲ得サルトキハ第四百十五條第二項ニ準シ送達ヲ爲スコシ但住居ニ於ケル送達ヲ施行スルヲ得サルコトノ明白ナルトキニ限ル前項ノ場合ニ於テハ送達告知書ノ貼付ハ事務

所又ハ住居ノ戸ニ之ヲ爲ス

第四百十九條 法律上ノ理由ナクシテ送達ノ受取ヲ拒ムトキハ交付ス可キ書類ヲ送達ノ場所ニ差置クヘシ

第四百十條 日曜日及ヒ一般ノ祝祭日ニハ執達吏ノ爲スコキ送達ハ裁判官ノ許可ヲ得ルトキニ限り之ヲ施行スルコトヲ得

前項ノ規定ハ郵便ニ付シテ爲ス送達ヲ除ク外ハ夜間ニ爲スコキ送達ニ之ヲ適用ス夜間トハ日没ヨリ日出マテノ時間ヲ謂フ

右ノ許可ハ受訴裁判所ノ判事長又ハ送達ヲ爲スコキ地ヲ管轄スル區裁判所ノ判事之ヲ與ヘ又ハ受命判事若クハ受託判事ノ完結ス可キ事件ニ在テハ其判事之ヲ與フ
許可ノ命令ハ認證シタル附本ヲ以テ送達ノ際

之ヲ交付ス可シ

本條ノ規定ヲ遵守セサル送達ハ之ヲ受取リタルトキニ限り效力ヲ有ス

第四百十一條 送達ニ付テハ之ヲ施行スル吏員ハ送達ノ場所、年月日時、方法及ヒ受取人ノ受取證並ニ送達吏ノ署名捺印ヲ具備スル證書ヲ作ルコトヲ要ス

受取人受取ヲ拒ミ若クハ受取證ヲ出タスコトヲ拒ミタルトキ又ハ受取證ヲ得ル能ハサル旨ヲ述フルトキハ之ヲ送達告知書ニ記載ス可シ

第四百十三條 第三項ノ場合ニ於テハ郵便ニ付シタル吏員ノ報告書ヲ以テ送達ノ證ト爲スニ足ル

第四百十二條 外國ニ在ル本邦ノ公使及ヒ公使

館ノ官吏並ニ其家族、從者ニ對スル送達ハ外務大臣ニ囑託シテ之ヲ爲ス

第四百十三條 前條ノ場合ヲ除ク外外國ニ於テ施行ス可キ送達ハ外國ノ管轄官廳又ハ外國ニ駐在スル帝國ノ公使又ハ領事ニ囑託シテ之ヲ爲ス

第四百十四條 出陣ノ軍隊又ハ役務ニ服シタル軍艦乘組員ニ屬スル人ニ對スル送達ハ上班司令官廳ニ囑託シテ之ヲ爲スコトヲ得

第四百十五條 前三條ノ場合ニ於テ必要ナル囑託書ハ受訴裁判所ノ裁判長之ヲ發ス
送達ハ囑託ヲ受ケタル官廳又ハ官吏ノ送達施行濟ノ證書ヲ以テ之ヲ證ス

第四百十六條 原告若クハ被告ノ現在地知レサルトキ又ハ外國ニ於テ爲スコキ送達ニ付テハ

其規定ニ從フコト能ハス若クハ之ニ從フモ其
效ナキコトヲ豫知スルトキハ其送達ハ公ノ告
示ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第五百五十七條 公示送達ハ原告若クハ被告ノ申
立ニ因リ裁判所ノ命ヲ以テ裁判所書記之ヲ取
扱フ此送達ハ交付ス付キ書類ヲ裁判所ノ揭示
板ニ貼附シテ之ヲ爲ス判決及ヒ決定ニ在テハ
其裁判ノ部分ノミヲ貼附ス可シ

右ノ外裁判所ハ送達ス可キ書類ノ抄本ヲ一箇
又ハ數箇ノ新聞紙ニ一回又ハ數回掲載ス可キ
ヲ命スルコトヲ得其抄本ニハ裁判所ノ當事者
並ニ訴訟物及ヒ送達ス可キ書類ノ要旨ヲ掲ケ
ルコトヲ要ス

第五百五十八條 公示送達ハ書類ノ貼附ヨリ十四
日ヲ經過シタル日ヲ以テ之ヲ爲シタルモノト

看做ス然レトモ裁判所ハ公示送達ヲ命スルニ
際シ此ヨリ長キ期間ヲ必要トスルトキハ相當
ナル期間ヲ定ムルコトヲ得
同一ノ事件ニ付キ同一ノ原告若クハ被告ニ對
シテ爲ス其後ノ公示送達ハ貼付ヲ以テ之ヲ爲
シタルモノト看做ス

第五百五十九條 期日及ヒ期間

第五百六十條 期日ハ已ムヲ得サル場合ニ限り
日曜日及ヒ一般ノ祝祭日ニ之ヲ定ムルコトヲ
得

第五百六十一條 期日ニ付テノ呼出ハ裁判長ノ命
ニ從ヒ裁判所書記正本ノ送達ヲ以テ之ヲ爲ス
但在延シタル者ニ期日ヲ定メ出頭ヲ命シタル

トキハ之ヲ送達スルコトヲ要セス

第五百六十二條 期日ハ裁判所内ニ於テ之ヲ開ク
但臨檢又ハ裁判所ニ出頭スルニ差支アル人ノ
審問其他裁判所内ニ於テ爲スコトヲ得サル行
爲ヲ要スルトキハ此限ニ在ラス

第五百六十三條 期日ハ事件ノ呼上ヲ以テ始マル
原告若クハ被告カ期日ノ終ニ至ルマテ辯論ヲ
爲ササルトキハ期日ヲ怠リタルモノト看做ス

第五百六十四條 裁判所又ハ裁判長ノ定ムル期間
ノ進行ハ期間ヲ定メタル書類ノ送達ヲ以テ始
マリ又其送達ヲ要セサル場合ニ於テハ期間ノ
言渡ヲ以テ始マル但期間指定ノ際此ヨリ遅キ
期限ヲ定メタルトキハ此限ニ在ラス

第五百六十五條 期間ヲ計算スルニ時ヲ以テスル
モノハ即時ヨリ起算シ又日ヲ以テスルモノハ

初日ヲ算入セス

第五百六十六條 一日ノ期間ハ二十四時トシ一箇
月ノ期間ハ三十日トシ一箇年ノ期間ハ曆ニ從
フ
期間ノ終カ日曜日又ハ一般ノ祝日ニ當ルトキ
ハ其日ヲ期間ニ算入セス

第五百六十七條 法律上ノ期間ハ裁判所ノ所在地
ニ住居セサル原告若クハ被告ノ爲メ其住居地
ト裁判所所在地トノ距離ノ割合ニ應シ海陸路
八里毎ニ一日ヲ伸長ス八里以外ノ端數三里ヲ
超ユルトキモ亦同シ

裁判所ハ外國又ハ島嶼ニ於テ住所ヲ有スル原
告若クハ被告ノ爲メ特ニ附加期間ヲ定ムルコ
トヲ得

第五百六十八條 期間ノ進行ハ裁判所ノ休暇ニ依

リテ停止ス其期間ノ殘餘ノ部分ハ休暇ノ終ヲ以テ其進行ヲ始ム期間ノ初カ休暇ニ當ルトキハ其期間ノ進行ハ休暇ノ終ヲ以テ始マル前項ノ規定ハ不變期間及ヒ休暇事件ノ期間ニハ之ヲ適用セス

不變期間ハ此法律ニ於テ不變期間トシテ掲ケタル期間ニ限ル

休暇事件トハ裁判所構成法第百二十八條、第百二十九條ニ掲ケタル事件ヲ謂フ

第百六十九條 期日ノ變更辯論ノ延期、辯論續行ノ期日ノ指定ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得但申立ニ因レル期日ノ變更ハ合意ノ場合ヲ除ク外顯著ナル理由アルトキニ限り之ヲ許ス

第百七十條 期間ハ不變期間ヲ除ク外當事者

ノ合意ノ申立ニ因リ之ヲ短縮シ又ハ伸長スルコトヲ得

裁判所又ハ裁判長ノ定ムル期間及ヒ法律上ノ期間ハ合意ナキモ申立ニ因リ顯著ナル理由アルトキハ之ヲ短縮シ又ハ伸長スルコトヲ得然レトモ法律上ノ期間ノ短縮又ハ伸長ハ此法律ニ特定シタル場合ニ限り之ヲ許ス

伸長ニ係ル新期間ハ前期間ノ滿了ヨリ之ヲ起算ス

第百七十一條 期日ノ變更又ハ期間ノ短縮若クハ伸長ニ付テノ申請ノ理由ハ之ヲ疏明ス可シ其申請ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

申請ノ裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

同一期日ノ再度ノ變更又ハ同一期間ノ再度ノ

伸長ハ相手方ノ承諾書ヲ提出セザルトキハ相手方ヲ審訊シタル後ニ限り之ヲ許スコトヲ得

又相手方カ異議ヲ述フルトキハ顯著ナル差支ノ理由及ヒ其差支ヲ除去スルコトノ特別ナル困難ヲ生シタルコトヲ證スルトキニ限り之ヲ許スコトヲ得

訴訟代理人ノ差支ニ原因スル期日ノ再度ノ變更又ハ機關ノ再度ノ伸長ハ相手方ノ承諾アルニ非サレハ之ヲ許サス

期日ノ變更又ハ期間ノ伸長ニ付テノ申請ヲ却下スル裁判ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得

第百七十二條 本條ニ於テ裁判所及ヒ裁判長ニ與ヘタル權ハ受命判事又ハ受託判事モ亦其定ム可キ期日及ヒ期間ニ付キ之ヲ行フコトヲ得

第四節 懈怠ノ結果及ヒ原狀回復

第百七十三條 訴訟行爲ヲ怠リタル原告若クハ被告ハ其訴訟行爲ヲ爲ス權利ヲ失フ但此法律ニ於テ追完ヲ許ストキハ此限ニ在ラス

法律上懈怠ノ結果ハ當然生スルモノトス但此法律ニ於テ失權ヲ爲サシムルコトニ付キ相手方ノ申立ヲ要スルトキハ此限ニ在ラス

第百七十四條 天災其他遮ク可カラサル事變ノ爲ニ不變期間ヲ遵守スルコトヲ得サル原告若クハ被告ニハ申立ニ因リ原狀回復ヲ許ス

原告若クハ被告カ故障期間ヲ懈怠シタルトキハ其過失ニ非スシテ關席判決ノ送達ヲ知ラサリシ場合ニ於テモ亦之ニ原狀回復ヲ許ス

第百七十五條 原狀回復ハ十四日ノ期日內ニ之ヲ申立ツルコトヲ要ス

右期間ハ障碍ノ止ミタル日ヲ以テ始マル此期間ハ當事者ノ合意ニ因リ之ヲ伸長スルコトヲ得ス

懈怠シタル不變期間ノ終ヨリ起算シテ一箇年ノ滿了後ハ原狀回復ヲ申立ツルコトヲ得ス

第七十六條 原狀回復ハ追完スル訴訟行爲ニ付キ裁判ヲ爲ス權アル裁判所ニ書面ヲ差出シテ之ヲ申立ツ可シ

此書面ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

- 第一 原狀回復ノ原因タル事實
- 第二 原狀回復ノ疏明方法
- 第三 懈怠シタル訴訟行爲ノ追完

即時抗告ノ提出ヲ懈怠シタルトキハ原狀回復ノ申立ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ抗告裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得

第七十七條 原狀回復ノ申立ニ付テノ訴訟手續ハ追完スル訴訟行爲ニ付テノ訴訟手續ト之ヲ併合ス然レトモ裁判所ハ先ツ申立ニ付テノ辯論及ヒ裁判ノミニ其訴訟手續ヲ制限スルコトヲ得

申立ノ許否ニ關スル裁判及其裁判ニ對スル不服ノ申立ニ付テハ追完スル訴訟行爲ニ於テ行ハル可キ規定ヲ適用ス然レトモ申立ヲ爲シタル原告若クハ被告ハ故障ヲ爲スコトヲ得ス

原狀回復ノ費用ハ申立人之ヲ負擔ス但相手方ノ不當ナル異議ニ因リ生シタルモノハ此限ニ在ラス

第五節 訴訟手續ノ中斷及ヒ中止
第七十八條 原告若クハ被告ノ死亡シタル場合ニ於テハ承繼人カ訴訟手續ヲ受繼クマテ之

ヲ中斷ス

受繼ヲ遲滯シタルトキハ裁判所ハ申立ニ因リ受繼及ヒ本案辯論ノ爲メ其承繼人ヲ呼出ス

承繼人期日ニ出頭セサルトキハ申立ニ因リ相手方ノ主張シタル承繼ヲ自白シタルモノト看做シ且裁判所ハ闕席判決ヲ以テ承繼人訴訟手續ヲ受繼キタリト言渡ス又本案ノ辯論ハ故障期間ノ滿了後始メテ之ヲ爲シ又其期間内ニ故障ヲ申立テタルトキハ其完結後始メテ之ヲ爲ス

第七十九條 原告若クハ被告ノ財産ニ付キ破産ノ開始シタル場合ニ於テ訴訟手續カ破産財團ニ關スルトキハ破産ニ付テノ規定ニ從ヒ手續ヲ受繼キ又ハ破産手續ヲ解止スルマテ之ヲ中斷ス

第八十條 原告若クハ被告カ訴訟能力ヲ失ヒ又ハ其法律上代理人カ死亡シ又ハ其代理權カ原告若クハ被告ノ訴訟能力ヲ得ル前ニ消滅シタルトキハ訴訟手續ハ法律上代理人又ハ新

法律上代理人カ其任設ヲ相手方ニ通知シ又ハ相手方カ訴訟手續ヲ續行セシトスルコトヲ其代理人ニ通知スルマテ之ヲ中斷ス

第八十一條 原告若クハ被告ノ死亡ニ因リ訴訟手續ヲ中斷スル場合ニ於ケル訴訟手續ノ受繼ニ關シ遺產ニ付キ管理人ヲ任設スルトキハ前條ノ規定又遺產ニ付キ破産ヲ開始スルトキハ第八十九條ノ規定ヲ適用ス

第八十二條 戰爭其他ノ事故ニ因リ裁判所ノ行務ヲ止メタルトキハ此事情ノ繼續開訴訟手續ヲ中斷ス

第百八十三條

訴訟代理人ヲ以テ訴訟ヲ爲ス場合ニ於テ原告若クハ被告カ死亡シ又ハ訴訟能力ヲ失ヒ又ハ法律上代理人カ死亡シ又ハ其代理權カ消滅スルトキハ委任消滅ノ通知ニ因リ訴訟手續ヲ中斷ス

訴訟手續ノ受繼ニ付テハ第百七十八條、第百八十條、第百八十一條ノ規定ニ從フ

第百八十四條 原告若クハ被告カ戰時兵役ニ服スルトキ又ハ官廳ノ布令、戰爭其他ノ事變ニ因リ受訴裁判所ト交通ノ絶エタル地ニ在ルトキハ受訴裁判所ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ障礙ノ消除スルマテ訴訟手續ノ中止ヲ命スルコトヲ得

第百八十五條 訴訟手續中止ノ申請ハ受訴裁判所ニ之ヲ提出ス其申請ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲ス

コトヲ得

此裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

第百八十六條

訴訟手續ノ中斷及ヒ中止ハ各期間ノ進行ヲ止メ及ヒ中斷又ハ中止ノ終リタル後更ニ全期間ノ進行ヲ始ムル效力ヲ有ス中斷及ヒ中止ノ間本案ニ付キ爲シタル原告若クハ被告ノ訴訟行爲ハ他ノ一方ニ對シ其效力ナシ口頭辯論ノ終結後ニ生シタル中斷ハ其辯論ニ基キテ爲スコキ裁判ノ言渡ヲ妨グルコト無シ

第百八十七條

中斷シ又ハ中止シタル訴訟手續ノ受繼及ヒ本節ニ定メタル通知ハ原告若クハ被告ヨリ其書面ヲ受訴裁判所ニ差出シ裁判所ハ相手方ニ之ヲ送達ス可シ

第百八十八條

當事者ハ訴訟手續ヲ休止ス可キ合意ヲ爲スコトヲ得其合意ハ不變期間ノ進行ニ影響ナシ及ホサス

口頭辯論ノ期日ニ於テ當事者雙方出頭セザルトキハ訴訟手續ハ其一方ヨリ更ニ口頭辯論ノ期日ヲ定ム可キコトヲ申立ツルマテ之ヲ休止ス

一箇年內ニ前項ノ申立ヲ爲サザルトキハ本訴及ヒ反訴ヲ取下ケタルモノト看做ス

第百八十九條

本節ノ規定其他此法律ノ規定ニ基キ訴訟手續ノ中止ヲ命スル裁判ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得又其中止ヲ拒ム裁判ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第二編

第一章

第一審ノ訴訟手續

地方裁判所ノ訴訟手續

第一節 判決前ノ訴訟手續

第百九十條

訴ノ提起ハ訴狀ヲ裁判所ニ差出シテ之ヲ爲ス此訴狀ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 當事者及ヒ裁判所ノ表示

第二 起シタル請求ノ一覽ノ目的物及ヒ其請求ノ原因

第三 一定ノ申立

此他訴狀ハ準備書面ニ關スル一般ノ規定ニ從ヒ之ヲ作り且裁判所ノ管轄カ訴訟物ノ價額ニ依リ定マル場合ニ於テ訴訟物カ一定ノ金額ニ非ザルトキハ其價額ヲ掲ケ可シ

第百九十一條

同一ノ被告ニ對スル原告ノ請求數箇アル場合ニ於テ其各請求ニ付キ受訴裁判所カ管轄權ヲ有シ且法律ニ於テ同一種類ノ訴

訴手續ヲ許ストキハ原告ハ其請求ヲ一箇ノ訴ニ併合スルコトヲ得但民法ノ規定ニ反スルトキハ此限ニ在ラズ

第九十二條 訴狀カ第九十條第一號乃至第三號ノ規定ニ適セザルトキハ相當ノ期間ヲ定メ裁判長ノ命令ヲ以テ其期間内ニ欠缺ヲ補正ス可キコトヲ命ス若シ原告此命ニ從ハザルトキハ其期間ノ滿了後訴狀ヲ差戻ス可シ

此差戻ノ命令ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第九十三條 訴狀カ第九十條第一號乃至第三號ノ規定ニ適スルトキハ口頭辯論ノ期日ヲ定メテ之ヲ被告ニ送達ス可シ

第九十四條 訴狀ノ送達ト口頭辯論ノ期日トノ間ニハ少ナクモ二十日ノ時間ヲ存スルコトヲ要ス

外國ニ於テ送達ヲ施行ス可キトキハ裁判長相當ノ時間ヲ定ム

第九十五條 訴訟物ノ權利拘束ハ訴狀ノ送達ニ因リテ生ス

權利拘束ハ左ノ效力ヲ有ス

第一 權利拘束ノ繼續中原告若クハ被告ヨリ同一ノ訴訟物ニ付キ他ノ裁判所ニ於テ本訴又ハ反訴ヲ以テ請求ヲ爲シタルトキハ相手方ハ權利拘束ノ抗辯ヲ爲スコトヲ得

第二 受訴裁判所ノ管轄ハ訴訟物ノ價額ノ増減、住所ノ變更其他管轄ヲ定ムル事情ノ變更ニ因リテ變換スルコト無シ

第三 原告ハ訴ノ原因ヲ變更スル權利ナシ

但變更シタル訴ニ對シ本案ノ口頭辯論前被告カ異議ヲ述ヘザルトキハ此限ニ在ラズ

第九十六條 原告カ訴ノ原因ヲ變更セスシテ左ノ諸件ヲ爲ストキハ被告ハ異議ヲ述フルコトヲ得ス

第一 事實上又ハ法律上ノ申述ヲ補充シ又ハ更正スルコト

第二 本案又ハ附帶請求ニ付キ訴ノ申立ヲ擴張シ又ハ減縮スルコト

第三 最初求メタル物ノ滅盡又ハ變更ニ因リ賠償ヲ求ムルコト

第九十七條 訴ノ原因ニ變更ナシトスル裁判ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第九十八條 訴ノ全部又ハ一分ハ本案ニ付キ

被告ノ第一口頭辯論ノ始マルマテハ被告ノ承諾ナクシテ之ヲ取下ケ又其後口頭辯論ノ終結ニ至ルマテハ被告ノ承諾ヲ得テ之ヲ取下ケルコトヲ得

訴ノ取下ハ口頭辯論ニ於テ之ヲ爲サザルトキハ書面ヲ以テ之ヲ爲ス可シ

訴狀ヲ既ニ送達シタル場合ニ於テハ訴取下ノ書面ハ之ヲ被告ニ送達ス可シ

適法ナル取下ハ權利拘束ノ總テノ效力ヲ消滅セシムル結果ヲ生ス

取下ケタル訴ヲ再ヒ起シタルトキハ被告ハ前訴訟費用ノ辨濟ヲ受ケルマテ應訴ヲ拒ムコトヲ得

第九十九條 訴狀送達ノ際十四日ノ期間内ニ答辯書ヲ差出ス可キコトヲ被告ニ催告ス可シ

答辯書ニハ準備書面ニ關スル一般ノ規定ヲ適用ス

第二百一十條 訴カ管轄裁判所ニ於テ權利拘束ト爲リタルトキハ被告ハ原告ニ對シ其裁判所ニ反訴ヲ起スコトヲ得

然レトモ財産權上ノ請求ニ非サル請求ニ係ル反訴又ハ目的物ニ付キ專屬管轄ノ規定アル反訴ハ若シ其反訴カ本訴ナルトキ其裁判所ニ於テ管轄權ヲ有スコヤ場合ニ限り之ヲ爲スコトヲ許ス

反訴ニ對シテハ更ニ反訴ヲ爲スコトヲ得ス
第二百一十一條 反訴ハ答辯書若クハ特別ノ書面ヲ以テ又ハ口頭辯論中相手方ノ面前ニ於テ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得
然レトモ答辯書差出ノ期間内ニ差出シタル書

面ヲ以テ起ササル反訴ハ被告ノ請求ノ全部又ハ一分ト相殺ヲ爲スコヤ場合ニ於テ同時ニ被告カ自己ノ過失ニ因ラスシテ其以前反訴ヲ起スヲ得サリシコトヲ疏明スルトキニ限り之ヲ爲スコトヲ許ス

第二百一十二條 訴ニ關スル此法律ノ規定ハ反訴ニ之ヲ適用ス但其規定ニ因リ差異ノ生スコヤトキハ此限ニ在ラス

第二百一十三條 裁判長ハ申立ニ因リ其命令ヲ以テ第九十九條ニ定メタル期間ヲ相當ニ短縮若クハ伸長シ又第九十四條ニ定メタル時間ヲ切迫ナル危險ノ場合ニ限り二十四時マテニ短縮スルコトヲ得
前項時間ノ短縮ハ此カ爲メ答辯書ヲ差出スコトヲ得サルトキト雖モ亦之ヲ爲スコトヲ得

本條ノ規定ハ第六十七條ニ掲ケタル規定ヲ妨ケス

第二百一十四條 各當事者ハ訴狀又ハ答辯書ニ掲ケサリシ事實上ノ主張若クハ證據方法又ハ申立ニ付キ相手方カ豫メ穿鑿ヲ爲スニ非サレハ陳述ヲ爲ス能ハスト豫知スル事項アルトキハ口頭辯論ノ前ニ書面ニテ差出スコシ但其書面ヲ相手方ニ送達スル時間及ヒ相手方ヲシテ必要ナル穿鑿ヲ爲ス時間ヲ得セシム可シ

口頭辯論ノ延期ヲ爲ストキハ裁判所ハ爾後必要ナル準備書面ヲ差出スコヤ期間ヲ定ムルコトヲ得

第二百一十五條 口頭辯論ハ一般ノ規定ニ從ヒテ之ヲ爲ス
第二百一十六條 妨訴ノ抗辯ハ本案ニ付テノ被告ノ

辯論前同時ニ之ヲ提出スコシ
左ニ掲ケルモノヲ妨訴ノ抗辯トス

第一 無訴權ノ抗辯

第二 裁判所管轄違ノ抗辯

第三 權利拘束ノ抗辯

第四 訴訟能力ノ欠缺又ハ法律上代理ノ欠缺ノ抗辯

第五 訴訟費用保證ノ欠缺ノ抗辯

第六 再訴ニ付キ前訴訟費用未濟ノ抗辯

第七 延期ノ抗辯

本案ニ付キ被告ノ口頭辯論ノ始マリタル後ハ妨訴ノ抗辯ハ被告ノ有效ニ拋棄スルコトヲ得サルモノナルトキ又ハ被告ノ過失ニ非スシテ本案ノ辯論前ニ其抗辯ヲ主張スル能ハサリシコトヲ疏明スルトキニ限り之ヲ主張スルコト

ヲ得

第二百七條 被告カ妨訴ノ抗辯ニ基キ本案ノ辯論ヲ拒ムトキ又ハ裁判所カ申立ニ因リ若クハ職權ヲ以テ別ニ辯論ヲ命スルトキハ其抗辯ニ付キ別ニ辯論ヲ爲シ及ヒ判決ヲ以テ裁判ヲ爲ス可シ

妨訴ノ抗辯ヲ棄却スル判決ハ上訴ニ關シテハ終局判決ト看做ス但裁判所ハ申立ニ因リ本案ニ付キ辯論ヲ爲ス可キヲ命スルコトヲ得

第二百八條 裁判所ハ計算事件、財産分別及ヒ此ニ類スル訴訟ニ於テハ口頭辯論ヲ延期シ準備手續ヲ命スルコトヲ得但妨訴ノ抗辯アリタルトキハ其完結後之ヲ爲ス

第二百九條 攻撃及ヒ防禦ノ方法（反訴、抗辯、再抗辯等）ハ第二百一條ニ規定スル制限ヲ以

テ判決ニ接著スル口頭辯論ノ終結ニ至ルマテ之ヲ提出スルコトヲ得

第二百十條 被告ヨリ時機ニ後レテ提出シタル防禦ノ方法ハ裁判所カ若シ之ヲ許スニ於テハ訴訟ヲ遅延ス可ク且被告ハ訴訟ヲ遅延セシメントスル故意ヲ以テ又ハ甚シキ怠慢ニ因リ早ク之ヲ提出セザリシコトノ心證ヲ得タルトキハ申立ニ因リ之ヲ却下スルコトヲ得

第二百十一條 訴訟ノ進行中ニ爭ト爲リタル權利關係ノ成立又ハ不成立カ訴訟ノ裁判ノ全部又ハ一分ニ影響ヲ及ホストキハ判決ニ接著スル口頭辯論ノ終結ニ至ルマテ原告ハ訴ノ申立ノ擴張ニ依リ又被告ハ反訴ノ提起ニ依リ判決ヲ以テ其權利關係ヲ確定センコトヲ申立ツルコトヲ得

第二百十二條 訴狀其他ノ準備書面ニ於テ主張セザル請求ノ權利拘束ハ口頭辯論ニ於テ其請求ヲ主張シタル時ヲ以テ始マル

第二百十三條 各當事者ハ事實上ノ主張ヲ證明シ又ハ之ヲ辯駁セン爲ニ用非ントスル證據方法ヲ開示シ且相手方ヨリ開示シタル證據方法ニ付キ陳述ス可シ

各箇ノ證據方法ニ付テノ證據申出及ヒ之ニ關スル陳述ハ第六節乃至第十節ノ規定ニ從フ

第二百十四條 證據方法及ヒ證據抗辯ハ判決ニ接著スル口頭辯論ノ終結ニ至ルマテ之ヲ主張スルコトヲ得

證據方法及ヒ證據抗辯ノ時機ニ後レタル提出ニ付テハ第二百十條ノ規定ヲ準用ス

第二百十五條 證據調立ニ證據決定ヲ以テスル

特別ノ證據調手續ノ命令ハ第五節乃至第十節ノ規定ニ從フ

第二百十六條 當事者ハ訴訟ノ關係ヲ表明シ證據ノ結果ニ付キ辯論ヲ爲ス可シ
受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ於テ證據調ヲ爲シタルトキハ當事者ハ證據調ニ關スル審問調書ニ基キ其結果ヲ演述ス可シ

第二百十七條 裁判所ハ民法又ハ此法律ノ規定ニ反セサル限りハ辯論ノ全旨趣及ヒ或ル證據調ノ結果ヲ斟酌シ事實上ノ主張ヲ眞實ナリト認ム可キヤ否ヤ自由ナル心證ヲ以テ判斷ス可シ

第二百十八條 裁判所ニ於テ顯著ナル事實ハ之ヲ證スルコトヲ要セス

第二百十九條 地方慣習法、商慣習及ヒ規約又

ハ外國ノ現行法ハ之ヲ證ス可シ裁判所ハ當事者カ其證明ヲ爲スト否トニ拘ハラズ職權ヲ以テ必要ナル取調ヲ爲スコトヲ得

第二百一十條 此法律ノ規定ニ依リ事實上ノ主張ヲ疏明ス可キトキハ裁判官ヲシテ其主張ヲ眞實ナリト認メシム可キ證據方法ヲ申出ツルヲ以テ足ル但即時ニ爲スコトヲ得サル證據調ハ疏明ノ方法トシテハ之ヲ許サズ

第二百一十一條 裁判所ハ事件ノ如何ナル程度ニ在ルチ間ハス自ラ又ハ受命判事若クハ受託判事ニ依リ訴訟又ハ或ル争點ノ和解ヲ試ムル權アリ和解ヲ試ムル爲ニハ當事者ノ自身出頭ヲ命スルコトヲ得

第二百一十二條 判決ヲ受ク可キ事項ノ申立ハ書面ニ基キ之ヲ爲スコトヲ要ス

書面ニ掲ケサル申立アルトキハ調書ニ附録トシテ添附ス可キ書面ヲ差出シテ之ヲ爲スコトヲ要ス

重要ノ點ニ於テ以前申立テタルモノト異ナル申立ニ付テモ亦同シ
本條ノ規定ヲ遵守セサルトキハ申立ナキモノト看做ス

第二百一十三條 前條ノ申立ヲ除ク外書面ニ掲ケサル重要ナル陳述又ハ其書面ノ旨趣ト重要ノ點ニ於テ差異ノ存スル事項ハ其差異カ附加、削除其他ノ變更ニ係ルチ間ハス申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ調書若クハ其附録トシテ添附ス可キ爲メ差出シタル書面ニ依リ之ヲ明確ニス可シ

第二百一十四條 當事者ハ訴訟記録ヲ閱覽シ且

裁判所書記ヲシテ其正本、抄本及ヒ謄本ヲ付與セシムルコトヲ得

裁判長ハ第三者カ權利上ノ利害ヲ疏明スルトキニ限リ當事者ノ承諾ナクシテ訴訟記録ノ閱覽及ヒ其抄本竝ニ謄本ノ付與ヲ許スコトヲ得
判決、決定、命令ノ草案及ヒ其準備ニ供シタル書類竝ニ評議又ハ處罰ニ關スル書類ハ其原本ナルト謄本ナルトチ間ハス之ヲ閱覽スルコトヲ許サズ

第二節 判決

第二百一十五條 訴訟カ裁判ヲ爲スニ熟スルトキハ裁判所ハ終局判決ヲ以テ裁判ヲ爲ス
同時ニ辯論及ヒ裁判ヲ爲ス爲メ併合シタル數箇ノ訴訟中ノ一ノミ裁判ヲ爲スニ熟スルトキモ亦同シ

第二百一十六條

一ノ訴ヲ以テ起シタル數箇ノ請求中ノ一箇又ハ一箇ノ請求中ノ一分又ハ反訴ヲ起シタル場合ニ於テハ本訴若クハ反訴ノミ裁判ヲ爲スニ熟スルトキハ裁判所ハ終局判決(一分判決)ヲ以テ裁判ヲ爲ス
然レトモ裁判所ハ事件ノ事情ニ從ヒテ一分判決ヲ相當トセサルトキハ之ヲ爲ササルコトヲ得

第二百一十七條

各箇ノ獨立ナル攻撃若クハ防禦ノ方法又ハ中間ノ争カ裁判ヲ爲スニ熟スルトキハ中間判決ヲ以テ裁判ヲ爲スコトヲ得

第二百一十八條

請求ノ原因及ヒ數額ニ付キ争アルトキハ裁判所ハ先ツ其原因ニ付キ裁判ヲ爲スコトヲ得
請求ノ原因ヲ正當ナリトスル判決ハ上訴ニ關

シテハ終局判決ト看做シ其判決確定ニ至ルマ
テ爾後ノ手續ヲ中止ス然レトモ裁判所ハ申立
ニ因リ其數額ニ付キ辯論ヲ爲ス可キヲ命スル
コトヲ得

第二百二十九條 口頭辯論ノ際原告其訴ヘタル
請求ヲ拋棄シ又ハ被告之ヲ認諾スルトキハ裁
判所ハ申立ニ因リ其拋棄又ハ認諾ニ基キ判決
ヲ以テ却下又ハ敗訴ノ言渡ヲ爲ス可シ

第二百三十條 判決ハ辯論ヲ經タル總テノ攻
撃及ヒ防禦ノ方法ヲ包括ス
然レトモ數箇ノ獨立ナル攻撃又ハ防禦ノ方法
中其一箇ヲ適切ナリトスルトキハ裁判所ハ他
ノ方法ニ付キ判斷スル義務ナシ
第二百三十一條 裁判所ハ申立テサル事物ヲ原
告若クハ被告ニ歸セシムル權ナシ

裁判所ハ終局判決ヲ爲ス場合ニ於テハ訴訟費
用ノ負擔ニ限リ申立アラサルモ判決ヲ爲ス可
シ然レトモ一分判決ヲ爲ス場合ニ於テハ費用
ノ裁判ヲ後ノ判決ニ讓ルコトヲ得

第二百三十二條 判決ハ其基本タル口頭辯論ニ
臨席シタル判事ニ限リ之ヲ爲ス

第二百三十三條 判決ハ口頭辯論ノ終結スル期
日又ハ直チニ指定スル期日ニ於テ之ヲ言渡ス
但其期日ハ七日ヲ過クルコトヲ得ス

第二百三十四條 判決ノ言渡ハ判決主文ノ朗讀
ニ因リ之ヲ爲ス副席判決ノ言渡ハ其主文ヲ作
ラサル前ト雖モ之ヲ爲スコトヲ得
裁判ノ理由ヲ言渡スコトヲ至當ト認ムルトキ
ハ判決ノ言渡ト同時ニ其理由ヲ朗讀シ又ハ口
頭ニテ其要領ヲ告グ可シ

第二百三十五條 判決ノ言渡ハ當事者又ハ其一
方ノ在廷スルト否トニ拘ハラス其效力ヲ有ス

言渡アリタル判決ニ基キ訴訟手續ヲ續行シ又
ハ他ニ其判決ヲ使用スル原告若クハ被告ノ權
ハ此法律ニ特定シタル場合ヲ除ク外相手方ニ
其判決ヲ送達スルト否トニ拘ハラサルモノト
ス

第二百三十六條 判決ニハ左ノ諸件ヲ掲グ可シ

- 第一 當事者及ヒ其法律上代理人ノ氏名、
身分、職業及ヒ住所
- 第二 事實及ヒ爭點ノ摘示但其摘示ハ當事
者ノ口頭演述ニ基キ殊ニ其提出シタル申
立ヲ表示シテ之ヲ爲ス
- 第三 裁判ノ理由
- 第四 判決主文

第五 裁判所ノ名稱、裁判ヲ爲シタル判事
ノ官氏名

第二百三十七條 判決ノ原本ニハ裁判ヲ爲シタ
ル判事署名捺印ス若シ陪席判事署名捺印スル
ニ差支アルトキハ其理由ヲ開示シテ裁判長其
旨ヲ附記シ裁判長差支アルトキハ官等最モ高
キ陪席判事之ヲ附記ス

判決ノ原本ハ言渡ノ日ヨリ起算シテ七日内ニ
裁判所書記ニ之ヲ交付ス可シ
裁判所書記ハ言渡ノ日及ヒ原本領收ノ日ヲ原
本ニ附記シ且其附記ニ署名捺印ス可シ

第二百三十八條 各當事者ハ判決ノ送達アラン
コトヲ申立ツルコトヲ得其申立アリタルトキ
ハ判決ノ正本ヲ送達ス可シ

第二百三十九條 未タ判決ヲ言渡サス又ハ未タ

判決ノ原本ニ署名捺印セサル間ハ裁判所書記
ハ其正本、抄本及ヒ謄本ヲ付與スルコトヲ得
ス

裁判所書記ハ判決ノ正本、抄本及ヒ謄本ニ署
名捺印シ且裁判所ノ印ヲ捺シテ之ヲ認證ス可
シ

第二百四十條 裁判所ハ其言渡シタル終局判
決及ヒ中間判決ノ中ニ包含シタル裁判ニ關東
セラル

第二百四十一條 裁判所ハ申立ニ因リ又ハ職權
ヲ以テ何時ニテモ判決中ノ違算、書損及ヒ此
類ニスル著シキ誤謬ヲ更正ス

此更正ニ付テハ口頭辯論ヲ經スシテ裁判ヲ爲
スコトヲ得
右更正ノ申立ヲ却下スル決定ニ對シテハ上訴

ヲ爲スコトヲ得ス更正ヲ宣言スル決定ニ對シ
テハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第二百四十二條 主タル請求若クハ附帶ノ請求
又ハ費用ノ全部若クハ一分ノ裁判ヲ爲スニ際
シ脱漏シタルトキハ申立ニ因リ追加ノ裁判ヲ
以テ判決ヲ補充ス可シ

判決ノ言渡後直チニ追加裁判ノ申立ヲ爲ササ
ルトキハ遅クモ判決ノ正本ヲ送達シタル日
ヨリ起算シテ七日ノ期間内ニ之ヲ爲スコトヲ
要ス

追加裁判ノ申立アルトキハ即時ニ又ハ新期日
ヲ定メテ口頭辯論ヲ爲サシム可シ其辯論ハ訴
訟ノ完結セサル部分ニ限り之ヲ爲ス

第二百四十三條 判決ヲ更正シ又ハ補充スル裁
判ハ判決ノ原本及ヒ正本ニ之ヲ追加シ若シ正

本ニ之ヲ追加スルコトヲ得サルトキハ更正又
ハ補充ノ裁判ノ正本ヲ作ル可シ

第二百四十四條 判決ハ其主文ニ包含スルモノ
ニ限り確定力ヲ有ス

第二百四十五條 口頭辯論ニ基キ爲ス裁判所ノ
決定ハ之ヲ言渡スコトヲ要ス

第二百三十三條、第二百三十四條ノ規定ハ裁
判所ノ決定ニ之ヲ準用シ又第二百三十五條、
第二百三十九條及ヒ第二百四十條ノ規定ハ裁
判所ノ決定及ヒ裁判長並ニ受命判事又ハ受託
判事ノ命令ニ之ヲ準用ス

言渡ヲ爲ササル裁判所ノ決定及ヒ言渡ヲ爲サ
サル裁判長並ニ受命判事又ハ受託判事ノ命令
ハ職權ヲ以テ之ヲ當事者ニ送達ス可シ

第三節 關席判決

第二百四十六條 原告若クハ被告口頭辯論ノ期
日ニ出頭セサル場合ニ於テハ出頭シタル相手
方ノ申立ニ因リ關席判決ヲ爲ス

第二百四十七條 出頭セサル一方カ原告ナルト
キハ裁判所ハ關席判決ヲ以テ其訴ノ却下ヲ言
渡スコトヲ得

第二百四十八條 出頭セサル一方カ被告ナルト
キハ裁判所ハ被告カ原告ノ事實上ノ口頭供述
ヲ自白シタルモノト看做シ原告ノ請求ヲ正當
ト爲ストキハ關席判決ヲ以テ被告ノ敗訴ヲ言
渡シ又其請求ヲ正當ト爲ササルトキハ其訴ノ
却下ヲ言渡スコトヲ得

第二百四十九條 延期シタル口頭辯論ノ期日又
ハ口頭辯論ヲ續行スル爲ニ定ムル期日モ亦第
二百四十六條ノ辯論期日ニ同シ

第二百五十條

原告若クハ被告出頭スルモ辯論ヲ爲ササルトキ又ハ辯論ヲ爲サスシテ任意ニ退廷シタルトキハ出頭セサルモノト看做ス

第二百五十一條

原告若クハ被告カ本案ノ辯論ヲ爲シタルトキハ各箇ノ事實、證書又ハ發問ニ付キ陳述ヲ爲サス又ハ任意ニ退廷スルモ本節ノ規定ヲ適用セス

第二百五十二條

左ノ場合ニ於テハ闕席判決ノ申立ヲ却下ス然レトモ出頭シタル原告若クハ被告ハ口頭辯論ノ延期ヲ申立ツルコトヲ得

第一 出頭シタル原告若クハ被告カ裁判所ノ職務上調査ス可キ事情ニ付キ必要ナル證明ヲ爲ス能ハサルトキ

第二 出頭セサル原告若クハ被告ニ口頭上事實ノ供述又ハ申立ヲ適當ナル時期ニ書

面ヲ以テ通知セサルトキ

辯論ヲ延期シタルトキハ出頭セサル原告若クハ被告ヲ新期日ニ呼出ス可シ

第二百五十三條

闕席判決ノ申立ヲ却下スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得又其決定ヲ取消シタルトキハ出頭セサル原告若クハ被告ヲ新期日ニ呼出サスシテ闕席判決ヲ爲ス

第二百五十四條

裁判所ハ左ノ場合ニ於テハ職權ヲ以テ闕席判決ノ申立ニ付テノ辯論ヲ延期スルコトヲ得

第一 出頭セサル原告若クハ被告カ合式ニ呼出サレザリシトキ

第二 出頭セサル原告若クハ被告カ天災其他避ケ可カラサル事變ノ爲ニ出頭スル能

ハサルコトノ眞實ト認ム可キ事情アルト

出頭セザリシ原告若クハ被告ハ新期日ニ之ヲ呼出ス可シ

第二百五十五條

闕席判決ヲ受ケタル原告若クハ被告ハ其判決ニ對シ故障ヲ申立ツルコトヲ得

故障ノ期間ハ十四日トス此期間ハ不變期間ニシテ闕席判決ノ送達ヲ以テ始マル

故障申立ハ判決ノ送達前ト雖モ之ヲ爲スコトヲ得

外國ニ於テ送達ヲ爲スコトキ又ハ公ノ告示ヲ以テ之ヲ爲スコトキハ裁判所ハ闕席判決ニ於テ故障期間ヲ定メ又ハ後日決定ヲ以テ之ヲ定ム此決定ハ口頭辯論ヲ經スシテ爲スコト

ヲ得

第二百五十六條

故障申立ハ闕席判決ヲ爲シタル裁判所ニ書面ヲ差出シテ之ヲ爲ス

書面ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 故障ヲ申立テラレタル闕席判決ノ表

第二 其判決ニ對スル故障ノ申立

此書面ニハ本案ニ付テノ口頭辯論準備ノ爲ニ必要ナル事項アルトキモ亦之ヲ掲グ可シ

第二百五十七條 判然許ス可ラサル故障又ハ判然法律上ノ方式ニ適セス若クハ其期間ノ經過後ニ起シタル故障ハ裁判長ノ命令ヲ以テ之ヲ却下ス可シ

此却下ノ命令ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第二百五十八條 前條ノ場合ヲ除ク外裁判所ハ故障申立ノ書面ヲ相手方ニ送達シ且故障ニ付キ口頭辯論ノ新期日ヲ定メ當事者ノ雙方ヲ呼出ス可シ

第二百五十九條 裁判所ハ職權ヲ以テ故障ヲ許ス可キヤ否ヤ又法律上ノ方式ニ從ヒ若クハ其期間ニ於テ故障ヲ申立テタルヤ否ヤヲ調査ス可シ

若シ此要件ノ一ヲ缺クトキハ判決ヲ以テ故障ヲ不適法トシテ棄却ス

第二百六十條 故障ヲ適法トスルトキハ訴訟ハ闕席前ノ程度ニ復ス

第二百六十一條 新辯論ニ基キ爲ス可キ判決ハ闕席判決ト符合スルトキハ闕席判決ヲ維持スルコトヲ言渡シ其符合セサル場合ニ於テハ新

判決ニ於テ闕席判決ヲ廢棄ス

第二百六十二條 法律ニ從ヒ闕席判決ヲ爲シタルトキ闕席ニ因リテ生シタル費用ハ相手方ノ不當ナル異議ニ因リ生セサルモノニ限り故障ノ爲メ闕席判決ヲ變更スル場合ニ於テモ其闕席シタル原告若クハ被告ニ之ヲ負擔セシム

第二百六十三條 故障ヲ申立テタル原告若クハ被告口頭辯論ノ期日又ハ辯論延期ノ日ニ出頭セザルトキハ第二百五十二條及第二百五十四條ニ規定シタル場合ヲ除ク外出頭シタル相手方ニ申立ニ因リ故障ヲ棄却スル新闕席判決ヲ言渡ス

新闕席判決ニ對シテハ故障ヲ申立ツルコトヲ得ス

第二百六十四條 故障ノ拋棄及ヒ其取下ニ付テ

ハ控訴ノ拋棄及ヒ其取下ニ付テノ規定ヲ準用ス

第二百六十五條 本節ノ規定ハ反訴又ハ既ニ原因ノ確定シタル請求ノ數額ノ定テ目的物トスル訴訟手續ニ之ヲ準用ス

中間訴訟ノ辯論ノ爲メ期日ヲ定メタルトキハ其闕席訴訟手續及ヒ闕席判決ハ其中間訴訟ヲ完結スルニ止マリ本節ノ規定ヲ之ニ準用ス

第四節 計算事件、財産分別及ヒ此

ニ類スル訴訟ノ準備手續

第二百六十六條 計算ノ當否、財産ノ分別又ハ此ニ類スル關係ヲ目的トスル訴訟ニ於テ計算書又ハ財産目錄ニ對シ許多ノ争アル請求ノ生シ又ハ許多ノ争アル異議ノ生シタルトキハ受訴裁判所ハ受命判事ノ面前ニ於ケル準備手續

ヲ命スルコトヲ得

第二百六十七條 準備手續ヲ命スル決定ヲ言渡スニ際シ裁判長ハ受命判事ヲ指定シ決定施行ノ期日ヲ定ム可シ若シ裁判長此期日ヲ定メザルトキハ受命判事之ヲ定ム又受命判事其委任ヲ施行スルニ差支アルトキハ裁判長更ニ他ノ判事ヲ任ス

第二百六十八條 準備手續ニ於テハ調書ヲ以テ左ノ諸件ヲ明確ニス可シ

- 第一 如何ナル請求ヲ爲スヤ及ヒ如何ナル攻撃、防禦ノ方法ヲ主張スルヤ
- 第二 如何ナル請求及ヒ如何ナル攻撃、防禦ノ方法ヲ争フヤ又ハ之ヲ争ハサルヤ
- 第三 争ト爲リタル請求及ヒ争ト爲リタル攻撃、防禦ノ方法ニ付テハ其事實上ノ關

係及ヒ當事者ノ表示シタル證據方法、主張シタル證據抗辯、證據方法並ニ證據抗辯ニ關シテ爲タル陳述及ヒ提出シタル申立

此手續ハ受訴裁判所ニ於テ訴訟又ハ中間訴訟カ判決又ハ證據決定ヲ爲スニ熟スルマテ之ヲ續行ス可シ

第二百六十九條 原告若クハ被告カ期日ニ於テ受命判事ノ面前ニ出頭セサルトキハ受命判事ハ前條ノ規定ニ依リ調書ヲ以テ出頭シタル原告若クハ被告ノ提供ヲ明確ニシ且新期日ヲ定メ出頭セサル原告若クハ被告ニハ調書ノ謄本ヲ付與シテ新期日ニ之ヲ呼出ス可シ
原告若クハ被告カ新期日ニモ亦出頭セサルトキハ送達セシ調書ニ掲ケタル相手方ノ事實上

ノ主張ヲ自白シタリト看做シ其主張ニ付テノ準備手續ハ完結シタルモノトス
第二百七十條 受訴裁判所ハ準備手續ノ終結後ニ口頭辯論ノ期日ヲ定メ之ヲ當事者ニ通知ス可シ

第二百七十一條 當事者ハ口頭辯論ニ於テ準備手續ノ結果ヲ調書ニ基キ演述ス可シ
原告若クハ被告カ出頭セサルトキハ準備手續ニ於テ爭ハサル請求ハ一分判決ヲ以テ之ヲ完結ス其他ニ付テハ申立ニ因リテ闕席判決ヲ爲ス可シ

第二百七十二條 受命判事ノ調書ヲ以テ明確ニス可キ事實又ハ證書ニ付キ陳述ヲ爲サズ又ハ之ヲ拒ミタルトキハ口頭辯論ニ於テ之ヲ追完スルコトヲ得ス

請求、攻撃若クハ防禦ノ方法、證據方法及ヒ證據抗辯ニシテ受命判事ノ調書ヲ以テ之ヲ明確ニセサルモノニ付テハ後日ニ至リ始メテ生シ又ハ後日ニ至リ始メテ原告若クハ被告ノ知リタルコトヲ疏明スルトキニ限り口頭辯論ニ於テ之ヲ主張スルコトヲ得

第五節 證據調ノ總則

第二百七十三條 證據調ハ受訴裁判所ニ於テ之ヲ爲スヲ以テ通例トス

證據調ハ此法律ニ定メタル場合ニ限り受訴裁判所ノ部員一名ニ之ヲ命シ又ハ區裁判所ニ之ヲ託スルコトヲ得

此證據調ヲ命スル決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第二百七十四條 當事者ノ申立テタル數多ノ證

據中其調フ可キ限度ハ裁判所之ヲ定ム

當事者ノ演述ニ引續キ直チニ證據調ヲ爲サズシテ受訴裁判所ニ於テ新期日ニ之ヲ爲シ又ハ受命判事若クハ受託判事ノ面前ニ於テ之ヲ爲ス可キトキハ證據決定ニ因リ之ヲ命ス可シ

第二百七十五條 證據調ニ付キ不定時間ノ障アルトキハ申立ニ因リ相當ノ期間ヲ定ム可シ

此期間ノ滿了後ト雖モ訴訟手續ヲ遲滞セシメサル限りハ其證據方法ヲ用非ルコトヲ得

第二百七十六條 證據決定ニハ左ノ諸件ヲ掲ク可シ

- 第一 證ス可キ係爭事實ノ表示
- 第二 證據方法ノ表示殊ニ證人又ハ鑑定人ヲ訊問ス可キトキハ其表示
- 第三 證據方法ヲ申出テタル原告若クハ被

告ノ表示

第二百七十七條 證據決定ノ變更ハ其決定ノ施行完結前ニ在リテ新ナル辯論ニ基クトキニ限リ之ヲ申立ツルコトヲ得

證據決定ノ施行ハ職權ヲ以テ之ヲ爲ス

第二百七十八條

受訴裁判所ノ部員カ證據調ヲ爲スコキトキハ裁判長證據決定言渡ノ際受命判事ヲ指名シ且證據調ノ期日ヲ定ム若シ其期日ヲ定メサルトキハ受命判事之ヲ定ム

受命判事其命ヲ施行スルニ差支アルトキハ裁判長更ニ他ノ部員ヲ命ス

第二百七十九條

他ノ裁判所ニ於テ證據調ヲ爲スコキトキハ裁判長ハ其囑託書ヲ發スコシ證據調ニ關スル書類ハ原本ヲ以テ受託判事ヨリ受訴裁判所書記ニ之ヲ送致シ其書記ハ之ヲ

受領シタルコトヲ當事者ニ通知スコシ

第二百八十條

受命判事又ハ受託判事カ證據調ノ期日ヲ定メタルトキハ其期日及ヒ場所ヲ當事者ニ通知スコシ

第二百八十一條

外國ニ於テ爲スコキ證據調ハ外國ノ管轄官廳又ハ其國駐在ノ帝國ノ公使若クハ領事ニ囑託シテ之ヲ爲ス其囑託ニ付テハ第五百五十二條及ヒ第五百五十五條ノ規定ヲ準用ス

第二百八十二條

受命判事又ハ受託判事ハ他ノ裁判所ニ於テ證據調ヲ爲スコキトノ至當ナル原因ノ爾後ニ生シタルトキハ其裁判所ニ證據調ヲ囑託スルコトヲ得此囑託ヲ爲シタルトキハ當事者ニ之ヲ通知スコシ

第二百八十三條

受命判事又ハ受託判事ノ面前

ニ於テ證據調ノ際ニ争ヲ生シ其争ノ完結スルニ非サレハ證據調ヲ續行スルコトヲ得且其判事之ヲ裁判スル權ナキトキハ其完結ハ受訴裁判所之ヲ爲ス

第二百八十四條

當事者ノ一方又ハ雙方證據調ノ期日ニ出頭セサルトキハ事件ノ程度ニ因リ爲シ得ヘキ限リハ證據調ヲ爲スコシ

原告若クハ被告ノ出頭セサルカ爲ニ證據調ノ全部又ハ一分ヲ爲スコトヲ得サル場合ニ於テハ其追完又ハ補充ハ此カ爲メ訴訟手續ノ遲滯セサルトキ又ハ舉證者其過失ニ非スシテ前期日ニ出頭スル能ハサリシコトヲ疏明スルトキニ限り判決ニ接著スル口頭辯論ノ終結ニ至ルマテ申立ニ因リ之ヲ命ス

第二百八十五條

裁判所ハ事件ノ未タ判決ヲ爲

スニ熟セスト認ムルトキハ證據調ノ補充ヲ決定スルコトヲ得

第二百八十六條

證據調又ハ其續行ノ爲メ新期日ヲ定ムル必要アルトキハ舉證者又ハ當事者雙方前期日ニ出頭セサリシトキト雖モ職權ヲ以テ之ヲ定ム

第二百八十七條

受訴裁判所ニ於テ證據調ヲ爲ストキハ其期日ハ同時ニ口頭辯論ヲ續行スル期日ナリトス

受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ於テ證據調ヲ爲スコキトヲ命シタルトキハ受訴裁判所ハ證據決定中ニ併セテ口頭辯論續行ノ期日ヲ定ムルコトヲ得若シ之ヲ定メサルトキハ證據調ノ終結後職權ヲ以テ其期日ヲ定メ之ヲ當事者ニ通知スコシ

第二百八十八條 舉證者ハ裁判所ノ定ムル期間内ニ證據調ノ費用ヲ豫納ス可シ若シ其期間内ニ豫納セサルトキハ證據調ヲ爲サス但期間ノ滿了後ト雖モ豫納シタルトキハ訴訟手續ノ遲滯ヲ生セサル場合ニ限り證據調ヲ許ス

第六節 人 證

第二百八十九條 何人ヲ問ハス法律ニ別段ノ規定ナキ限りハ民事訴訟ニ關シ裁判所ニ於テ證據スル義務アリ

第二百九十條 官吏、公吏ハ退職ノ後ト雖モ其職務上默秘ス可キ義務アル事情ニ付テハ其所屬廳又ハ其最後ノ所屬廳ノ許可ヲ得タルトキニ限り證人トシテ之ヲ訊問スルコトヲ得大臣ニ付テハ勅許ヲ得ルコトヲ要ス此許可ハ證言カ國家ノ安寧ヲ害スル恐アルト

キニ限り之ヲ拒ムコトヲ得右許可ハ受訴裁判所ヨリ之ヲ求メ且證人ニ之ヲ通知ス可シ

第二百九十一條 人證ノ申出ハ證人ヲ指名シ及ヒ證人ノ訊問ヲ受ク可キ事實ヲ表示シテ之ヲ爲ス

第二百九十二條 證人ノ呼出狀ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

- 第一 證人及ヒ當事者ノ表示
- 第二 證據決定ノ旨趣ニ依リ訊問ヲ爲ス可キ事實ノ表示
- 第三 證人ノ出頭ス可キ場所及ヒ日時
- 第四 出頭セサルトキハ法律ニ依リ處罰ス可キ旨
- 第五 裁判所ノ名稱

第二百九十三條 豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人、軍屬ヲ證人トシテ呼出スニハ其所屬ノ長官又ハ隊長ニ囑託シテ之ヲ爲ス其長官又ハ隊長ハ期日ヲ遵守セシムル爲ニ其呼出ヲ受ケタル者ノ關勤ヲ許ス可シ若シ軍務上之ヲ許ス能ハサルトキハ其旨ヲ裁判所ニ通知シ且他ノ期日ヲ定ムル求テ爲ス義務アリ

第二百九十四條 合式ニ呼出サレタル證人ニシテ正當ノ理由ナク出頭セサル者ニ對シテハ申立ナシト雖モ決定ヲ以テ其不參ニ因リ生シタル費用ノ賠償及ヒ貳拾圓以下ノ罰金ヲ言渡ス可シ
證人カ再度出頭セサル場合ニ於テハ更ニ費用ノ賠償及ヒ罰金ヲ言渡ス可シ又其拘引ヲ命スルコトヲ得

證人ハ右ノ決定ニ對シテ抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行ヲ停止スル效力ヲ有ス豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人、軍屬ニ對スル罰金ノ言渡及ヒ執行ハ軍事裁判所又ハ所屬ノ長官又ハ隊長ニ囑託シテ之ヲ爲ス其拘引ニ付テモ亦同シ

第二百九十五條 證人其出頭セサリシコトヲ後日ニ正當ノ理由ヲ以テ辯解スルトキハ罰金及ヒ賠償ノ決定ヲ取消ス可シ
證人ノ不參屆及ヒ決定取消ノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得
第二百九十六條 皇族證人ナルトキハ受命判事又ハ受託判事其所在ニ就キ訊問ヲ爲ス
各大臣ニ付テハ其官廳ノ所在地ニ於テ之ヲ訊問ス若シ其所在地外ニ滞在スルトキハ其現在

地ニ於テ之ヲ訊問ス
帝國議會ノ議員ニ付テハ開會期間其議會ノ所
在地ニ滞在在中ハ其所在地ニ於テ之ヲ訊問ス
第二百九十七條 左ニ掲クル者ハ證言ヲ拒ムコ
トヲ得

第一 原告若クハ被告又ハ其配偶者ト親族
ナルトキ但姻族ニ付テハ婚姻ノ解除シ
タルトキト雖モ亦同シ
第二 原告若クハ被告ノ後見ヲ受クル者
第三 原告若クハ被告ト同居スル者又ハ雇
人トシテ之ニ仕フル者
裁判長ハ訊問前ニ前項ノ者ニ證言ヲ拒ム權利
アル旨ヲ告ク可シ
第二百九十八條 左ノ場合ニ於テハ證言ヲ拒ム
コトヲ得

第一 官吏、公吏又ハ官吏、公吏タリシ者
カ其職務上默秘ス可キ義務アル事情ニ
關スルトキ
第二 醫師、藥商、穩婆、辯護士、公證人、神
職及ヒ僧侶カ其身分又ハ職業ノ爲メ委
託ヲ受ケタルニ因リテ知りタル事實ニ
シテ默秘ス可キモノニ關スルトキ
第三 問ニ付テノ答辯カ證人又ハ前條ニ掲
ケタル者ノ耻辱ニ歸スルカ又ハ其刑事
上ノ訴追ヲ招ク恐アルトキ
第四 問ニ付テノ答辯カ證人又ハ前條ニ掲
ケタル者ノ爲メ直接ニ財產權上ノ損害
ヲ生ゼシム可キトキ
第五 證人カ其技術又ハ職業ノ秘密ヲ公ニ
スルニ非サレハ答辯スルコト能ハサル

第二百九十九條 證人ハ第二百九十七條第一號
及ヒ第二百九十八條第四號ノ場合ニ於テ左ノ
事項ニ付キ證言ヲ拒ムコトヲ得ス
第一 家族ノ出產、婚姻又ハ死亡
第二 家族ノ關係ニ因リ生スル財產事件ニ
關スル事實
第三 證人トシテ立會ヒタル場合ニ於ケル
權利行爲ノ成立及ヒ旨趣
第四 原告若クハ被告ノ前主又ハ代理人ト
シテ係争ノ權利關係ニ關シ爲シタル行
爲
前條第一號、第二號ニ掲ケタル者其默秘ス可
キ義務ヲ免除セラレタルトキハ證言ヲ拒ムコ
トヲ得ス

第三百條 證言ヲ拒ム證人ハ其訊問ノ期日前
ニ書面又ハ口頭ヲ以テ又ハ期日ニ於テ其拒絕
ノ原因タル事實ヲ開示シ且之ヲ説明ス可シ
期日前ニ證言ヲ拒ミタル證人ハ期日ニ出頭ス
ル義務ナシ
裁判所書記ハ拒絕ノ書面ヲ受領シ又ハ其陳述
ニ付キ調書ヲ作りタルトキハ之ヲ當事者ニ通
知ス可シ
第三百一條 拒絕ノ當否ニ付テハ受訴裁判所當
事者ヲ審訊シタル後決定ヲ以テ其裁判ヲ爲ス
但第二百九十八條第一號ノ場合ニ於テ爲シタ
ル拒絕ノ當否ニ付テハ所屬廳又ハ最後ノ所屬
廳ノ裁定ニ任ス
原告若クハ被告カ出頭シタルトキハ出頭シタ
ル者ノ申述ヲ斟酌シテ決定ヲ爲ス

右決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得此
抗告ハ執行ヲ停止スル效力ヲ有ス

第三百二條 原因ヲ開示セスシテ證言ヲ拒ミ又
ハ開示シタル原因ノ棄却確定シタル後ニ之ヲ
拒ミタルトキハ申立ヲ要セスシテ決定ヲ以テ
證人ニ對シ其拒絕ニ因リテ生シタル費用ノ賠
償及ヒ四十圓以下ノ罰金ヲ言渡ス
證人ハ費用ノ賠償及ヒ罰金ノ言渡ニ對シ抗告
ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行ヲ停止スル效力
ヲ有ス
豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人、軍閥ニ對
スル罰金ノ言渡及ヒ執行ハ軍事裁判所ニ囑託
シテ之ヲ爲ス

第三百三條 原告若クハ被告ハ相手方ト相手方
ノ證人トノ間ニ第二百九十七條第一號乃至第

三號ノ關係アルトキハ其證人ヲ忌避スルコト
ヲ得

第三百四條 忌避ノ申請ハ證人ノ訊問前ニ之ヲ
爲スコシ此時限後ハ其前ニ忌避ノ原因ヲ主張
スルヲ得サリシコトヲ疏明スルトキニ限り其
證人ヲ忌避スルコトヲ得
忌避ノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコ
トヲ得

忌避ノ原因ハ之ヲ疏明ス可シ

第三百五條 忌避ノ申請ニ付テノ裁判ハ口頭辯
論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得
忌避ノ原因アリト宣言スル決定ニ對シテハ上
訴ヲ爲スコトヲ得ス忌避ノ原因ナシト宣言ス
ル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得
第三百六條 各證人ニハ其携帶ス可キ呼出狀其

他適當ノ方法ヲ以テ人違ナラサルコトヲ判然
ナラシメタル後訊問前各別ニ宣誓ヲ爲サシム
可シ

然レトモ宣誓ハ特別ノ原因アルトキ殊ニ之ヲ
爲サシム可キヤ否ヤニ付キ疑ノ存スルトキハ
訊問ノ終ルマテ之ヲ延フルコトヲ得

第三百七條 證人ハ訊問前ニ宣誓ヲ爲スコキ場
合ニ於テハ良心ニ從ヒ眞實ヲ述ヘ何事ヲモ默
秘セス又何事ヲモ附加セサル旨ノ誓ヲ宣フ可
シ

又訊問後ニ宣誓ヲ爲スコキ場合ニ於テハ良心
ニ從ヒ眞實ヲ述ヘ何事ヲモ默秘セス又何事ヲ
モ附加セサリシ旨ノ誓ヲ宣フ可シ

第三百八條 判事ハ宣誓前ニ相當ナル方法ヲ以
テ宣誓者ニ偽證ノ罰ヲ諭示ス可シ

第三百九條 宣誓ヲ拒ム證人ニ付テハ第三百條
乃至第三百二條ノ規定ヲ適用ス

第三百十條 左ノ者ハ宣誓ヲ爲サシメスシテ參
考ノ爲メ之ヲ訊問スルコトヲ得

- 第一 訊問ノ時未タ滿十六歳ニ達セサル者
- 第二 宣誓ノ何物タルヤヲ了解スルニ必要ナル精神上ノ發達ノ缺クル者
- 第三 刑事上ノ判決ニ因リ公權ヲ剝奪又ハ停止セラレタル者

第四百 第二百九十七條及ヒ第二百九十八條
第三號並ニ第四號ノ規定ニ依リ證言ヲ
拒絕スル權利アリテ之ヲ行使セサル者
但第二百九十八條第三號並ニ第四號ノ
場合ニ於テハ拒絕ノ權利ニ關スル事實
ニ付キ證言ヲ爲スコキコトヲ申立テラ

第五 証人ノ成績ニ直接ノ利害關係ヲ有スル者

第三百十一條 証人訊問ハ後ニ訊問ス可キ証人ノ在ラサル場所ニ於テ各別ニ之ヲ爲ス

第三百十二條 証人訊問ハ証人ニ其氏名、年齢、身分、職業及ヒ住居ヲ問フヲ以テ始マル又必要ナル場合ニ於テハ其事件ニ於テ証言ノ信用ニ關スル事情殊ニ當事者トノ關係ニ付テノ間ヲ爲スコシ

第三百十三條 証人ニハ其訊問事項ニ付キ知りタルモノヲ牽連シテ供述セシム可シ

得タル原因ヲ穿鑿スル爲メ必要ナル場合ニ於テハ尙ホ他ノ問ヲ發ス可シ

第三百十四條 証人ハ其供述ニ換ヘテ書類ヲ朗讀シ其他覺書ヲ用井ルコトヲ得ス但算數ノ關係ニ限リ覺書ヲ用井ルコトヲ得

第三百十五條 陪席判事ハ裁判長ニ告ケテ証人ニ問ヲ發スルコトヲ得

第三百十六條 調書ニハ証人カ其訊問ノ前若クハ後ニ宣誓シタルヤ又ハ宣誓セズシテ訊問ヲ發問ノ許否ニ付キ異議アルトキハ裁判所ハ直チニ之ヲ裁判ス

第三百十七條 調書ニハ証人カ其訊問ノ前若クハ後ニ宣誓シタルヤ又ハ宣誓セズシテ訊問ヲ發問ノ許否ニ付キ異議アルトキハ裁判所ハ直チニ之ヲ裁判ス

受ケタルヤヲ記載ス可シ

第三百十七條 受訴裁判所ハ左ノ場合ニ於テ証人ノ再訊問ヲ命スルコトヲ得

第一 証人訊問カ法律上ノ規定ニ違ヒタルトキ

第二 証人訊問ノ完全ナラサルトキ

第三 証人ノ供述カ明白ナラス又ハ兩義ニ涉ルトキ

第四 証人カ其供述ノ補充又ハ更正ヲ申立ツルトキ

第五 此他裁判所カ再訊問ヲ必要トスルトキ

第三百十八條 左ノ場合ニ於テ証人ニ依レル證據ハ受訴裁判所ノ部員一名ニ之ヲ命シ又ハ區裁判所ニ之ヲ囑託スルコトヲ得

第一 眞實ヲ探知スル爲メ現場ニ就キ証人ヲ訊問スルノ必要ナルトキ

第二 証人カ疾病其他ノ事由ノ爲メ受訴裁判所ニ出頭スル能ハサルトキ

第三 証人カ受訴裁判所ノ所在地ヨリ遠隔ノ地ニ在リテ其裁判所ニ出頭スルニ付キ不相應ノ時日及ヒ費用ヲ要スルトキ

第三百十九條 第二百九十四條、第二百九十五條、第三百二條及ヒ第三百九條ニ掲ケタル証人ニ對スル受訴裁判所ノ權ハ受命判事又ハ受託判事ニモ屬ス

証人カ受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ於テ理由ヲ開示シテ證書ヲ拒ミ又ハ宣誓ヲ拒ミ又ハ職權若クハ申立ニ因リ發シタル問ニ答フルコトヲ拒ムトキハ此拒絕ノ當否ニ付キ裁判ヲ爲

ス横ハ受訴裁判所ニ屬ス
 受命判事又ハ受託判事カ原告若クハ被告ヨリ
 申立テタル間ヲ發スルコトヲ否ムトキハ原告
 若クハ被告ハ其當否ニ付キ受訴裁判所ノ裁判
 ナ求ムルコトヲ得
 證人ノ再訊問ハ受命判事又ハ受託判事ノ意見
 ナ以テ之ヲ命スルコトヲ得
第三百二十條 證人ノ申出テタル原告若クハ被
 告ハ其訊問ノ開始マテハ此證據方法ヲ拋棄ス
 ルコトヲ得其後ハ相手方ノ承諾ヲ得ルトキニ
 限り之ヲ拋棄スルコトヲ得
第三百二十一條 各證人ハ日當ノ辨濟及ヒ其出
 頭ノ爲ニ旅行ヲ要スルトキハ旅費ノ辨濟ヲ請
 求スルコトヲ得
 此金額ノ拂渡ハ訊問期日ノ終リタル後直チニ

之ヲ求ムルコトヲ得
 舉證者ノ豫納シタル金額不足スルトキハ職權
 ナ以テ其不足額ヲ取立ツ可シ
第七節 鑑定
第三百二十二條 鑑定ニ付テハ以下數條ニ於テ
 別段ノ規定ヲ設ケサル限りハ人證ニ付テノ規
 定ヲ準用ス
第三百二十三條 鑑定ノ申出ハ鑑定ス可キ事項
 ナ表示シテ之ヲ爲ス
第三百二十四條 立會フ可キ鑑定人ノ選定及ヒ
 其員數ノ指定ハ受訴裁判所之ヲ爲ス其裁判所
 ハ鑑定人ノ任命チ一名マテニ制限シ又ハ何時
 ニテモ既ニ任命シタル者ニ代ヘ他ノ鑑定人チ
 任命スルコトヲ得
 裁判所ハ鑑定人トシテ訊問ヲ受クルニ適當ナ

ル者ヲ指名ス可キ旨ヲ當事者ニ催告スルコト
 ナ得
 當事者カ一定ノ者ヲ鑑定人ニ爲スコトヲ合意
 シタルトキハ裁判所ハ其合意ニ從フ可シ然レ
 トモ裁判所ハ當事者ノ爲スコキ選定チ一定ノ
 員數ニ制限スルコトヲ得
第三百二十五條 外國ノ書類又ハ產物ノ審査チ
 要スル場合ニ於テ必要ナル能力チ有スル本邦
 人ノ在ラサルトキハ裁判所ハ外國人ヲ鑑定人
 ニ任命スルコトヲ得
第三百二十六條 左ニ掲クル者鑑定チ命セラレ
 タルトキハ之ヲ爲ス義務アリ
第一 必要ナル種類ノ鑑定チ爲ス爲ニ公ニ
 任命セラレタル者
第二 鑑定チ爲スニ必要ナル學術、技藝若

クハ職業ニ常ニ從事スル者又ハ學術、
 技藝若クハ職業ニ從事スル爲ニ公ニ任
 命セラレ若クハ授權セラレタル者
 右ノ外鑑定チ爲スコキ旨ヲ裁判所ニ於テ述ヘ
 タル者ハ鑑定人タル義務ナキトキト雖モ鑑定
 チ爲ス義務アリ
第三百二十七條 鑑定人ハ證人カ證言チ拒ムコ
 トヲ得ルト同一ノ原因ニ依リ鑑定チ拒ム權利
 アリ
 官吏、公吏ハ其所屬廳ニ於テ異議アルトキハ
 之ヲ鑑定人トシテ訊問スルコトヲ得ス
第三百二十八條 鑑定チ爲ス義務アル鑑定人出
 頭セス又ハ鑑定チ拒ミタル場合ニ於テハ其者
 ニ對シ此カ爲ニ生シタル費用ノ賠償及ヒ罰金
 ナ言渡ス可シ但其鑑定人チ拘引スルコトヲ得

ス

第三百二十九條 鑑定人ハ其鑑定ヲ爲ス前ニ其鑑定人タル義務ヲ公平且誠實ニ履行スヘキ旨ノ誓ヲ宣フ可シ

第三百三十條 受訴裁判所ハ其意見ヲ以テ左ノ諸件ヲ定ム可シ

第一 鑑定人ノ意見ハ口頭又ハ書面ニテ之ヲ述ヘシム可キヤ

第二 數名ノ鑑定人ヲ訊問ス可キ場合ニ於テ各意見カ異ナルトキハ共同ニテ鑑定書ヲ作ラシム可キヤ又ハ各別ニ之ヲ作ラシム可キヤ

第三 口頭辯論ノ際鑑定人ノ總員又ハ其一名ヲシテ鑑定書ヲ説明セシム可キヤ

第四 鑑定ノ結果カ不十分ナルトキハ同一

又ハ他ノ鑑定人ヲシテ再ヒ鑑定ヲ爲サシム可キヤ

第三百三十一條 受訴裁判所ハ鑑定人ノ任命ヲ受命判事又ハ受託判事ニ委任スルコトヲ得此場合ニ於テハ受命判事又ハ受託判事ハ第三百二十四條及ヒ第三百三十條第一號並ニ第二號ノ規定ニ依リ受訴裁判所ニ屬スル權ヲ有ス

第三百三十二條 鑑定人ハ日常、旅費及ヒ立替金ノ辨濟ヲ請求スルコトヲ得

此場合ニ於テハ第三百二十二條ノ規定ヲ準用ス

第三百三十三條 特別ノ智識ヲ要セシ過去ノ事實又ハ事情ニシテ其實驗アル者ノ訊問ニ因リテ確定ス可キトキハ證人ニ付テノ規定ヲ適用ス

第八節 書 證

第三百三十四條 書證ノ申出ハ證書ヲ提出シテ之ヲ爲ス

第三百三十五條 舉證者其使用セントスル證書カ相手方ノ手ニ存スル旨ヲ主張スルトキハ書證ノ申出ハ相手方ニ其證書ノ提出ヲ命センコトヲ申出テ之ヲ爲ス可シ

第三百三十六條 相手方ハ左ノ場合ニ於テ證書ヲ提出スル義務アリ

第一 舉證者カ民法ノ規定ニ從ヒ訴訟外ニ於テモ證書ノ引渡又ハ其提出ヲ求ムルコトヲ得ルトキ

第二 證書カ其旨趣ニ因リ舉證者及ヒ相手方ニ共通ナルトキ

第三百三十七條 相手方ハ其手ニ存スル證書ニ

シテ其訴訟ニ於テ舉證ノ爲メ引用シタルモノヲ提出スル義務アリ準備書面中ニノミ引用シタルトキト雖モ亦同シ

第三百三十八條 證書ノ提出ヲ命センコトノ申立ニハ左ノ諸件ヲ掲グ可シ

第一 證書ノ表示

第二 證書ニ依リ證ス可キ事實ノ表示

第三 證書ノ旨趣

第四 證書カ相手方ノ手ニ存スル旨ヲ主張スル理由タル事情

第五 證書ヲ提出ス可キ義務ノ原因ノ表示

第三百三十九條 裁判所ハ證書ニ依リ證ス可キ事實ノ重要ニシテ且申立ヲ正當ナリト認ムル場合ニ於テ相手方カ證書ノ其手ニ存スルコトヲ自白スルトキ又ハ申立ニ對シ陳述セサルト

キハ證據決定ヲ以テ證書ノ提出ヲ命ス
第三百四十條 相手方カ證書ヲ所持セサル旨ヲ申立ツルトキハ此申立ノ眞實ナルヤ否ヤヲ定ムル爲メ又ハ證書ノ所在ヲ穿鑿スル爲メ又ハ舉證者ノ使用ヲ妨グル目的ヲ以テ故意ニ證書ヲ隱匿シ若クハ使用ニ耐ヘサラシメタルヤ否ヤヲ穿鑿スル爲メ本章第十節ノ規定ニ從ヒテ相手方本人ヲ訊問ス可シ

相手方カ官廳ナルトキハ證書カ其官廳ノ保藏ニ係ラス又ハ其所在ヲ開示スルヲ得サル旨ノ長官ノ證明書ヲ以テ訊問ニ換フ此證明書ヲ差出サシムル爲メ相當ノ期間ヲ定ム可シ

第三百四十一條 證書ヲ所持スルコトヲ自白シ又ハ之ヲ所持セスト申立テサル相手方カ其證書ヲ提出ス可シトノ命ニ從ハス又ハ相手方カ

所持セスト申立テタル證書ニ付キ訊問ヲ受ケテ供述ヲ爲スコトヲ拒ミタルトキ又ハ舉證者ノ使用ヲ妨グル目的ヲ以テ故意ニ證書ヲ隱匿シ若クハ使用ニ耐ヘサラシメタルコトノ明確ナルトキハ舉證者ノ差出シタル證書ノ謄本ヲ正當ナルモノト看做ス若シ謄本ヲ差出ササルトキハ裁判所ハ其意見ヲ以テ證書ノ性質及ヒ旨趣ニ付キ舉證者ノ主張ヲ正當ナリト認ムルコトヲ得

前條第二項ニ掲ケタル證明書ヲ裁判所ノ定メタル期限内ニ差出ササルトキハ相手方タル官廳ニ對シ前項ト同一ノ結果ヲ生ス

第三百四十二條 舉證者其使用セントスル證書カ第三者ノ手ニ存スル旨ヲ主張スルトキハ證書ノ申出ハ其證書ヲ取寄スル爲メ期限ヲ定メ

ンコトヲ申立テテ之ヲ爲ス
第三百四十三條 第三者ハ舉證者ノ相手方ニ於ケルト同一ナル理由ニ因リ證書ヲ提出スル義務アリ然レトモ強テ證書ヲ提出セシムルコトハ訴ヲ以テノミ之ヲ爲スコトヲ得

第三百四十四條 第三百四十二條ニ從ヒ申立テ爲スニハ第三百三十八條第一號乃至第三號及ヒ第五號ノ要件ヲ履ミ且證書カ第三者ノ手ニ存スルコトヲ説明ス可シ

第三百四十五條 證書ニ依リ證ス可キ事實ノ重要ニシテ且其申立カ前條ノ規定ニ適スルトキハ裁判所ハ證書提出ノ期限ヲ定ム可シ

第三者ニ對スル訴訟ノ完結シタルトキ又ハ舉證者カ訴ノ提起、訴訟ノ繼續又ハ強制執行ヲ遅延シタルトキハ相手方ハ前項ノ期間ノ滿了

前下雖モ訴訟手續ノ繼續ヲ申立ツルコトヲ得
第三百四十六條 舉證者其使用セントスル證書カ官廳又ハ公吏ノ手ニ存スル旨ヲ主張スルトキハ書證ノ提出ハ證書ノ送付ヲ官廳又ハ公吏ニ囑託セラレンコトヲ申立テテ之ヲ爲ス

此規定ハ當事者カ法律上ノ規定ニ從ヒ裁判所ノ助力ナクシテ取寄スルコトヲ得ヘキ證書ニハ之ヲ適用セス

官廳又ハ公吏カ第三百三十六條ノ規定ニ基キ證書ヲ提出スル義務アル場合ニ於テ其送付ヲ拒ムトキハ第三百四十二條乃至第三百四十五條ノ規定ヲ適用ス

第三百四十七條 證據決定ヲ爲シタル後第三百四十二條及ヒ第三百四十六條ノ規定ニ從ヒ證書ヲ申出テタル場合ニ於テ證書取寄ノ手續ノ

爲ニ訴訟ノ完結ヲ遲延スルニ至ル可ク且裁判所ニ於テ原告若クハ被告カ訴訟ヲ遲延スル故意ヲ以テ又ハ甚シキ怠慢ニ因リ證書ヲ早ク申出テサリシコトノ心證ヲ得タルトキハ申立ニ因リ其書證ノ申出ヲ却下スルコトヲ得

第三百四十八條 口頭辯論ノ際證書ヲ提出スルニ於テハ其毀損若クハ紛失ノ恐アリ又ハ他ノ顯著ナル障礙アルトキハ受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ證書ヲ提出ス可キ旨ヲ命スルコトヲ得

受命判事又ハ受託判事ハ調書ノ明細書及ヒ其附本ヲ證書ニ添附シ又證書ノ一分ノミ必要ナルトキハ第七條第二項ノ規定ニ從ヒテ作りタル抄本ヲ之ニ添附ス可シ

第三百四十九條 公正證書ハ正本又ハ認證ヲ受

ケタル附本ヲ以テ之ヲ提出スルコトヲ得然レトモ裁判所ハ舉證者ニ正本ノ提出ヲ命スルコトヲ得

私署證書ハ原本ヲ以テ之ヲ提出ス可シ若シ當事者カ未ク提出セサル原本ノ真正ニ付キ一致シ只其證書ノ效力又ハ解釋ニ付テノミ爭テ爲ストキハ附本ヲ提出スルヲ以テ足ル然レトモ裁判所ハ職權ヲ以テ舉證者ニ原本ノ提出ヲ命スルコトヲ得

提出シタル附本ニ換ヘテ正本又ハ原本ヲ提出ス可キ旨ノ命ニ從ハサルトキハ裁判所ハ心證ヲ以テ附本ニ如何ナル證據方ヲ付ス可キヤチ裁判ス

第三百五十條 舉證者ハ證書ヲ提出シタル後ハ相手方ノ承諾ヲ得ルトキニ限り此證據方法

ヲ拋棄スルコトヲ得

第三百五十一條 公正證書又ハ檢眞ヲ經タル私署證書ヲ偽造若クハ變造ナリト主張スル者ハ其證書ノ眞否ヲ確定センコトノ申立ヲ爲ス可シ

此場合ニ於テハ裁判所ハ其證書ノ眞否ニ付キ中間判決ヲ以テ裁判ヲ爲ス可シ

第三百五十二條 私署證書ノ眞否ニ付キ爭アルトキハ裁判所ハ舉證者ノ申立ニ因リ檢眞ヲ爲スコトヲ得

第三百五十三條 私署證書ノ檢眞ハ總テノ證據方法及ヒ手跡若クハ印章ノ對照ニ因リテ之ヲ爲ス證書ノ眞否ヲ命セントスル當事者ハ裁判所ノ定ムル期間内ニ手跡若クハ印章ヲ對照スル爲ニ適當ナル書類ヲ提出ス可シ

眞正ナリトノ自白又ハ證明シタル適當ノ對照書類ナキトキハ對照ノ爲メ原告若クハ被告ニ對シ裁判所ニ於テ一定ノ語辭ノ手記ヲ命スルコトヲ得其手記シタル語辭ハ調書ノ附録トシテ之ニ添附ス可シ

裁判所ハ手跡若クハ印章ヲ對照シタル結果ニ付キ自由ナル心證ヲ以テ裁判ヲ爲シ又必要ナル場合ニ於テハ鑑定ヲ爲サシメタル後之ヲ爲ス

原告若クハ被告カ裁判所ノ定メタル期間内ニ對照書類ヲ提出セザルトキ又ハ對照ス可キ語辭ヲ手記ス可キ裁判所ノ命ニ對シ十分ナル辯解ヲ爲サスシテ之ニ從ハサルトキ又ハ書樣ヲ變シテ手記シタルトキハ證書ノ眞否ニ付テノ相手方ノ主張ハ其他ノ證據ヲ要セスシテ之ヲ

真正ナリト看做スコトヲ得

第三百五十四條 提出シタル證書ハ直チニ之ヲ還付シ又適當ナル場合ニ於テハ其附本ヲ記録ニ留メテ之ヲ還付ス可シ

然レトモ證書ノ偽造又ハ變造ナリト爭フトキハ檢察ノ意見ヲ聽キタル後ニ非サレハ之ヲ還付スルコトヲ得ス

第三百五十五條 公正證書ノ偽造若クハ變造ナルコトヲ眞實ニ反キテ主張シタル原告若クハ被告ニ惡意若クハ重過失ノ責アルトキハ五十圓以下ノ過料ヲ言渡ス

又私署證書ノ眞正ナルコトヲ眞實ニ反キテ爭フトキハ前項ト同一ナル條件ヲ以テ二十圓以下ノ過料ヲ言渡ス

第三百五十六條 本節ノ規定ハ事件ノ性質ニ於

テ許ス限リハ事跡ノ紀念又ハ權利ノ證據ノ爲メ作リタル割符界標等ノ如キモノニモ之ヲ準用ス

第九節 檢證

第三百五十七條 檢證ノ申立ハ檢證物ヲ表示シ及ヒ證ス可キ事實ヲ開示シテ之ヲ爲ス

第三百五十八條 受訴裁判所ハ檢證ヲ爲スニ際シ鑑定人ノ立會ヲ證スルコトヲ得

受訴裁判所ハ檢證及ヒ鑑定人ノ任命ヲ其部員一名ニ命シ又ハ區裁判所ニ囑託スルコトヲ得

第三百五十九條 檢證ヲ爲ス際發見シタル事項ハ調書ニ記載シテ之ヲ明確ナラシメ又必要ナル場合ニ於テハ調書ノ附録トシテ添附ス可キ圖面ヲ作り之ヲ明確ナラシム可シ
若シ既ニ記録ニ圖面ノ存スルトキハ之ヲ檢證

物ニ對照シ必要ナル場合ニ於テハ之ヲ更正ス可シ

第十節 當事者本人ノ訊問

第三百六十條 當事者ノ提出シタル許ス可キ證據ヲ調ヘタル結果ニ因リ證ス可キ事實ノ眞否ニ付キ裁判所カ心證ヲ得ルニ足ラサルトキハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ原告若クハ被告ノ本人ヲ訊問スルコトヲ得

第三百六十一條 裁判所ハ原告若クハ被告ヲ訊問スルコトヲ決定シ且原告若クハ被告ノ自身カ決定言渡ノ際在廷スルトキハ直チニ其訊問ヲ爲スヲ以テ通例トス

第三百六十二條 訊問ヲ受クル原告若クハ被告ハ供述ニ換ヘテ書類ヲ朗讀シ其他覺書ヲ用非ルコトヲ得ス但算數ノ關係ニ限リ覺書ヲ用非

ルコトヲ得

第三百六十三條 原告若クハ被告カ十分ナル理由ナクシテ供述スルコトヲ拒ミ又ハ訊問期日

ニ出頭セサルトキハ裁判所ハ其意見ヲ以テ訊問ニ因リテ舉證ス可キ相手方ノ主張ヲ正當ナリト認ムルコトヲ得

第三百六十四條 訴訟無能力者ノ法律上代理人カ訴訟ヲ爲ストキハ法律上代理人若クハ訴訟無能力者ヲ訊問ス可キ又ハ此等ノ者ヲ共ニ訊問ス可キヤ裁判所ノ意見ヲ以テ之ヲ決定ス法律上代理人數人アルトキハ其一人ヲ訊問ス可キ又ハ數人ヲ訊問ス可キヤモ亦前號ニ同シ

第十一節 證據保全

第三百六十五條 證據ヲ紛失スル恐アリ又ハ之

ヲ使用シ難キ恐アルトキハ證據保全ノ爲メ證人若クハ鑑定人ノ訊問又ハ檢證ヲ申立ツルコトヲ得

第三百六十六條 訴訟カ既ニ繫屬シタルトキハ此申請ハ受訴裁判所ニ之ヲ爲スコシ

切迫ナル危險ノ場合ニ於テハ訊問ヲ受ク可キ者ノ現在地又ハ檢證スコキ物ノ所在地ヲ管轄スル區裁判所ニ申請ヲ命スコトヲ得

訴訟ノ未タ繫屬セサルトキハ前項ニ記載シタル區裁判所ニ申請ヲ爲スコトヲ要ス

右申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第三百六十七條 申請ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 相手ノ表示

第二 證據調ヲ爲スコキ事實ノ表示

第三 證據方法殊ニ證人若クハ鑑定人ノ訊問ヲ爲スコキトキハ其表示

第四 證據ヲ紛失スル恐アリ又ハ之ヲ使用シ難キ恐アル理由此理由ハ之ヲ説明スコシ

第三百六十八條 申請ニ付テノ決定ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

申請ヲ許容スル決定ニハ證據調ヲ爲スコキ事實及ヒ證據方法殊ニ訊問スコキ證人若クハ鑑定人ノ氏名ヲ記載スコシ此決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第三百六十九條 證據調ノ期日ニハ申立人ヲ呼出シ又決定及ヒ申請ノ謄本ヲ送達シテ其權利防衛ノ爲ニ相手方ヲモ呼出スコシ

切迫ナル危險ノ場合ニ於テハ適當ナル時間ニ相手方ヲ呼出スコトヲ得サリシトキト雖モ證據調ヲ妨クルコト無シ

第三百七十條 證據調ハ本章第六節、第七節及第九節ノ規定ニ從ヒテ之ヲ爲ス

證據調ノ調書ハ證據調ヲ命シタル裁判所ニ之ヲ保存スコシ各當事者ハ證據調ノ調書ヲ訴訟ニ於テ使用スル權利アリ

受訴裁判所ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ再度ノ證據調ヲ命シ又ハ既ニ調ヘタル證據ノ補充ヲ命スルコトヲ得

第三百七十一條 證據調ハ第三百六十五條ノ條件ナキトキト雖モ相手方ノ承諾ニ因リ之ヲ許スコトヲ得

第三百七十二條 申立人カ相手方ヲ指定セサル

トキハ申立人自己ノ過失ニ非スシテ相手方ヲ指定シ能ハサルコトヲ説明スル場合ニ限り其申請ヲ許ス

申請ヲ許容シタルトキハ裁判所ハ其知レサル相手方ノ權利防衛ノ爲ニ臨時代理人ヲ任スルコトヲ得

第二章 區裁判所ノ訴訟手續

第一節 通常ノ訴訟手續

第三百七十三條 區裁判所ノ通常ノ訴訟手續ニ付テハ區裁判所ノ構成又ハ第一編及ヒ本節ノ規定ニ依リ差異ノ生セサル限リハ地方裁判所ノ訴訟手續ニ付テノ規定ヲ適用ス

第三百七十四條 訴ハ書面又ハ口頭ヲ以テ裁判ニ之ヲ爲スコトヲ得

第三百七十五條 起訴アリタルトキハ裁判所書

記ハ訴狀ヲ被告ニ送達スル手續ヲ爲ス
準備書面ノ交換ハ之ヲ爲スコトヲ要セス

第三百七十六條 原告若クハ被告ハ其申立及ヒ
事實上ノ主張ニシテ豫メ通知スルニ非サレハ
相手方ニ於テ之ニ對シ陳述ヲ爲シ得ヘカラサ
ルモノヲ口頭辯論ノ前直接ニ相手方ニ通知ス
ルコトヲ得

第三百七十七條 口頭辯論ノ期日ト訴狀送達ト
ノ間ニ少ナクトモ三日ノ期間ヲ存スルコトヲ
要ス急迫ナル場合ニ於テハ此時間ヲ二十四時
マテニ短縮スルコトヲ得
送達ヲ外國ニ於テ爲スコトキハ事情ニ應ジ
テ時間ヲ定ム可シ

第三百七十八條 當事者ハ通常ノ裁判日ニ於テ
ハ豫メ期日ノ指定ナクシテ裁判所ニ出頭シ訴

訟ニ付キ辯論ヲ爲スコトヲ得
此場合ニ於テ訴ノ提起ハ口頭ノ演述ヲ以テ之
ヲ爲ス

第三百七十九條 數箇ノ妨訴ノ抗辯ヲ本案ノ辯
論前同時ニ提出ス可キ規定ハ裁判所管轄違ノ
抗辯ニ限り之ヲ適用ス

被告ハ妨訴ノ抗辯ニ基キ本案ノ辯論ヲ拒ム權
利ナシ然レトモ裁判所ハ職權ヲ以テ有抗辯ニ
付キ分離シタル辯論ヲ命スルコトヲ得

第三百八十條 第二百二十二條、第二百六十
六條乃至第二百七十二條ノ規定ハ區裁判所ノ
訴訟手續ニ之ヲ適用セス

然レトモ原告若クハ被告ノ申立及ヒ陳述ハ裁
判所ノ意見ニ從ヒ訴訟關係ヲ十分ニ明確ナラ
シムル爲メ必要ナルモノニ限り調書ヲ以テ之

ヲ明確ナラシム可シ

第三百八十一條 訴ヲ起サントスル者ハ和解ノ
爲メ請求ノ目的物ヲ開示シテ相手方ヲ其普通
裁判籍ヲ有スル區裁判所ニ呼出スコトキハ
申立ツルコトヲ得其申立ハ書面又ハ口頭ヲ以
テ之ヲ爲スコトヲ得

當事者雙方出頭シ和解ノ調ヒタルトキハ調書
ヲ以テ之ヲ明確ナラシム可シ
和解ノ調ハサルトキハ當事者雙方ノ申立ニ因
リ其訴訟ニ付キ直チニ辯論ヲ爲ス此場合ニ於
ケル訴ノ提起ハ口頭ノ演述ヲ以テ之ヲ爲ス
相手方カ出頭セズ又ハ和解ノ調ハサルトキハ
此カ爲ニ生シタル費用ハ訴訟費用ノ一分ト看
做ス

第一節 督促手續

第三百八十二條 一定ノ金額ノ支拂其他ノ代替
物若クハ有價證券ノ一定ノ數量ノ給付ヲ目的
トスル請求ニ付キ債權者ハ通常ノ訴訟手續ニ
依ラスシテ督促手續ニ依リ條件附ノ支拂命令
ヲ債務者ニ對シ發セシコトヲ申立ツルコトヲ
得

申請ノ旨趣ニ依レハ申請者反對給付ヲ爲スニ
非サレハ其請求ヲ主張スルコトヲ得サルトキ
又ハ支拂命令ノ送達ヲ外國ニ於テ爲シ若クハ
公示送達ヲ以テ爲スコトキハ督促手續ヲ許
サス

第三百八十三條 支拂命令ハ區裁判所之ヲ發ス
此命令ハ區裁判所ノ第一審ノ事物ノ管轄ノ制
限ナキモノト看做シ通常ノ訴訟手續ニ於ケル
訴ノ提起ニ付キ普通裁判籍又ハ不動産上裁判

籍ノ屬ス可キ區裁判所ノ管轄ニ專屬ス

第三百八十四條 支拂命令ヲ發スルコトノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

此申請ハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 當事者及ヒ裁判所ノ表示

第二 請求ノ一定ノ數額、目的物及ヒ原因

ノ表示若シ請求ノ數額ナルトキハ其各

箇ノ一定ノ數額、目的物及ヒ原因ノ表

示

第三 支拂命令ヲ發センコトヲ申立

第三百八十五條 裁判所ハ申請ヲ調査シ其申請

カ前三條ノ規定ニ適當セス又ハ申請ノ旨趣ニ

於テ請求ノ理由ナク又ハ現時理由ナキコトノ

顯ハルルトキハ其中請ヲ却下ス

請求ノ一分ノミニ付キ支拂命令ヲ發スルコト

ヲ得サルトキハ亦其申請ヲ却下ス然レトモ數

箇ノ請求申或ルモノニ理由ナクシテ其他ノモ

ノニ理由アリト見ユルトキハ其理由アリト見

ユルモノニ限り申請ヲ許容ス

右却下ノ命令ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコト

ヲ得ス然レトモ通常ノ訴訟手續ニ依リ訴追ス

ルヲ妨グルコト無シ

第三百八十六條 支拂命令ハ豫メ債務者ヲ審訊

セスシテ之ヲ發ス

支拂命令ニハ第三百八十四條第一號及ヒ第二

號ニ掲ケタル申請ノ要件ヲ記載シ且即時ノ強

制執行ヲ受ケント欲セハ此命令送達ノ日ヨリ

十四日ノ期間内ニ請求ヲ満足セシメ及ヒ其手

續ノ費用ニ付キ定ムル數額ヲ債務者ニ辨濟ス

可ク又ハ裁判所ニ異議ヲ申立ツ可キ旨ノ債務

者ニ對スル命令ヲ記載ス可シ

前項ノ期間ハ爲替ヨリ生スル請求ニ付テハ二

十四時間其他ノ請求ニ付テハ申立ニ因リ三日

マテニ之ヲ短縮スルコトヲ得

第三百八十七條 權利拘束ノ效力ハ支拂命令ヲ

債務者ニ送達スルヲ以テ始マル

支拂命令ノ送達ハ之ヲ債務者ニ通知ス可シ

第三百八十八條 債務者ハ支拂命令ニ對シ書面

又ハ口頭ヲ以テ異議ノ申立ヲ爲スコトヲ得

第三百八十九條 債務者カ請求ノ全部又ハ一分

ニ對シ相當ナル時間ニ異議ヲ申立ツルトキハ

支拂命令ノ效力ヲ失フ然レトモ權利拘束ノ效

力ヲ存續ス

數箇ノ請求申或ルモノニ對シ異議ヲ申立テタ

ルトキハ支拂命令ハ其他ノ請求及ヒ之ニ相當

スル費用ノ部分ニ付其效力ヲ有ス

第三百九十條 適當ナル時間ニ異議ヲ申立テ

タル場合ニ於テ請求ニ付キ起ス可キ訴力區裁

判所ノ管轄ニ屬スルトキハ其訴ハ支拂命令ノ

送達ノ同時ニ區裁判所ニ之ヲ起シタルモノト

看做ス其口頭辯論ノ期日ハ第三百七十七條ノ

規定ニ從ヒテ之ヲ定ム

第三百九十一條 請求ニ付キ起ス可キ訴力地方

裁判所ノ管轄ニ屬スル場合ニ於テハ適當ナル

時間ニ異議ノ申立アリタルコトヲ債權者ニ通

知ス可シ

債權者其通知書ノ送達アリタル日ヨリ起算シ

一箇月ノ期間内ニ管轄裁判所ニ訴ヲ起ササル

トキハ權利拘束ノ效力ヲ失フ

第三百九十二條 督促手續ノ費用ハ適當ナル時

間ニ異議ノ申立アリタル場合ニ於テハ起ス可
キ訴訟ノ費用ノ一分ト看做ス
前條ノ場合ニ於テ期間内ニ訴ヲ起ササルトキ
ハ手續ノ費用ハ債權者ノ負擔ニ歸ス
第三百九十三條 支拂命令ハ其命令中ニ掲ケタ
ル期間ノ經過後債權者ノ申請ニ因リ之ヲ假ニ
執行シ得ヘキコトヲ宣告ス但假執行ノ宣言前
債務者異議ヲ申立テサルトキニ限ル
右假執行ノ宣言ハ支拂命令ニ付ス可キ執行命
令ヲ以テ之ヲ爲ス其執行命令ニハ債務者ニ於
テ計算スル手續ノ費用ヲ掲ケ可シ
債權者ノ申請ヲ却下スル決定ニ對シテハ即時
抗告ヲ爲スコトヲ得

第三百九十四條 執行命令ハ假執行ノ宣言ヲ付
シタル關席判決ト同一ナリトス其執行命令ニ

對シテハ第二百五十五條乃至第二百六十四條
ノ規定ニ從ヒテ故障ヲ申立ツルコトヲ得請求
カ區裁判所ノ管轄ニ屬セサルトキハ區裁判所
ハ其故障ヲ法律上ノ方式及ヒ期間ニ於テ申立
テタルヤノ點ノミニ付キ辯論及ヒ裁判ヲ爲ス
此場合ニ於テハ第三百九十一條第二項ニ定メ
タル期間ハ故障ヲ許ス判決ノ確定ヲ以テ始マ
ル

第三百九十五條 時期ニ後レテ申立テタル異議
ハ命令ヲ以テ之ヲ却下ス
此却下ノ命令ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコト
ヲ得ス

第三編 上訴
第一章 控訴
第三百九十六條 控訴ハ區裁判所又ハ地方裁判

所ノ第一審ニ於テ爲シタル終局判決ニ對シテ
之ヲ爲ス

第三百九十七條 終局判決前ニ爲シタル裁判ハ
亦控訴裁判所ノ判斷ヲ受ケ但此法律ニ於テ不
服ヲ申立ツルコトヲ得スト明記シタルトキ又
ハ抗告ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトヲ得ルトキ
ハ此限ニ在ラス

第三百九十八條 關席判決ニ對シテハ期日ヲ懈
怠シタル者ヨリ控訴ヲ以テ不服ヲ申立ツルコ
トヲ得ス但故障ヲ許ササル關席判決ニ對シテ
ハ懈怠ナカリシコトヲ理由トスルトキニ限リ
控訴ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトヲ得

第三百九十九條 控訴ハ口頭辯論ノ前ニ於テハ
被控訴人ノ承諾ナクシテ之ヲ取下クルコトヲ
得

控訴ノ取下ハ上訴權ヲ喪失スル結果ヲ生ス

第四百條 控訴期間ハ一箇月トス此期間ハ不
變期間ニシテ判決ノ送達ヲ以テ始マル
判決ノ送達前ニ提起シタル控訴ハ無効トス
第二百四十二條ノ規定ニ從ヒ控訴期間内ニ追
加裁判ヲ以テ判決ヲ補充シタルトキハ控訴期
間ノ進行ハ最初ノ判決ニ對スル控訴ニ付テモ
追加裁判ノ送達ヲ以テ始マル

第四百一條 控訴ノ提起ハ控訴狀ヲ控訴裁判所
ニ差出シテ之ヲ爲ス

此控訴狀ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 控訴セラルル判決ノ表示
第二 此判決ニ對シ控訴ヲ爲ス旨ノ陳述
此他控訴狀ハ準備書面ニ關スル一般ノ規定ニ
從ヒテ之ヲ作り且判決ニ對シ如何ナル程度ニ

於テ不服ナルヤ及ヒ判決ニ付キ如何ナル變更ヲ爲ス可キヤノ申立ヲ掲ケ若シ新ニ主張セシトスル事實及ヒ證據方法アルトキハ其新ナル事實及ヒ證據方法ヲ掲ケ可シ

第四百二條 判然許ス可カラサル控訴又ハ判然法律上ノ方式ニ適セス若クハ其期間ノ經過後ニ起シタル控訴ハ裁判長ノ命令ヲ以テ之ヲ却下ス

此却下ノ命令ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第四百三條 控訴狀ノ送達ト口頭辯論ノ期日トノ間ニ存スルコトヲ要スル時間ニ於テハ第九十四條ノ規定ヲ適用シ答辯書ヲ差出ス可キ期間ノ催告ニ付テハ第九十九條ノ規定ヲ適用ス

前項ノ場合ニ於テモ亦第二百三條ノ規定ヲ適用スルコトヲ得

第四百四條 答辯書ハ準備書面ニ關スル一般ノ規定ニ從ヒテ之ヲ作り且被控訴人ノ一定ノ申立及ヒ其主張セントスル新ナル事實及ヒ證據ノ方法ヲ掲ケ可シ

第四百五條 被控訴人ハ自己ノ控訴ヲ拋棄シタルトキ又ハ控訴期間ノ經過シタルトキト雖モ附帶控訴ヲ爲スコトヲ得

關席判決ニ對シ附帶控訴ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトニ付テハ第三百九十八條ノ規定ニ從フ

第四百六條 左ノ場合ニ於テハ附帶控訴ハ其效力ヲ失フ

第一 控訴ヲ不適法トシテ判決ヲ以テ棄却シタルトキ

第二 控訴ヲ取下ケタルトキ

然レトモ被控訴人カ控訴期間ニ附帶控訴ヲ爲シタルトキハ之ヲ獨立ノ控訴ト看做ス

第四百七條 答辯書ニ新ナル事實若クハ證據方法ヲ掲ケ又ハ附帶控訴ヲ爲ス旨ノ陳述ヲ掲ケタルトキハ之ヲ控訴人ニ送達ス可シ

第四百八條 右ノ外控訴ノ訴訟手續ニハ地方裁判所ノ第一審ノ訴訟手續ノ規定ヲ準用ス但本章ノ規定ニ依リ差異ノ生スルモノハ此限ニ在ラス

第四百九條 當事者ノ雙方ヨリ控訴ヲ起シタルトキハ其兩控訴ニ付キ辯論及ヒ裁判ヲ同時ニ爲スヲ以テ通例トス

第四百十條 口頭辯論ハ其期日ニ於テ被控訴人ノ控訴期間ノ未タ經過セザルトキハ其申立ニ

因リ期間ノ満了マテ之ヲ延期ス

關席判決ヲ受ケタル原告若クハ被告ヨリ其判決ニ對シ故障ヲ申立テ相手方ヨリ控訴ヲ起シタルトキハ控訴ニ付テノ辯論及ヒ裁判ハ故障ノ完結マテ職權ヲ以テ之ヲ延期ス

第四百十一條 控訴裁判所ニ於ケル訴訟ハ不服ノ申立ニ因リ定マリタル範圍内ニ於テ更ニ之ヲ辯論ス

第四百十二條 當事者ハ其控訴ノ申立及ヒ不服ヲ申立テラシタル裁判ノ當否ヲ明瞭ナラシムル爲メ必要ナル限りハ口頭辯論ノ際第一審ニ於ケル辯論ノ結果ヲ演述ス可シ

演述ノ不正確又ハ不完全ナル場合ニ於テハ裁判長ハ其更正若クハ補充ヲ爲サシメ又必要ナル場合ニ於テハ辯論ヲ再開シテ之ヲ爲サシム

可シ
第四百十三條 訴ノ變更ハ相手方ノ承諾アルト

キト雖モ之ヲ許サス
第四百十四條 妨訴ノ抗辯ハ職權ヲ以テ調査ス

可カラサルモノニシテ且原告若クハ被告カ其
過失ニ非スシテ第一審ニ於テ提出シ能ハサリ
シコトヲ疎明スルトキニ限り之ヲ主張スルコ
トヲ得

本案ノ辯論ハ妨訴ノ抗辯ニ基キ之ヲ拒ムコト
ヲ得ス然レトモ裁判所ハ職權ヲ以テ妨訴ノ抗
辯ニ付キ分離シタル辯論ヲ命スルコトヲ得

第四百十五條 當事者ハ第一審ニ於テ主張セサ
リシ攻撃防禦ノ方法殊ニ新ナル事實及ヒ證據
方法ヲ提出スルコトヲ得
第四百十六條 新ナル請求ハ第九十六條第二

號及ヒ第三號ノ場合又ハ相殺スルコトヲ得ヘ
キモノニシテ且原告若クハ被告カ其過失ニ非
スシテ第一審ニ於テ提出シ能ハサリシコトヲ
證明スルトキニ限り之ヲ起スコトヲ得

第四百十七條 事實又ハ證書ニ付キ第一審ニ於
テ爲ササリシ陳述又ハ拒ミタル陳述ハ第二審
ニ於テ之ヲ爲スコトヲ得

第四百十八條 第一審ニ於テ爲シタル裁判上ノ
自白ハ第二審ニ於テモ亦其效力ヲ有ス
第四百十九條 控訴裁判所ハ控訴ヲ許ス可キヤ
否ヤ又控訴ヲ法律上ノ方式ニ從ヒ若クハ其期
間ニ於テ起シタルヤ否ヤ職權ヲ以テ調査ス
可シ若シ此要件ノ一ヲ缺クトキハ判決ヲ以テ
控訴ヲ不適法トシテ棄却ス可シ

第四百二十條 第一審ノ裁判ハ變更ヲ申立テ

タル部分ニ限り之ヲ變更スルコトヲ得
第四百二十一條 第一審ニ於テ是認シ又ハ非認
シタル請求ニ關スル總テノ争點ニシテ申立ニ

從ヒ辯論及ヒ裁判ヲ必要トスルモノハ第一審
ニ於テ此争點ニ付キ辯論及ヒ裁判ヲ爲ササル
トキト雖モ控訴裁判所ニ於テ其辯論及ヒ裁判
ヲ爲ス

第四百二十二條 控訴裁判所ハ左ノ場合ニ於テ
事件ニ付キ尙ホ辯論ヲ必要トスルトキハ其事
件ヲ第一審裁判所ニ差戻ス可シ

第一 不服ヲ申立テラレタル判決カ闕席判
決ナルトキ
第二 不服ヲ申立テラレタル判決カ闕席判
決ニ對スル故障ヲ不適法トシテ棄却シタ
ルモノナルトキ

第三 不服ヲ申立テラレタル判決カ妨訴ノ
抗辯ノミニ付キ裁判ヲ爲シタルモノナル
トキ

第四 請求カ其原因及ヒ數額ニ付キ争アル
場合ニ於テ不服ヲ申立テラレタル判決カ
先ツ其原因ニ付キ裁判ヲ爲シタルモノナ
ルトキ

第五 不服ヲ申立テラレタル判決カ證書訴
訟及ヒ爲替訴訟ニ於テ敗訴ノ被告ニ別訴
訟ヲ以テ追行ヲ爲ス權ヲ留保シタルモノ
ナルトキ

第四百二十三條 第一審ニ於テ訴訟手續ニ付テ
ノ規定ニ違背シタルトキハ控訴裁判所ハ其判
決及ヒ違背シタル訴訟手續ノ部分ヲ廢棄シ事
件ヲ第一審裁判所ニ差戻スコトヲ得

第四百二十四條 控訴ヲ理由ナシトスルトキハ

判決ヲ以テ控訴ノ棄却ヲ言渡ス可シ

第四百二十五條 判決ヲ控訴人ノ不利益ニ變更

スルコトハ相手方カ控訴又ハ附帶控訴ノ方法

ヲ以テ判決ニ付キ不服ヲ申立テタル部分ニ限

リ之ヲ爲スコトヲ得

第四百二十六條 第二百十條ノ規定ニ從ヒテ防

禦ノ方法ヲ却下スルトキハ其防禦ノ方法ヲ主

張スル權ハ之ヲ被告ニ留保ス可シ

第四百二十七條 防禦ノ方法ニシテ被告ニ其主

張スル權ハ之ヲ被告ニ留保ス可シ

第四百二十八條 控訴人カ口頭辯論ノ期日ニ出

頭セサルトキハ出頭シタル被控訴人ノ申立ニ

因リ闕席判決ヲ以テ控訴ノ棄却ヲ言渡ス可シ

第四百二十九條 被控訴人口頭辯論ノ期日ニ出

頭セサル場合ニ於テ出頭シタル控訴人ヨリ闕

席判決ノ申立ヲ爲ストキハ第一審裁判ノ憑據

ト爲リタルモノニ牴觸セサル控訴人ノ事實上

ノ供述ハ被控訴人之ヲ自白シタルモノト看做

シ且第一審裁判所ノ事實上ノ確定ヲ補充シ若

クハ辯駁スル爲メ控訴人ノ申立テタル適法ノ

證據調ハ既ニ之ヲ爲シ及ヒ其結果ヲ得タルモ

ノト看做シ闕席判決ヲ爲ス

第四百三十條 判決中ノ事實ノ摘示ニ付テハ

前審ノ判決ヲ引用スルコトヲ得

第四百三十一條 控訴裁判所ノ書記ハ控訴狀ノ

提出ヨリ二十四時間ニ第一審裁判所ノ書記ニ

訴訟記録ノ送付ヲ求ム可シ

控訴完結ノ後其記録ハ第二審ニ於テ爲シタル

判決ノ認證アル附本ト共ニ第一審裁判所ノ書

記ニ之ヲ返還ス可シ

第二章 上告

第四百三十二條 上告ハ地方裁判所及ヒ控訴院

張ヲ留保スルモノニ付テハ其訴訟ハ第二審ニ

繫屬ス

爾後ノ手續ニ於テ訴ヲ以テ主張シタル請求ノ

理由ナカリシコトノ顯ハルルトキハ前判決ヲ

廢棄シテ其訴ヲ棄却シ且申立ニ因リ判決ニ基

キ支拂ヒタルモノ又ハ給付シタルモノヲ返還

ス可キコトヲ言渡シ並ニ費用ニ付キ裁判ヲ爲

ス可シ

第四百三十三條 終局判決前ニ爲シタル裁判ハ

亦上告裁判所ノ判斷ヲ受ク但此法律ニ於テ不

服ヲ申立ツルコトヲ得スト明記シタルトキ及

ヒ抗告ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトヲ得ルトキ

ハ此限ニ在ラス

第四百三十四條 上告ハ法律ニ違背シタル裁判

ナルコトヲ理由トスルトキニ限り之ヲ爲スコ

トヲ得

第四百三十五條 法則ヲ適用セス又ハ不當ニ適

用シタルトキハ法律ニ違背シタルモノトス

第四百三十六條 裁判ハ左ノ場合ニ於テハ常ニ

法律ニ違背シタルモノトス

第四百三十七條 規定ニ從ヒ判決裁判所ヲ構成セザリ

シトキ

第二 法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除外セラレタル判事カ裁判ニ參與シタルトキ但忌避ノ申請又ハ上訴ヲ以テ除外ノ理由ヲ主張シタルモ其效ナカリシトキハ此限ニ在ラス

第三 判事カ忌避セラレ且忌避ノ申請ヲ理由アリト認メタルニ拘ハラズ裁判ニ參與シタルトキ

第四 裁判所カ其管轄又ハ管轄違ヲ不當ニ認メタルトキ

第五 訴訟手續ニ於テ原告若クハ被告カ法律ノ規定ニ從ヒ代理セラレザリシトキ

第六 訴訟手續ノ公行ニ付テノ規定ニ違背シタル口頭辯論ニ基キ裁判ヲ爲シタルトキ

キ

第七 裁判ニ理由ヲ付セサルトキ
第四百三十七條 上告期間ハ一箇月トス此期間ハ不變期間ニシテ判決ノ送達ヲ以テ始マル判決ノ送達前ニ提起シタル上告ハ無効トス

第四百三十八條 上告ノ提起ハ上告狀ヲ上告裁判所ニ差出シテ之ヲ爲ス
此上告狀ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 上告セラレル判決ノ表示
第二 此判決ニ對シ上告ヲ爲ス旨ノ陳述

此他上告狀ハ準備書面ニ關スル一般ノ規定ニ從ヒテ之ヲ作り特ニ判決ニ對シ如何ナル程度ニ於テ不服ナルヤ及ヒ判決ニ付キ如何ナル程度ニ於テ破毀ヲ爲ス可キヤノ申立ヲ掲ケ且法則ヲ適用セス若クハ不當ニ適用シタルトコトヲ

上告ノ理由トスルトキハ其法則ノ表示又ハ訴訟手續ニ付テノ規定ニ違背シタルコトヲ上告ノ理由トスルトキハ其欠缺ヲ明カニスル事實ノ表示又ハ法律ニ違背シテ事實ヲ確定シ若クハ遺脱シ若クハ提出シタルトキ看做シタルコトヲ上告ノ理由トスルトキハ其事實ノ表示ヲ掲ケ可シ

第四百三十九條 上告裁判所ハ上告人ヲ呼出シ其陳述ヲ聽キ上告ヲ許ス可カラサルモノナルトキ又ハ法律上ノ方式及ヒ期間ニ於テ起ササルトキ又ハ第四百三十四條ノ規定ニ依ラサルトキハ判決ヲ以テ之ヲ棄却ス可シ
上告人カ呼出ノ期日ニ出頭セサルトキハ上告ヲ取下ケタルモノト看做ス但出頭セザリシコトヲ期日ヨリ七日ノ期間内ニ十分ナル理由ヲ

以テ辯解シタルトキハ更ニ期日ヲ定ム

第四百四十條 上告狀ノ送達ト口頭辯論ノ期日トノ間ニ存スルコトヲ要スル時間ニ付テハ

第四百九十四條ノ規定ヲ適用シ答辯書ヲ差出ス可キ期間ノ催告ニ付テハ第四百九十九條ノ規定ヲ適用ス
前項ノ場合ニ於テモ亦第二百三條ノ規定ヲ適用スルコトヲ得

第四百四十一條 答辯書ハ準備書面ニ關スル一般ノ規定ニ從ヒテ之ヲ作り且一定ノ申立ヲ掲ケ可シ

第四百四十二條 被上告人ハ附帶上告ヲ爲スコトヲ得

此附帶上告ニ付テハ附帶控訴ノ規定ヲ準用ス
第四百四十三條 答辯書ニ附帶上告ヲ爲ス旨ノ

陳述ヲ掲ケタルトキハ之ヲ上告人ニ送達ス可シ

第四百四十四條 右ノ外上告ノ訴訟手續ニハ地方裁判所ノ第一審ノ訴訟手續ノ規定ヲ準用ス但本章ノ規定ニ依リ差異ノ生スルモノハ此限ニ在ラス

第四百四十五條 上告裁判所ハ當事者ノ爲シタル申立ノミニ付キ調査ヲ爲ス

第四百四十六條 上告裁判所ハ裁判ヲ爲スニ付キ控訴裁判所カ其裁判ノ懸據トシタル事實ヲ標準トス此事實ノ外ハ第四百三十八條第三項ニ掲ケタル事實ニ限り之ヲ斟酌スルコトヲ得證據調ヲ必要トスルトキハ上告裁判所ハ之ヲ命ス可シ

第四百四十七條 上告ヲ理由アリトスルトキハ

不服ヲ申立テラレタル判決ヲ破毀ス可シ

訴訟手續ニ關スル規定ニ違背シタルニ因リ判決ヲ破毀スルトキハ其違背シタル部分ニ限り訴訟手續ヲモ亦破毀ス可シ

第四百四十八條 判決ヲ破毀スル場合ニ於テハ第四百五十一條ノ規定ヲ除ク外更ニ辯論及ヒ裁判ヲ爲サシムル爲メ事件ヲ控訴裁判所ニ差戻シ又ハ之ヲ他ノ同等ナル裁判所ニ移送ス可シ
事件ノ差戻又ハ移送ヲ受ケタル裁判所ハ新口頭辯論ニ基キ裁判ヲ爲スコトヲ要ス

第四百四十九條 當事者ハ破毀セラレタル判決ノ以前ニ於ケル口頭辯論ニ當リ提出スルコトヲ得ヘカリシ事項ヲ新口頭辯論ニ際シ提出スル權利アリ

第四百五十條 事件ノ差戻又ハ移送ヲ受ケタル裁判所ハ上告裁判所ノ爲シタル法律ニ係ル判斷ニシテ判決ヲ破毀スル基本ト爲シタルモノヲ以テ新ナル辯論及ヒ裁判ノ基本ト爲ス義務アリ

第四百五十一條 上告裁判所ハ左ノ場合ニ於テ事件ニ付キ裁判ヲ爲ス可シ

第一 確定シタル事實ニ法律ヲ適用スルニ當リ法律ニ違背シタル爲ニ判決ヲ破毀シ且其事件カ裁判ヲ爲スニ熟スルトキ

第二 無訴權ノ爲メ又ハ裁判所ノ管轄違ナル爲ニ判決ヲ破毀スルトキ

第四百五十二條 上告ヲ理由ナシトスルトキハ之ヲ棄却ス可シ

第四百五十三條 裁判カ其理由ニ於テ法律ニ違

背シタルトキト雖モ他ノ理由ニ因リ裁判ノ正當ナルトキハ上告ヲ棄却ス可シ

第四百五十四條 左ノ諸件ニ關スル控訴ノ規定ハ上告ニ之ヲ準用ス

第一 關席判決ニ對スル不服ノ申立

第二 控訴ノ取下

第三 當事者ノ雙方ヨリ控訴ヲ起シタル場合ニ於ケル訴訟手續及ヒ控訴ト故障トナ同時ニ爲シタルトキノ訴訟手續

第四 口頭辯論ノ延期

第五 口頭辯論ノ際ニ於ケル當事者ノ演述妨訴ノ抗辯ニ付テノ辯論

第六 控訴ヲ起シタル者ハ不利益ト爲ル裁判ヲ爲ス可カラサルコト

第七 記録ノ送付並ニ返還

第八 記録ノ送付並ニ返還

第三章 抗告

第四百五十五條 抗告ハ訴訟手續ニ關スル申請
ヲ口頭辯論ヲ經スシテ却下シタル裁判ニ對シ
其他此法律ニ於テ特ニ掲ケタル場合ニ限り之
ヲ爲スコトヲ得

第四百五十六條 抗告ニ付テハ直近ノ上級裁判
所其裁判ヲ爲ス

抗告裁判所ノ裁判ニ對シテハ其裁判ニ因リ新
ナル獨立ノ抗告理由ヲ生シタルトキニ非サレ
ハ更ニ抗告ヲ爲スコトヲ得ス

第四百五十七條 抗告ハ不服ヲ申立テラレタル
裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長ノ屬スル裁
判所ニ抗告狀ヲ差出シテ之ヲ爲ス
訴訟カ區裁判所ニ繫屬シ若クハ管テ繫屬シタ
ルトキ又ハ證人鑑定人ヨリ若クハ證書ヲ提出

スル

義務アリト宣言ヲ受ケタル第三者ヨリ抗告ヲ
爲ストキハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第四百五十八條 抗告ハ新ナル事實及ヒ證據方
法ヲ以テ憑據ト爲スコトヲ得

第四百五十九條 不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ
爲シタル裁判所又ハ裁判長カ再度ノ考察若ク

ハ新ナル提供ニ基キ抗告ヲ理由アリトスルト
キハ不服ノ點ヲ更正シ又理由ヲシトスルトキ
ハ裁判所又ハ裁判長ハ意見ヲ付シテ三日ノ期
間内ニ抗告ヲ抗告裁判所ニ送付シ又適當トス
ル場合ニ於テハ訴訟記録ヲモ送付ス可シ

第四百六十條 抗告ハ此法律ニ於テ別段ノ規
定ヲ設ケタル場合ニ限り執行停止ノ效力ヲ有
ス

然レトモ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタ
ル裁判所又ハ裁判長ハ抗告ニ付テノ裁判アル
マテ其執行ヲ中止ヲ命スルコトヲ得
抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲ス前ニ不
服ヲ申立テラレタル裁判ノ執行中止ヲ命スル
コトヲ得

第四百六十一條 抗告ハ急迫ナル場合ニ限り直
チニ抗告裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得

抗告裁判所ハ裁判ヲ爲ス前ニ不服ヲ申立テラ
レタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長ノ意
見及ヒ記錄ヲ要求スルコトヲ得

抗告裁判所ハ事件ヲ急迫ナラスト認ムルトキ
ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判
所又ハ裁判長ニ其事件ヲ送付シ且其旨ヲ抗告
人ニ通知ス可シ

第四百六十二條 抗告裁判所ハ口頭辯論ヲ經ス
シテ裁判ヲ爲スヲ以テ通例トス

抗告裁判所ハ抗告人ト反對ノ利害關係ヲ有ス
ル者ニ抗告ヲ通知シテ書面上ノ陳述ヲ爲サシ
ムルコトヲ得
陳述ハ口頭ヲ以テ抗告ヲ爲シ得ヘキ場合ニ於
テハ亦口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

抗告裁判所ハ口頭辯論ノ爲ニ當事者ヲ呼出ス
コトヲ得

第四百六十三條 抗告裁判所ハ抗告ヲ許ス可キ
ヤ否ヤ又法律上ノ方式ニ從ヒ若クハ其期間ニ

於テ提出シタルヤ否ヤヲ職權ヲ以テ調査ス可
シ
若シ此要件ノ一ヲ缺クトキハ抗告ヲ不適法ト
シテ棄却ス可シ

第四百六十四條 抗告ヲ適法ニシテ且理由アリトスルトキハ抗告裁判所ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ廢棄シテ自ラ更ニ裁判ヲ爲シ又ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長ニ委任シテ裁判ヲ爲サシムルコトヲ得

抗告裁判所ノ裁判ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長ニ之ヲ通知ス可シ

第四百六十五條 受命判事若クハ受託判事ノ裁判又ハ裁判所書記ノ處分ノ變更ヲ求ムルニハ先ツ受訴裁判所ノ裁判ヲ求ム可シ

抗告ハ受訴裁判所ノ裁判ニ對シテ之ヲ爲スコトヲ得

第一項ノ規定ハ大審院ニモ亦之ヲ適用ス

第四百六十六條 即時抗告ノ場合ニ於テハ左ノ特別ノ規定ニ從フ

抗告ハ七日ノ不變期間内ニ之ヲ爲スコシ其期間ハ裁判ノ送達ヨリ始マリ第二百五十三條第六百八十條及ヒ第七百六十九條第三項ノ場合ニ於テハ裁判ノ言渡ヨリ始マル抗告裁判所ニ抗告ヲ提出シタルトキハ急迫ナラスト認メタル場合ニ於テモ亦不變期間ヲ保存ス

再審ヲ求ムル訴ニ付テノ要件存スルトキハ不變期間ノ滿了後ト雖モ此訴ノ爲メ定メタル期間内ハ抗告ヲ爲スコトヲ得

前條第一項ノ場合ニ於テハ抗告提出ノ爲メ定メタル方法ニ依リ不變期間内ニ受訴裁判所ノ裁判ヲ求ムルコトヲ要ス受訴裁判所ハ其申請ヲ正當ト認メサルトキハ之ヲ抗告裁判所ニ送

付ス可シ

第四百編 再審

第四百六十七條 確定ノ終局判決ヲ以テ終結シタル訴訟ハ取消ノ訴又ハ原狀回復ノ訴ニ因リ之ヲ再審スルコトヲ得

當事者ノ一方又ハ雙方ヨリ此兩訴ヲ起シタルトキハ原狀回復ノ訴ニ付テノ辯論及ヒ裁判ハ取消ノ訴ニ付テノ裁判カ確定スルマテ之ヲ中止ス可シ

第四百六十八條 左ノ場合ニ於テハ取消ノ訴ニ因リ再審ヲ求ムルコトヲ得

第一 規定ニ從ヒ判決裁判所ヲ構成セザリシトキ

第二 法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除斥セラレタル判事カ裁判ニ參與シタルトキ但

忌避ノ申請又ハ上訴ヲ以テ除斥ノ理由ヲ主張シタルモ其效ナカリシトキハ此限ニ在ラス

第三 判事カ忌避セラレ且忌避ノ申請カ理由アリト認メラレタルニ拘ハラズ裁判ニ參與シタルトキ

第四 訴訟手續ニ於テ原告若クハ被告カ法律ノ規定ニ從ヒ代理セラレザリシトキ

第一號及ヒ第三號ノ場合ニ於テ上訴若クハ故障ヲ以テ取消ヲ主張シ得ヘカリシトキハ取消ノ訴ヲ許サス

第四百六十九條 左ノ場合ニ於テハ原狀回復ノ訴ニ因リ再審ヲ求ムルコトヲ得

第一 刑法ニ掲ケタル職務上ノ義務ニ違背シタル罪ヲ訴訟ニ關シ犯シタル判事カ

裁判ニ參與シタリシトキ

第二 原告若クハ被告ノ法律上代理人若クハ訴訟代理人又ハ相手方若クハ其法律上代理人若クハ訴訟代理人カ罰セラル可キ行爲ヲ訴訟ニ關シテ爲シタリシトキ

第三 判決ノ憑據ト爲リタル證書カ偽造又ハ變造ナリシトキ

第四 證人若クハ鑑定人カ供述ニ因リ又ハ通事カ判決ノ憑據ト爲リタル通譯ニ因リ偽證ノ罪ヲ犯シタリシトキ

第五 判決ノ憑據ト爲リタル刑事上ノ判決カ他ノ確定ト爲リタル刑事上ノ判決ヲ以テ廢棄若クハ破毀セラレタリシトキ

第六 原告若クハ被告カ同一ノ事件ニ付テ

ノ判決ニシテ前ニ確定ト爲リタルモノヲ發見シ其判決カ不服ヲ申立テラレタル判決ト抵觸スルトキ

第七 相手方若クハ第三者ノ所爲ニ依リ以前ニ提出スルコトヲ得サリシ證書ニシテ原告若クハ被告ノ利益ト爲ル可キ裁判ヲ爲スニ至ラシム可キモノヲ發見シタルトキ

第一號乃至第四號ノ場合ニ於テハ罰セラル可キ行爲ニ付テ判決カ確定ト爲リタルトキ又ハ證據欠缺外ナル理由ヲ以テ刑事訴訟手續ノ開始若クハ實行ヲ爲シ得サルトキニ限り再審ヲ求ムルコトヲ得

第四百七十一條 原狀回復ノ訴ハ原告若クハ被告カ自己ノ過失ニ非スシテ前訴訟手續ニ於テ

殊ニ故障又ハ控訴若クハ附帶控訴ニ依リ原狀回復ノ理由ヲ主張スルコト能ハサリシトキニ限り之ヲ爲スコトヲ得

第四百七十一條 不服ヲ申立テラレタル判決前ニ同一ノ裁判所又ハ下級ノ裁判所ニ於テ爲シタル裁判ニ關スル不服ノ理由ハ再審ヲ求ムル訴ト共ニ之ヲ主張スルコトヲ得但不服ヲ申立テラレタル判決カ其裁判ニ根據スルトキニ限ル

第四百七十二條 再審ヲ求ムル訴ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所ノ管轄ニ專屬ス同一ノ事件ニ付キ一分ハ下級ノ裁判所又一分ハ上級裁判所ニ於テ爲シタル數箇ノ判決ニ對スル訴ハ上級ノ裁判所ノ管轄ニ專屬ス督促手續ニ依リテ區裁判所ノ發シタル執行命

令ニ對シ再審ヲ求ムル訴ハ其命令ヲ發シタル區裁判所ノ管轄ニ專屬ス然レトモ其請求カ區裁判所ノ管轄ニ屬セサルトキハ請求ニ付テノ訴訟ヲ管轄スル裁判所ニ專屬ス

第四百七十三條 訴ノ提起及ヒ其後ノ訴訟手續ニハ以下數條ニ於テ別段ノ規定ヲ設ケサル限リハ其訴ニ付キ辯論及ヒ裁判ヲ爲ス可キ裁判所ノ訴訟手續ニ關スル規定ヲ準用ス

第四百七十四條 訴ハ一箇月ノ不變期間内ニ之ヲ起ス可シ此期間ハ原告若クハ被告カ不服ノ理由ヲ知リタル日ヲ以テ始マル若シ原告若クハ被告カ判決ノ確定前ニ不服ノ理由ヲ知リタルトキハ判決ノ確定ヲ以テ始マル

判決確定ノ日ヨリ起算シテ二箇年ノ滿了後ハ

訴ヲ爲スコトヲ得ス
前二項ノ規定ハ第四百六十八條第四號ノ場合
ニ之ヲ適用セス此場合ニ於テ其訴ノ提起ノ期
間ハ原告若クハ被告又ハ其法律上代理人カ送
達ニ因リ判決アリタルコトヲ知リタル日ヲ以
テ始マル

第四百七十五條

訴狀ニハ左ノ諸件ヲ具備スル
コトヲ要ス

第一 取消又ハ原狀回復ノ訴ヲ受ケル判決
ノ表示

第二 取消又ハ原狀回復ノ訴ヲ起ス旨ノ陳
述

此他訴狀ハ準備書面ニ關スル一般ノ規定ニ從
ヒテ之ヲ作り且不服ノ理由ノ表示、此理由及
ヒ不變期間ノ遵守ヲ明白ナラシムル事實ニ付

テノ證據方法又如何ナル程度ニ於テ不服ヲ申
立テラレタル判決ヲ廢棄若クハ破毀ス可キヤ
ノ申立又本案ニ付キ更ニ如何ナル裁判ヲ爲ス
可キヤノ申立ヲモ掲ク可シ

第四百七十六條

判然許ス可カラサル訴又ハ判
然法律上ノ方式ニ適セス若クハ其期間ノ經過
後ニ起シタル訴ハ裁判長ノ命令ヲ以テ之ヲ却
下ス可シ

此却下ノ命令ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコト
ヲ得

第四百七十七條

原告ハ口頭辯論ノ期日ニ於テ
相手方ノ陳述ノ有無ニ拘ハラズ再審ヲ求ムル
理由及ヒ法律上ノ期間ノ遵守ヲ明白ニスル事
實ヲ疏明ス可シ

第四百七十八條

許ス可カラサル訴又ハ法律上

ノ方式ニ適セス若クハ其期間ノ經過後ニ起シ
タル訴ハ職權ヲ以テ判決ニ因リ不適法トシテ
之ヲ棄却ス可シ

第四百七十九條

本案ニ付テノ辯論及ヒ裁判ハ
不服申立ノ理由ノ存スル部分ニ限り更ニ之ヲ
爲ス可シ

裁判所ハ本案ニ付テノ辯論前ニ再審ヲ求ムル
理由及ヒ許否ニ付キ辯論及ヒ裁判ヲ爲スコト
ヲ得此場合ニ於テハ本案ニ付テノ辯論ハ再審
ヲ求ムル理由及ヒ許可ニ付テノ辯論ノ續行ト
看做ス

第四百八十條

原告ノ不利益ト爲ル判決ノ變
更ハ相手方カ再審ヲ求ムル訴ヲ起シテ變更ヲ
申立テタルトキニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得
ス

第四百八十一條

訴カ上告裁判所ニ屬スルトキ
ハ上告裁判所ハ再審ヲ求ムル理由及ヒ其許否
ニ付テノ辯論ノ完結カ係争事實ノ確定及ヒ辯
論ニ繫ルトキト雖モ其完結ヲ爲ス可シ

第四百八十二條

上訴ハ訴ニ付キ裁判ヲ爲シタ
ル裁判所ノ判決ニ對シ一般ニ爲スコトヲ得
キトキニ限り之ヲ爲スコトヲ得

第四百八十三條

第三者カ原告及ヒ被告ノ共謀
ニ因リ第三者ノ債權ヲ詐害スル目的ヲ以テ判
決ヲ爲サシメタリト主張シ其判決ニ對シ不服
ヲ申立ツルトキハ原狀回復ノ訴ニ因レル再審
ノ規定ヲ準用ス

此場合ニ於テハ原告及ヒ被告ヲ共同被告ト爲
ス

第五編 證書訴訟及ヒ爲替訴訟

第四百八十四條

一定ノ金額ノ支拂其他ノ代替物若クハ有價證券ノ一定ノ數量ノ給付ヲ目的トスル請求ハ請求ヲ起ス理由タル總テノ必要ナル事實ヲ證書ニ依リ證スルコトヲ得ヘキトキハ證書訴訟ヲ以テ之ヲ主張スルコトヲ得

第四百八十五條

訴狀ニハ證書訴訟トシテ訴フル旨ノ陳述ヲ掲ケ且證書ノ原本又ハ謄本ヲ添フルコトヲ要ス

第四百八十六條

本案ノ辯論ハ妨訴ノ抗辯ニ基キ之ヲ拒ムコトヲ得ス然レトモ裁判所ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ此抗辯ニ付キ辯論ノ分離ヲ命スルコトヲ得

第四百八十七條

反訴ハ之ヲ爲スコトヲ得ス證書ノ眞否及ヒ第四百八十四條ニ掲ケタル以外ノ事實ニ關シテハ書證ノミヲ以テ適法ノ證

據方法ト爲スコトヲ得

書證ノ申出ハ證書ノ提出ヲ以テノミ之ヲ爲スコトヲ得

第四百八十八條

原告ハ口頭辯論ノ終結ニ至ルマテハ被告ノ承諾ヲ要セスシテ通常ノ手續ニモ訴訟ヲ繫屬セシメテ證書訴訟ヲ止ムルコトヲ得

第四百八十九條

訴ヲ以テ主張シタル請求カ理由ナシト見ユルトキハ原告ノ請求ヲ却下ス可シ證書訴訟ヲ許ス可カラサルトキ殊ニ適法ノ證據方法ヲ以テ原告ノ義務タル證據ヲ申出テス又ハ完全ニ之ヲ舉ケサル場合ニ於テハ被告カ口頭辯論ノ期日ニ出頭セス又ハ法律上ノ理由ナキ異議若クハ證書訴訟ニ於テ許ササル異議

ノミヲ以テ訴ニ對シ抗辯シタルトキト雖モ此訴訟ニ於テハ其訴ヲ許ササルモノトシテ之ヲ却下ス可シ

第四百九十條

證書訴訟ニ於テ適法ノ證據方法ヲ以テ被告ノ義務タル證據ヲ申出テス又ハ完全ニ之ヲ舉ケサルトキハ被告ノ異議ハ證書訴訟ニ於テ許ササルモノトシテ之ヲ却下ス可シ

第四百九十一條

主張シタル請求ヲ争ヒタル被告ニハ敗訴ノ言渡ヲ受ケタル總ノ場合ニ於テ其權利ノ行使ヲ留保ス可シ

判決ニ此留保ヲ掲ケサルトキハ第二百四十二條ノ規定ニ依リ判決ノ補充ヲ申立ツルコトヲ得

留保ヲ掲ケタル判決ハ上訴及ヒ強制執行ニ付

テハ之ヲ終局判決ト看做ス

第四百九十二條

被告ニ權利ノ行使ヲ留保シタルトキハ訴訟ハ通常ノ訴訟手續ニ於テ繫屬ス此手續ニ於テ證書訴訟ヲ以テ主張シタル請求ノ理由ナカリシコトノ顯ハルルトキハ前判決ヲ廢棄シ原告ノ請求ヲ却下シ且其生セシメタル費用ノ全部又ハ一分ノ辨濟ヲ原告ニ言渡シ又前判決ニ基キ被告ヨリ支拂ヒ又ハ給付シタルモノノ辨濟ヲ申立ニ因リ原告ニ言渡ス可シ右手續ニ於テ原告若クハ被告カ出頭セサルトキハ關席判決ニ關スル規定ヲ準用ス

第四百九十三條

第四百二十六條及ヒ第四百二十七條ノ規定ハ證書訴訟ニ之ヲ適用セス

第四百九十四條

商法ニ規定シタル手形ニ因リ請求ヲ證書訴訟ヲ以テ主張スルトキハ爲替訴

訟下シテ以下二條ニ掲クル特別ノ規定ヲ適用ス

第四百九十五條 爲替ノ訴ハ支拂地ノ裁判所又ハ被告カ其普通裁判籍ヲ有スル地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

數人ノ爲替義務者カ共同ニテ訴ヲ受クヘキトキハ支拂地ノ裁判所又ハ被告ノ各人カ其普通裁判籍ヲ有スル地ノ各裁判所之ヲ管轄ス

第四百九十六條 訴狀ニハ爲替訴訟トシテ訴フル旨ヲ掲クルコトヲ要ス

訴ノ許ス可キモノナルトキハ直チニ口頭辯論ノ期日ヲ定ム

口頭辯論ノ期日ト訴狀送達トノ間ニハ少ナク下モ二十四時ノ時間ヲ存スルコトヲ要ス

第六編 強制執行

第一章 總則

第四百九十七條 強制執行ハ確定ノ終局判決又ハ假執行ノ宣言ヲ付シタル終局判決ニ因リテ之ヲ爲ス

第四百九十八條 判決ハ適法ナル故障ノ申立又ハ適法ナル上訴ノ提起ニ付キ定メタル期間ノ満了前ニハ確定セサルモノトス

判決ノ確定ハ故障若クハ上訴ヲ其期間内ニ申立者クハ提起スルニ因リテ遮断ス

第四百九十九條 原告若クハ被告カ判決ノ確定ニ付キ證明書ヲ求ムルトキハ第一審裁判所ノ書記ハ記録ニ基キ之ヲ付與ス

訴訟カ猶ホ上級審ニ於テ繫屬中ナルトキハ上級裁判所ノ書記ハ判決ノ確定ト爲リタル部分ノミニ付キ證明書ヲ付與ス

得其裁判ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第五百一條 左ノ判決ニ付テハ職權ヲ以テ假執行ノ宣言ヲ爲ス可シ

第一 認諾ニ基キ敗訴ヲ言渡ス判決

第二 證書訴訟又ハ爲替訴訟ニ於テ言渡ス判決

第三 同一審ニ於テ同一ノ原告若クハ被告ニ對シ本案ニ付キ言渡シタル第二又ハ其後ノ關席判決

第四 假差押又ハ假處分ヲ取消ス判決

第五 養料ヲ支拂フ義務ヲ言渡ス判決但訴ノ提起後ノ時間及ヒ其提起前最後ノ三箇月間ノ爲ニ支拂フ可キモノナルトキニ限ル

判決ニ對シ上訴ノ提起ナキ場合ニ非サレハ證明書ヲ付與スルコトヲ得サルトキニ限リ上訴ヲ管轄スル裁判所ノ書記カ不變期間内ニ上訴ノ提起ナキコトヲ認メタル證明書ヲ以テ足ル

第五百條 原狀回復又ハ再審ヲ求ムル申立アルトキハ裁判所ハ申立ニ因リ保證ヲ立テシメ又ハ保證ヲ立テシメスシテ強制執行ヲ一時停止ス可キコトヲ命シ又ハ保證ヲ立テシメテ強制執行ヲ爲ス可キコトヲ命シ及ヒ保證ヲ立テシメテ其爲シタル強制處分ヲ取消ス可キヲ命スルコトヲ得

保證ヲ立テシメスシテ爲ス強制執行ノ停止ハ其執行ニ因リ償フコト能ハサル損害ヲ生ス可キコトヲ疏明スルトキニ限リ之ヲ許ス

右判決ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ

第五百二條 左ノ場合ニ於テハ申立ニ因リ假執行ノ宣言ヲ爲ス可シ

- 第一 總テノ住家其他ノ建物又ハ其或ル部分ノ受取、明渡、使用、占據若クハ修繕ニ關シ又ハ賃借人ノ家具若クハ所持品ヲ賃借人ノ差押ヘタルコトニ關シ賃借人ト賃借人トノ間ニ起リタル訴訟
- 第二 占有ノミニ係ル訴訟
- 第三 雇主ト雇人トノ間ニ雇期限一箇年以下ノ契約ニ關リ起リタル訴訟
- 第四 左ニ掲ケタル事項ニ付キ旅人ト旅店若クハ飲食店ノ主人トノ間ニ又ハ旅人ト水陸運送人トノ間ニ起リタル訴訟
- イ 賄料又ハ宿料又ハ旅人ノ運送料又ハ之ニ伴フ手荷物ノ運送料

ロ 旅店若クハ飲食店ノ主人又ハ運送人

- ニ旅人ヨリ保護ノ爲メ預ケタル手荷物、金錢又ハ有價物
 - 第五 此他財産權上ノ請求ニ關シ金額又ハ價額ニ於テ貳拾圓ヲ超過セサル訴訟但其物ノ價額ニ付テハ第三條乃至第六條ノ規定ヲ適用ス
- 第五百三條 前二條ニ掲ケタル外左ノ場合ニ於テハ財産權上ノ請求ニ關スル判決ニ限リ債權者ノ申立ニ因リ假執行ノ宣言ヲ爲ス可シ
- 第一 債權者カ執行ノ前ニ保證ヲ立テント申出ツルトキ
 - 第二 債權者カ判決ノ確定ト爲ルマテ執行ヲ中止セハ償ヒ難キ損害又ハ計リ難キ損害ヲ受ク可キコトヲ疎明スルトキ

第五百四條 債務者カ判決ノ決定ト爲ル前ニ判決ヲ執行セハ回復スルコトヲ得サル損害ヲ受ク可キコトヲ疎明シタルトキハ其申立ニ因リ左ノ宣言ヲ爲ス可シ

- 第一 第五百一條ノ場合ニ於テハ判決ヲ假ニ執行ス可カラサルコト
- 第二 第五百二條及ヒ第五百三條ノ場合ニ於テハ債權者ノ假執行ノ申立ヲ却下スルコト

第五百五條 總テノ場合ニ於テ裁判所ハ債務者ノ申立ニ因リ債權者豫メ保證ヲ立ツルトキハ假執行ヲ爲シ得ヘキ旨ヲ宣言スルコトヲ得

ルコトヲ許ス可シ

第五百六條 假執行ニ關スル申立ハ判決ニ接著スル口頭辯論ノ終結前ニ之ヲ爲ス可シ

第五百七條 假執行ニ付テノ裁判ハ判決主文ニ之ヲ掲ク可シ

第五百八條 職權ヲ以テ判決ノ假執行ヲ宣言ス可キ場合ニ於テ假執行ニ付テノ裁判ヲ爲ササルトキ又ハ判決ノ假執行ヲ宣言ス可キ債權者ノ申立ヲ看過シタルトキハ第二百五十二條及ヒ第二百四十三條ノ規定ニ從ヒ判決ノ補充ヲ爲スコトヲ得

第五百九條 第一審又ハ第二審ノ判決ニシテ假執行ノ宣言ナカリシモノ又ハ條件附ノ假執行ノ宣言アリタルモノハ上訴ヲ以テ不服ヲ申立テサル部分ニ限リ口頭辯論ノ進行中ニ爲シタ

ル原告若クハ被告ノ申立ニ因リ上級審ニ於テ其判決ニ假執行ノ宣言ヲ付ス可シ

第五百十條 本案ノ裁判又ハ假執行ノ宣言ヲ廢棄若クハ破毀又ハ變更スル判決ノ言渡アルトキハ假執行ハ其廢棄若クハ破毀又ハ變更ヲ爲ス限度ニ於テ效力ヲ失フ

假執行ノ宣言アリタル本案ノ判決ヲ廢棄若クハ破毀又ハ變更スルトキハ判決ニ基キ被告ノ支拂又ハ給付シタルモノノ辨濟ヲ被告ノ申立ニ因リ判決ヲ以テ原告ニ言渡ス可シ

第五百十一條 第二審ニ於テハ申立ニ因リ先ツ假執行ニ付キ辯論及ヒ裁判ヲ爲ス可シ

口頭辯論ノ延期ニ付テノ第四百十條ノ規定ハ此場合ニ於テハ之ヲ適用セス

第二審ニ於テ假執行ニ付キ爲シタル裁判ニ對

シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第五百十二條 假執行ノ宣言ヲ付シタル判決ニ對シ故障ヲ申立又ハ上訴ヲ起シタルトキハ第五百條ノ規定ヲ準用ス

第五百十三條 本編ノ規定ニ從ヒ原告若クハ被告ニ保證ヲ立ツル義務ヲ負ハシメ若クハ保證ヲ立テ又ハ供託ヲ爲スコトヲ許シタル場合ニ於テハ原告若クハ被告ハ其普通裁判籍ヲ有スル地ノ區裁判所又ハ執行裁判所ニ保證ヲ立テ又ハ供託ヲ爲スコトヲ得

保證ヲ立テ又ハ供託ヲ爲シタルモトニ付テハ求ニ因リ證明書ヲ付與ス可シ

第五百十四條 外國裁判所ノ判決ニ因ル強制執行ハ本邦ノ裁判所ニ於テ執行判決ヲ以テ其適法ナルコトヲ言渡シタルトキニ限り之ヲ爲

スコトヲ得

執行判決ヲ求ムル訴ニ付テハ債務者ノ普通裁判籍ヲ有スル地ノ區裁判所又ハ地方裁判所之ヲ管轄シ又普通裁判籍ナキトキハ第十七條ノ規定ニ從ヒテ債務者ニ對スル訴ヲ管轄スル裁判所之ヲ管轄ス

第五百十五條 執行判決ハ裁判ノ當否ヲ調査セスシテ之ヲ爲ス可シ

執行判決ヲ求ムル訴ハ左ノ場合ニ於テハ之ヲ却下ス可シ

第一 外國裁判所ノ判決ノ確定ト爲リタルコトヲ證明セサルトキ

第二 本邦ノ法律ニ依リ強テ爲サシムルコトヲ得サル行爲ヲ執行セシム可キトキ

第三 本邦ノ法律ニ從ヘハ外國裁判所カ管

轄ヲ有セサルトキ

第四 敗訴ノ債務者本邦人ニシテ應訴セザリシトキ且訴訟ヲ開始スル呼出又ハ命令ヲ受訴裁判所所屬ノ國ニ於テ又ハ法律上ノ共助ニ依リ本邦ニ於テ本人ニ送達セザリシトキニ限ル

第五 國際條約ニ於テ相互ヲ保セサルトキ

第五百十六條 強制執行ハ執行文ヲ付シタル判決ノ正本ニ基キ之ヲ爲ス

執行力アル正本ハ第一審裁判所ノ書記又訴訟カ上級裁判所ニ繫屬スルトキハ其裁判所ノ書記之ヲ付與ス

執行力アル正本ヲ求ムル申立ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第五百十七條 執行文ハ判決ノ末尾ニ之ヲ附記

ス
其文式左ノ如シ
前記ノ正本ハ被告某若クハ原告某ニ對シ強
制執行ノ爲ニ原告某若クハ被告某ニ之ヲ附
與ス
執行文ニハ裁判所書記署名捺印シ且裁判所ノ
印ヲ押ス可シ
第五百十八條 執行力アル正本ハ判決ノ確定シ
タルトキ又ハ假執行ノ宣言アリタルトキニ限
リ之ヲ付與ス
判決ノ執行力其旨趣ニ從ヒ保證ヲ立ツルコト
ニ繋ル場合ノ外他ノ條件ニ繋ル場合ニ於テハ
債權者カ證明書ヲ以テ其條件ヲ履行シタルコ
トヲ證スルトキニ限り執行力アル正本ヲ付與
スルコトヲ得

第五百十九條 執行力アル正本ハ判決ニ表示シ
タル債權者ノ承繼人ノ爲ニ之ヲ付與シ又ハ判
決ニ表示シタル債務者ノ一般ノ承繼人ニ對シ
之ヲ付與スルコトヲ得但其承繼カ裁判所ニ於
テ明白ナルトキ又ハ證明書ヲ以テ之ヲ證スル
トキニ限ル
此承繼カ裁判所ニ於テ明白ナルトキハ之ヲ執
行文ニ記載ス可シ
第五百二十條 第五百十八條第二項及ヒ第五百
十九條ノ場合ニ於テハ執行力アル正本ハ裁判
長ノ命令アルトキニ限り之ヲ付與スルコトヲ
得
裁判長ハ其命令前ニ書面又ハ口頭ヲ以テ債務
者ヲ審訊スルコトヲ得
右命令ハ執行文ニ之ヲ記載ス可シ

第五百二十一條 第五百十八條第二項及ヒ第五
百十九條ニ依リ必要ナル證明ヲ爲ス能ハサル
トキハ債權者ハ判決ニ基キ執行文ノ付與ニ付
キ第一審ノ受訴裁判所ニ訴ヲ起スコトヲ得
第五百二十二條 執行文ノ付與ニ對シ債務者カ
異議ヲ申立テタルトキハ其執行文ヲ付與シタ
ル裁判書記ノ屬スル裁判所之ヲ裁判ス
裁判長ハ其裁判前ニ假處分ヲ爲スコトヲ得殊
ニ保證ヲ立テシメ若クハ之ヲ立テシメスシテ
強制執行ヲ一時停止シ又ハ保證ヲ立テシメ強
制執行ヲ續行ス可キヲ命スルコトヲ得
第五百二十三條 債權者カ執行力アル正本ノ數
通ヲ求メ又ハ前ニ付與シタル正本ヲ返還セス
シテ更ニ同一判決ノ正本ヲ求ムルトキハ裁判
長ノ命令アルトキニ限り之ヲ付與スルコトヲ

得
裁判長ハ其命令ノ前ニ書面又ハ口頭ヲ以テ債
務者ヲ審訊スルコトヲ得
相手方ヲ審訊セスシテ執行力アル正本ノ數通
ヲ付與シ又ハ更ニ正本ヲ付與シタルトキハ其
旨ヲ相手方ニ通知ス可シ
正本ノ數通ヲ付與シ又ハ更ニ正本ヲ付與シタ
ルトキハ其旨ヲ明記ス可シ
第五百二十四條 執行力アル正本ノ付與前ニ判
決ノ原本ニ原告ノ爲メ若クハ被告ノ爲ニ之ヲ
付與スル旨且之ヲ付與スル日時ヲ記載ス可シ
第五百二十五條 執行力アル正本ノ效力ハ之ヲ
付與シタル裁判所ノ管轄内ニ止マラス總テ本
邦ノ裁判區域内ニ及フモノトス
第五百二十六條 債權者ハ一箇ノ地又ハ一箇ノ

方法ニテ強制執行ヲ爲スモ完全ナル辨濟ヲ得ル能ハサルトキハ數通ノ執行力アル正本ニ基キ數箇ノ地又ハ數箇ノ方法ニテ同時ニ強制執行ヲ爲ス權利ヲ有ス

第五百二十七條 債權者ハ執行ヲ爲ス可キ地ヲ管轄スル區裁判所ノ所在地ニ住居ヲモ事務所ヲモ有セサルトキハ其所在地ニ假住所ヲ選定シ其旨ヲ裁判所ニ届出ツ可シ

第五百二十八條 強制執行ハ之ヲ求ムル者及ヒ之ヲ受ケル者ノ氏名ヲ判決又ハ之ニ附記スル執行文ニ表示シ且判決ヲ既ニ送達シ又ハ同時ニ送達シタルトキニ限り之ヲ始ムルコトヲ得判決ノ執行力其旨趣ニ從ヒ債權者ノ證明ス可キ事實ノ到來ニ際ルトキ又ハ判決ノ執行力判決ニ表示シタル債權者ノ承繼人ノ爲ニ爲シ又

ハ判決ニ表示シタル債務者ノ承繼人ニ對シ爲ス可キトキハ執行ス可キ判決ノ外尙ホ之ニ附記スル執行文ヲ強制執行ヲ始ムル前ニ送達スルコトヲ要ス

若シ證明書ニ依リ執行文ヲ付與シタルトキハ亦其證書ノ附本ヲ強制執行ヲ始ムル前ニ送達シ又ハ同時ニ送達スルコトヲ要ス

第五百二十九條 請求ノ主張力或ル日時ノ到來ニ際ルトキハ其日時ノ滿了後ニ限り強制執行ヲ始ムルコトヲ得
若シ執行力債權者ヨリ保證ヲ立ツルコトニ際ルトキハ債權者カ保證ヲ立テタルコトニ付テノ公正ノ證明書ヲ提出シ且其附本ヲ既ニ送達シ又ハ同時ニ送達シタルトキニ限り其執行ヲ始ムルコトヲ得

第五百三十條 豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人、軍屬ニ對シテ爲ス強制執行ハ其上班司令官廳ニ通知ヲ爲シタル後ニ限り之ヲ始ムルコトヲ得

此官廳ハ債權者ノ求ニ因リ通知ノ受取證ヲ付與ス可シ

第五百三十一條 強制執行ハ此法律ニ於テ別段ノ規定ナキトキニ限り執達吏之ヲ實施ス債權者ハ強制執行ヲ委任スル爲ニ區裁判所書記ノ補助ヲ求ムルコトヲ得

裁判所書記ノ委任シタル執達吏ハ債權者ノ委任シタルモノト看做ス

第五百三十二條 執達吏ハ債權者ノ委任ニ因リテ爲ス行爲及ヒ職務上ノ義務ノ違背ヨリシテ債權者其他ノ關係人ニ對シ損害ヲ生セシメタ

ルトキハ第一ニ其實ニ任ス

第五百三十三條 債權者執行力アル正本ヲ交付シテ強制執行ヲ委任シタルトキハ執達吏ハ特別ノ委任ヲ受ケサルトキト雖モ支拂其他ノ給付ヲ受取り其受取りタルモノニ付キ有效ニ受取ノ證書ヲ作り之ヲ交付シ且債務者ニ於テ其義務ヲ完全ニ盡シタルトキハ執行力アル正本ヲ債務者ニ交付スルコトヲ得

第五百三十四條 執達吏ハ執行力アル正本ヲ所持スルヲ以テ債務者及ヒ第三者ニ對シ強制執行及ヒ前條ニ掲ケタル行爲ヲ實施スル權利ヲ有ス債權者ハ此等ノ者ニ對シ委任ノ欠缺又ハ制限ヲ主張スルコトヲ得ス
執達吏ハ其正本ヲ携帶シ關係人ノ求アルトキハ其資格ヲ證スル爲ニ之ヲ示ス可シ

第五百三十五條

執達吏ハ債務者カ其義務ヲ完
全ニ盡シタルトキハ執行力アル正本及ヒ受取
ノ證ヲ之ニ交付シ又其義務ノ一分ヲ盡シタル
トキハ執行力アル正本ニ其旨ヲ附記シ且受取
ノ證ヲ債務者ニ交付ス可シ
債務者カ後ニ債權者ニ對シ受取ノ證ヲ求ムル
權利ハ前項ノ規定ニ因リテ妨ケララルルコト無
シ

第五百三十六條

執達吏ハ執行ノ爲メ必要ナル
場合ニ於テハ債務者ノ住居、倉庫及ヒ筐匣ヲ
搜索シ又ハ閉鎖シタル戸扉及ヒ筐匣ヲ開カシ
ムル權利ヲ有ス
抵抗ヲ受ケル場合ニ於テハ執達吏ハ威力ヲ用
井且警察上ノ援助ヲ求ムルコトヲ得若シ兵力
ヲ要スルトキハ之ヲ執行裁判所ニ申立ツ可シ

第五百三十七條

執達吏ハ執行行爲ヲ爲スニ際
シ抵抗ヲ受ケルトキ又ハ債務者ノ住居ニ於テ
執行行爲ヲ爲スニ際シ債務者又ハ成長シタル
其家族若クハ雇人ニ出會ハサルトキハ成丁者
二人又ハ市町村若クハ警察ノ吏員一人ヲ證人
トシテ立會ハシム可シ

第五百三十八條

強制執行ニ付キ利害ノ關係ヲ
有スル各人ニハ其求ニ因リ執達吏ノ記録ノ閱
覽ヲ許シ及ヒ記録中ニ存スル書類ノ謄本ヲ付
與スルコトヲ要ス

第五百三十九條

夜間及ヒ日曜日並ニ一般ノ祝
祭日ニハ執行裁判所ノ許可アルトキニ限り執
行行爲ヲ爲スコトヲ得

第五百四十條

強制執行ノ際之ヲ示ス可シ
執達吏ハ各執行行爲ニ付キ調

書ヲ作ル可シ

此調書ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 調書ヲ作りタル場所年月日

第二 執行行爲ノ目的物及ヒ其重要ナル事
情ノ略記

第三 執行ニ與カリタル各人ノ表示

第四 右各人ノ署名捺印

第五 調書ヲ其各人ニ讀聞セ又ハ閱覽セシ
メ其承諾ノ後署名捺印ヲ爲シタルコト
ノ開示

第六 執達吏ノ署名捺印

第四號及ヒ第五號ノ要件ヲ具備スルコト能ハ
サルトキハ其理由ヲ記載ス可シ

第五百四十一條 執行行爲ニ屬スル催告其他ノ
通知ハ執達吏口頭ヲ以テ之ヲ爲シ且調書ニ之

ヲ記載ス可シ

若シ口頭ヲ以テ催告又ハ通知ヲ爲ス能ハサル
トキハ第三百三十九條、第四百四條及ヒ第四百
十五條乃至第四百九條ノ規定ヲ準用シテ其
調書ノ謄本ヲ送達シ又別ニ送達證ヲ作ラサル
トキハ調書ニ其送達ヲ爲シタルコトヲ記載ス
可シ

若シ強制執行ノ地ニ於テモ執行裁判所ノ管轄
内ニ於テモ送達ヲ爲シ能ハサルトキハ催告又
ハ通知ヲ受ケ可キ者ニ郵便ヲ以テ調書ノ謄本
ヲ送達シ且之ヲ郵便ニ付シタルコトヲ調書ニ
記載ス可シ

第五百四十二條

執行行爲ノ際債務者ニ爲ス可
キ送達及ヒ通知ハ債務者ノ所在明カナラサル
トキ又ハ外國ニ在ルトキハ之ヲ必要トセス

第五百四十三條

此法律ニ於テ裁判所ニ任カセタル執行行為ノ處分又ハ其行為ノ共力ハ執行裁判所トシテ區裁判所ノ管轄ニ屬ス
法律ニ於テ別段ニ裁判所ヲ指定セサル各箇ノ場合ニ於テハ執行手續ヲ爲ス可キ地又ハ之ヲ爲シタル地ヲ管轄スル區裁判所ヲ以テ執行裁判所ト看做ス
執行裁判所ノ裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

第五百四十四條

強制執行ノ方法又ハ執行ニ際シ執達吏ノ遵守ス可キ手續ニ關スル申立及ヒ異議ニ付テハ執行裁判所之ヲ裁判ス又執行裁判所ハ第五百二十二條第二項ニ定メタル命ヲ發スル權ヲ有ス
執達吏カ執行委任ヲ受クルヲ拒ミ若クハ委任

第五百四十五條

ニ從ヒ執行行為ヲ實施スルコトヲ拒ミタルトキ又ハ執達吏ノ計算セシ手數料ニ付キ異議アルトキハ執行裁判所ハ之ヲ裁判スル權ヲ有ス
二關スル債務者ノ異議ハ訴ヲ以テ第一審ノ受訴裁判所ニ之ヲ主張ス可シ
右ノ異議ハ此法律ノ規定ニ從ヒ遅クトモ異議ヲ主張スルコトヲ要スル口頭辯論ノ終結後ニ其原因ヲ生シ且故障ヲ以テ之ヲ主張スルコトヲ得サルトキニ限り之ヲ許ス
債務者カ數箇ノ異議ヲ有スルトキハ同時ニ之ヲ主張スルコトヲ要ス

第五百四十六條

前條ノ規定ハ第五百十八條第二項及ヒ第五百十九條ノ場合ニ於テ債務者カ執行文付與ノ際證明シタリト認メラレタル事

第五百四十七條

強制執行ノ續行ハ前二條ノ場合ニ於ケル異議ノ訴ノ提起ニ因リテ妨ケラルルコト無シ
然レトモ異議ノ爲メ主張シタル事情カ法律上理由アリト見エ且事實上ノ點ニ付キ疏明アリタルトキハ受訴裁判所ハ申立ニ因リ判決ヲ爲スニ至ルマテ保護ヲ立テシメ若クハ之ヲ立テシメスシテ強制執行ヲ停止ス可キコトヲ命シ又ハ保證ヲ立テシメテ強制執行ヲ續行ス可キ

第五百四十八條

受訴裁判所ハ異議ノ訴ニ付キ裁判スル判決ニ於テ前條ニ掲ケタル命ヲ發シ又ハ既ニ發シタル命ヲ取消シ之ヲ變更シ若クハ之ヲ認可スルコトヲ得
判決中前項ニ掲ケル事實ニ限り職權ヲ以テ假執行ノ宣言ヲ爲ス可シ

實ノ到來ニシテ此ニ因リ判決ノ執行ヲ爲シ得ヘキモノヲ爭ヒ又ハ認メラレタル承繼ヲ爭フトキハ亦之ヲ準用ス但此場合ニ於テ第五百二十二條ノ規定ニ從ヒ執行文ノ付與ニ對シ異議ヲ申立ツル債務者ノ權ハ此カ爲ニ妨ケラルルコト無シ

コトヲ命シ又ハ其爲シタル執行處分ヲ保證ヲ立テシメテ取消ス可キヲ命スルコトヲ得
右裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲シ又急迫ナル場合ニ於テハ裁判長之ヲ爲スコトヲ得
急迫ナル場合ニ於テハ執行裁判所モ亦此權利ヲ行使スルコトヲ得此場合ニ於テハ執行裁判所ハ受訴裁判所ノ裁判ヲ提出セシムル爲ニ相當ノ期間ヲ定ム可シ其期間ヲ徒過シタルトキハ債權者ノ申立ニ因リ強制執行ヲ續行ス

右裁判ニ對スル不服ニ付テハ第五百十一條ノ規定ヲ準用ス

第五百四十九條 第三者カ強制執行ノ目的物ニ付キ所有權ヲ主張シ其他目的物ノ讓渡若クハ引渡ヲ妨クル權利ヲ主張スルトキハ訴ヲ以テ債權者ニ對シ其強制執行ニ對スル異議ヲ主張シ又債務者ニ於テ其異議ヲ正當ナリトセサルトキハ債權者及ヒ債務者ニ對シテ之ヲ主張ス可シ

右訴ヲ債權者及ヒ債務者ニ對シテ起ストキハ之ヲ共同被告ト爲ス

右訴ハ執行裁判所ノ管轄ニ屬ス然レトモ訴訟物カ區裁判所ノ管轄ニ屬セサルトキハ執行裁判所ノ所在地ヲ管轄スル地方裁判所之ヲ管轄ス

強制執行ノ停止及ヒ既ニ爲シタル執行處分ノ取消ニ付テハ第五百四十七條及ヒ第五百四十八條ノ規定ヲ準用ス但執行處分ノ取消ハ保證ヲ立テシメスシテ之ヲ爲スコトヲ得

第五百五十條 強制執行ハ左ノ書類ヲ提出シタル場合ニ於テ之ヲ停止シ又ハ之ヲ制限ス可シ

第一 執行ス可キ判決若クハ其假執行ヲ取消ス旨又ハ強制執行ヲ許サストシテ宣言シ若クハ其停止ヲ命シタル旨ヲ記載シタル執行力アル裁判ノ正本

第二 執行又ハ執行處分ノ一時ノ停止ヲ命シタル旨ヲ記載シタル裁判ノ正本

第三 執行ヲ免カラルル爲メ保證ヲ立テ又ハ供託ヲ爲シタル旨ヲ記載シタル公正ノ

證明書

第四 執行ス可キ判決ノ後ニ債權者カ辨濟ヲ求ケ又ハ義務履行ノ猶豫ヲ承諾シタル旨ヲ記載シタル證書

第五百五十一條 前條第一號及ヒ第三號ノ場合ニ於テハ既ニ爲シタル執行處分ヲモ取消ス可ク第四號ノ場合ニ於テハ既ニ爲シタル執行處分ヲ一時保持セシム可ク第二號ノ場合ニ於テハ其裁判ヲ以テ從前ノ執行行為ノ取消ヲ命セサルトキニ限り既ニ爲シタル執行處分ヲ一時保持セシム可シ

第五百五十二條 強制執行ノ開始後ニ債務者カ死亡スルトキハ強制執行ハ遺産ニ對シ之ヲ續行ス可シ

債務者ノ知ルコトヲ要スル執行行為ヲ實施ス

ル場合ニ於テ相續人アラサルトキ又ハ相續人ノ所在明カナラサルトキハ執行裁判所ハ債權者ノ申立ニ因リ遺産又ハ相續人ノ爲メ特別代理人ヲ任ス可シ

第五百五十三條 強制執行ノ開始後ニ月主タリシ債務者カ其地位ヲ辭シ又ハ之ヲ失ヒタルトキハ此變更ノ生モシ當時債務者ノ所持シタル財産ニ付キ前條ノ規定ヲ準用ス

第五百五十四條 強制執行ノ費用ハ必要ナリシ部分ニ限り債務者ノ負擔ニ歸ス此費用ハ強制執行ヲ受クル請求ト同時ニ之ヲ取立ツ可シ

強制執行ノ基本タル判決ヲ廢棄若クハ破毀シタルトキハ其費用ハ之ヲ債務者ニ辨濟ス可シ

第五百五十五條 執行ノ爲メ官廳ノ援助ヲ必要トスルトキハ裁判所ハ其援助ヲ官廳ニ求ム可シ